
アレグリア・パンディツ

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アレグリア・バンディッチ

【Zコード】

N1295F

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

タグザムティアとライスカイス、二つの星による地球の統治権を賭けた戦いが始まった。タグザムティア軍の少女、ルキロは今回の戦争に対して疑惑を抱いたことから、反逆罪により追われる身となる。ライスカイスの少年兵、カイと共に遠い昔に地球から抹消された歴史を知ることになる。

第一章 赤い髪の少女

それを確認した瞬間、無防備にも内部の操縦席をのぞかせていました。胸部外扉が微かな音をたてて閉じた。操縦席内の機械が破損せぬよう、と。候補が腐るほどいる操縦者の命などよりも、金のかかる精巧な機械部品のほうが遙かに大切なのである。そのためのプログラムだ。

胸部の装甲を、数発の弾丸が虚しく跳弾し、オレンジ色の火花が散った。

一番外部の装甲が閉じたのに続いて、内部でいくつもの薄い装甲が左右から、上下から次々と閉じ重なっていく。

……ノウハ、シンパクスウ、テイシ、カクニン。

マニユアルパイロット、カイジヨ。

キタイノレイキヤクノノチ、プログラム、ヘンコウ。

オートパイロット……プログラムP 2、イコウスル。

薄暗闇の窮屈な棺桶には、大小無数の計器類が並び、様々な色の信号灯が明滅している。

閉じた装甲板の裏側は大きなスクリーンとなつており、荒れ地と、そこにポツンと存在する自動車を映し出していた。自動車の屋根に銃を両手に構えた少年が立っていた。空を……こちらを、見上げていた。それは、困惑の表情であった。高解像度スクリーンは、その手の震えまで捉えていた。

少年は目を見開いていた。少年の半ば錯乱した狂気の世界の中、自分の網膜が……脳が捉えた映像が、一瞬にして現実の世界に引き戻した。だが、それは、彼をますます混乱させるばかりだった。

計器の一つが素早い点滅を始めた。まるで透明な手がそこにあるかのように、中央の大きなレバーが大きく引かれた。スクリーン上

の少年の姿が……地面が、ゆっくりと、下へと流れて消えていく。薄暗い黄色の雲と、全体に広がる赤紫色の空、それが画面一杯に広がった。

それは上昇を続けた。

今度は何を……そして、誰を護るのだろうか。それは、誰の意志で。

第一章 赤い髪の少女

1

地獄への搖りかごは、闇と不快な熱気とに包まれていた。

どのような極寒極暑の地での戦いになるか分からない。故に必要な最低限の空調設備は搭載されている。だが本来の目的はあくまでも機械を守るために云う事であり、搭乗者に快適さを楽しんでもらうためのものではない。機体冷却のあおりによる熱波があまりに酷くて、内部空調の効果など微々たるものでしかない。

しかしもう、搭乗者は慣れっこのようだ。汗をかきこすれ、それほど不快気な表情は浮かべていない。

指が素早く動く。書いてある文字など全く読みとる事の不可能そうな暗闇の中で、込み入った配列のキーを、慣れた手つきでなぞるように叩いていく。細い指が、実にしなやかに美しく動く。繰り返しの動作で、体が覚えてしまっているのだろう。

左側のパネルには、無数の小さなキーがみつしりと詰まっていた。右側はキーとレバースイッチが混在している。体を捻るよに密集したキー・ボードに手を伸ばしていたが、身を返して右側のレバーに指が伸びる。

続いて左手が頭上に伸びる。一本のレバーを捻りながら、前方に倒した。と同時にその右横にある青いボタンを押す。

計器のランプだけが唯一の光源であったこの狭い空間内が、少し

だけ明るくなる。薄暗い森林の画像が映っていた。外の風景を映し出しているようだ。機体前方、胸部装甲の裏側がすべて情報を映し出すスクリーンになつていて。その大きな画面の左右には、それぞれ小さなサブモニターが一機ずつ配置されており、文字や、線だけに簡素化した地形などを表示していた。

前方のメインスクリーン上に大小様々な文字や矢印等が表示される。サブモニターの一つにはその情報を捕捉する文字が絶えまなく表示され、上端へと流れて消えていく。

左手が再びキーに伸びる。スクリーンの文字情報が変化する。周囲の空気を構成する成分、温度、湿度、風量、その他音等の情報。キー操作を続ける。画面に人の形のコンピュータ画像が浮き出る。それは真っ赤に塗りつぶされているが、じつじつとした、まるで鎧を着ている騎士のように見えた。真っ赤なその形が、少しずつ位置を変えながら、次々に表示されていく。無数に出来た残像が、後ろから追うように消えていく。……空気の流れと温度を調べ、数分前のこの場所の様子を探知しているのだ。それにしても、スクリーンに映った通りの大きさだとするならば、それはなんという大きさだらうか。十メートルを軽く超えていた。

木々の隙間からどんどんよりと空一面を覆う雲が見えた。雲に切れ間が出来、太陽の光が差し込んでくる。カメラはそれを捉え、スクリーンに表示する。薄暗い空間で木々による緑と茶色だけを表示していたスクリーンだったが、その上空の光を受け明度が増した。そのスクリーンの光が、狭い「棺桶」の中をうつすらと照らし出した。

シートにすっぽりと納まつている小柄なその影は、何か考え方をしているかのように、うつむいている。燃えるような赤い髪が両目を覆つており、表情を完全にうかがい知ることは出来なかつたが、その口元は薄く笑つていた。端麗な、まだ幼さを残した赤く小さな唇、おもむろに開かれた。

「さあ、行こうか、ウーズイ。殺し合いの始まりだ」

小鳥のように高く澄んだ、そして無垢な少女の口調であった。

「宇宙人どもめ。ぐだらぬ、愚かなことを始めおつた。なにが地球の平和を最終的に守るための正義の戦だ。自らの勢力争いのための舞台として、下卑た陰謀劇の舞台として、この薄汚れた、落ちぶれた星を選んだだけだろうが。貴様らのつまらぬ将棋遊びなどで、この星をもう傷つけないでくれ。もう我々を……」

小高い丘に、一人の老人が立っていた。

鋸びた鉄のような赤黒い空。険しい山々が周囲一帯を遠く取り囲んでいる。

風が吹いている。遙か昔に人類の大半を滅ぼしたという、恐ろしい細菌を多量に含んだ死の風だ。皮肉なことに、現在の人類は常にこのような空気にさらされていないと、体内の抵抗力が保てず、他の未知の細菌に接した際に簡単に蝕まれてしまう。

眼下に人の影が二つ立つており、絡み合うように互いの位置を素早く入れ替え、戦っていた。足下から土煙が舞う。中世の騎士のように、右手にサーベル、左手に盾を持ち、突き、払い、なぐ……だが、その戦いは、姫を守る名誉のあるものではなかつた。そしてそれらは人間ですらなかつたのである。それは身長十メートルを超える、鋼の巨人であつた。

一体は草のような深い緑色を基調とした、無骨な装甲に覆われている。

一体は焦茶色の、流線型の目立つ装甲であつた。

茶色の巨人が、緑色の巨人の首を、刀の横なぎの一振りで、吹き飛ばした。力でねじ切つた、そんな強引な攻撃だつた。残つた胴体の切断面からはパイプ、コード、機械部品がのぞき、激しく火花を散らしている。茶色の巨人は返す刃を一端引くと、一気に緑色の巨人の胸を貫いた。貫かれた箇所が爆発を起こした。

巨人は、人型の戦闘兵器であつた。

茶色の巨人は、転がっている緑色の巨人の頭部を拾う。だが突然

にそれを地面に投げ捨てる。背中に備えられていた長銃を右手に持ち、近くの丘を目がけて撃つ。青い光の一閃。うねる鞭のように、獲物に襲いかかる蛇のように、細かい波を描く。

さきほどから丘の上に立ち、叫んでいた老人。すでに、彼の姿はそこには存在していなかつた。空気に溶けたかのように、一瞬にして存在が消失してしまつたのである。丘の一部が深くえぐられ、まるで月面のクレーターのようであつた。

戦いを邪魔するつるさい老人を始末した巨人は、再び首を拾つた。長銃を背中に戻そうとした矢先、自分自身の頭部が爆発し、大地に崩れた。倒れた背中に、さらに幾条もの光線が貫く。爆発が爆発を呼び、轟く低い爆音とともに、周囲の地形と自己の姿とを粉々に吹き飛ばした。

空中から銃を構えた緑色の巨人が十機、その巨体に見合つ特大の落下傘で降下してきた。それぞれ手にはその巨体に見合つ巨大な銃を持つている。

薄暗い空が、雷雲でも訪れたかのように、さらさらどんよりと暗くなる。

巨人だけではない。空中に戦闘艦のようなものが数隻浮かんでいる。それが空を覆い、地面に影を落としていたのである。

雷のような閃光に、轟音が続く。降下中の機体に一体、また一体と光が照射されると、それは爆発を起こし、煙をあげて落ちていった。地上からの攻撃であつた。

また別の巨人があらわれた。それは大きな翼を広げ、空中を飛んでいた。水中を進む魚のように、重力の存在など微塵も感じさせない優雅さであつた。それらもまた二種類あり、敵味方に別れているようだつた。

険しい山に遠方を囲まれた、のどかであつた丘陵地は、わずかな時間の間に轟風、爆音の耐えぬ乱戦の地と化した。

焦土となるも時間の問題であつた。

スクリーンには、鬱蒼とした森林の画像が映っている。左右の補助画面それぞれには、焦茶色の鎧で全身を覆われた巨人が銃を構えている姿が映し出されている。味方の機体だ。

メインスクリーン中央に表示されていた緑色の照準が縮小しながら左上へと動き出した。……標的を認識した。緑色の巨人が、右手に鈍い銀色の光を放つ刀を握り、立っていた。

「敵一機。散開」

端的に状況と、部下への指示を出す。

三機の反応は素早い。軽く跳躍し、右に左に散り、木陰に隠れた。三機が三機とも、腰に異様な物をぶらさげている。緑色の巨人の、首であった。頭部の輪郭を形作る装甲板に、ワイヤーロープを通して、二つ、三つと腰に下げている。何のまじないか習慣かは分からぬが、それにより彼らの一機一機が負け知らずの強者であることがわかる。それら三匹の猛禽が同時に、一匹の獲物を狙っていた。彼等にはそれが小鹿にでも見えていたのだろうか。

疾駆する黒い影が三方から迫り、襲い掛かる。それらが交差するのを待つていなければならぬ義理もなく、緑の巨人は自ら軽くタイミングをずらした。左側面から襲う一機に体を向け、軽く膝を折り、跳んだ。宙で一機のシリエットが重なる。不意をつかれた攻撃を受けたその一機の、様子がおかしかった。……首がなくなつていった。運よく爆発は起こらなかつたが、制御機能を失つたその巨体は、無様に地に落ち、地響きを立てた。

緑色の巨人はそのまま宙を駆け、そして巨木を両脚で蹴つた。たわみ、すべての枝が揺れ、葉が舞い落ちる。その巨人の体躯を考えれば、樹齢数千年の巨木と云えどもへし折れておかしくないものであつた。だがそうはならず、そのまま緑の巨人は反動で逆方向へと跳んだ。無骨な外観の装甲に似合わず、驚くほどに身軽な動作だつた。機体性能の故か、それとも操縦者の技量故かは分からぬ。

緑の巨人が着地ざまに横に払つた刀は、見事なタイミングで残る

一機のうち一機の着地時の足下を狙つた。だが、すでに精神的に持ち直したのか、その標的は背中と脚のバーニアの噴射により、一瞬だけ着地を遅らせた。銀色の光が虚しく空を切る。

緑の巨人はあらためて刀で突きかかろうとしたが、後ろからのもう一機の攻撃を察知し、急遽身を真横に踊らせた。巨木を背に、二機と向かい合う形となつた。

一対一となつたこの戦いは、膠着状態が続き、一様に決着を見せなかつた。長期戦となれば、一機で多数を相手にせねばならない側が不利となつていくのは必至だろう。もしも、疲労感を覚える普通の人間が戦つているならばの話だが。

不意に、焦茶一機のうちの一機、操縦席内部のスクリーン映像の右側半分が、真っ暗になり見えなくなつた。映写機の映像が投影されていいる幕を、誰かが引き裂いたかのように。

「この星から出でいけ、宇宙人め」

集音器がとらえた音声がそれぞれの操縦席内に反響した。少年達が木々の枝の上に立つていた。何やら液体のつまつた風船のような物をそれぞれ手にしている。

「逃げろ！」

エイジは叫んだ。二人の仲間が木から降りるのを確認すると、彼は残つた左手の水風船を適当な一機に投げつけた。素早く一段低い木の枝へ、さらに低い枝へ、そして地面へと飛び降りた。風船は巨人の左腕に命中した。粘度を帶びた黒い液体が弾け、こびりついた。

「タク、もうそれはいい。捨てろ。走れ。急いで逃げろ」

エイジは幼い子供に叫び、避難を促す。タクは、両腕に樹液のつまつた風船を沢山抱えていたが、兄の言葉に風船を捨て、小さな腕を力一杯振り回して走り出した。

エイジの親友であるカンツとウー、一人の少年はエイジのすぐあとに続いた。ウーは突然よろけ、地面に膝をついた。小太り気味の

ウーに、少しは瘦せろなどと軽口を叩きながらエイジは後戻りして彼に近寄った。ウーに手を差し出した。その時、多勢の側、地面や木々と同じような色をした人型兵器の一機が彼等の方を向いた。本体同様に特大サイズのその銃口を、彼等へと向ける。エイジはただ前方を、その銃口を睨んでいた。

銃口に、光が収束していく。

彼らの家にはまだ直接の被害はなかつた。家々の間隔はかなり離れているし、例え壊されても数ヶ月もあれば家族で建て直せるような粗末な造りだ。ただ、麓の町が少なからず戦火に巻き込まれ、物資の供給が滞つていてる状態が続いていた。だが、多少の蓄えはあるし、現在のところ子供にはあまり関係のない話だつた。

「彼等」の来襲は、わざわざ市民を混乱に陥れ、意図的に建物を破壊するようなものではなかつた。それよりもっと酷かつたのだ。

「ただ何も考えていないかのよう」に「好き勝手に戦つていいだけ。他人が巻き込まれても知つたこっちゃない」、町の人間たちは口々にそんなことを云つてゐた。要は地球人の存在価値は「彼等」にとつてはアリ以下なのだ。

エイジは十六歳。同年代の大半の少年達と一緒に、学校に通つた事はない。物心ついた時からずっと親の手伝いをしてきた。木を伐採し、乾燥させ、焼く。コツがいるが単純な、燃料を造るための仕事だ。

読み書きは母から教わつた。本を沢山持つてゐる友達がいて、難しい言葉を覚えてからは、よくその友達の家に遊びに行つた。貸りた本を、仕事の合間に読むのが楽しかつた。

特に歴史の本を読むのが好きだつた。現在の複雑なこの世界は、猿が自己の肉体を変化させながら少しづつ少しづつ築いてきたのだ。その年月の変化や、様々な人物の活躍を空想するだけで、夢幻のドラマを感じ、楽しく思えるではないか。ただし……近代の歴史はいくら読んでも理解出来なかつた。当然である。要所要所が、黒く消

されているのだ。破かれて無くなっている貞もあった。その一冊だけではなく、そして、その家だけではなかつた。

中途入学となるが、弟のタクは来年度から町の小学校へ行ける事になつてゐる。エイジが今までよりも多くの時間を仕事の手伝いにあてるから、と父親に頼んだのだ。

「町の学校」、と云つても、二クラスだけしかない。生徒の総数は数十人程度のもので、単純に年少年長で区分されている。授業料などはたいした額ではないのだが、大概の家庭は学問の必要性などあまり感じではないし、何よりも、働き手が減少することが困る。学問に興味を持つ者が変人扱いされる御時世といい、穴だらけの史書といい、人類を退行させようとする誰かの恐ろしい陰謀だろうか。などとエイジは本気で考えたこともあつたが、何を幼稚な友人に馬鹿にされるに決まつてゐるので誰にも話していない。自国の野蛮な歴史を隠す行為、正当化する行為など、今日始まつた事ではない。何しろ、彼のいるこの国は、「正義と自由の国」と云う大変に誇りのある国だつたそうだ。国民のためという今さら自己欺瞞にもならない大義名分のもと、上の連中が色々と策動するのは当然のことだつたかも知れない。すでに、国益云々といつ時代ではないといつのに。

彼は毎晩遅くまで父と一緒に仕事をする。ふと仕事の手を休め、夜空を見上げると、真つ黒な天幕に無数の星々が張り付いているようすに輝いてゐる時がある。恒星の輝き。昔、人類はそれらの恒星間を宇宙船で軽々と渡つたらしい。もっとも今となつては夜空に星が見える事など希少である。地球全体を覆う黒い雲と汚染された空気とで、滅多にその星々の輝きを見る事は出来ない。気流の関係で雲のほとんどが散つてしまつ時がある。風が夜にそのプレゼントを持ってきてくれるその時まで、エイジはただその雲の向こうの世界を想像するだけである。

大気汚染、地質汚染、資源枯渇、戦争内乱による技術の後退、二酸化炭素の増加に始まる地球温暖化による砂漠化の進行、海面の上

昇……無垢な魂の少年たちが、届かぬ星々にほのかな夢を見られるのも、時折幻想世界のように空を覆う虹色の光も、過去の人類の過ちがもたらした皮肉な結果であった。汚染などの諸問題は、遙か昔の出来事とはいえ、自分ら人類が解決していかねばならない問題であるはずだ、とエイジは考えている。今、目の前で自分に銃を向いている巨人、地球内のこととて彼らにあれこれ云われる筋合いなどはない。

自分たちは……地球人は、すでに十分に罰を受けたではないか。そして、今なお受けているではないか。自然を恐れて生きねばならない、惰弱な生き物へと堕ちたではないか。

だがそんな思いなど通じるはずもなく、その巨大な手の中にある銃の引き金は情け容赦なく引かれたのだつた。

光が彼の体を包み込んだ。

5

これだけ間近に父の姿を見た事はかつてなかつた。普段思つていてよりもずっと大きく、ずっと逞しい体だつた……ただそれだけの事に、あらためて尊敬の念を抱いていたかも知れない。普段下品な冗談ばかり云つてゐる父に語り尽くせない感謝を覚えていたかも知れない。こんな時でなければ。

エイジがウーの手を掴み、引き起こした時、巨人の構えた銃の圧倒的な威力が二人の少年に襲いかかろうとしていた。青白い光が銃口から放たれる。死ぬのか……。気づいた瞬間には、突き飛ばされるような横殴りの衝撃が彼を襲つた。激しく押され、そしてその腕の中にいた。エイジの父、トウジであった。クマのような体躯に完全に包まれていた。瞬きするほどのほんのわずかの後、集約された高密度の光の束が、からみ、一条のまっすぐな線となる。同時に、光の照射を受けた地面は音もたてずに消滅していた。半径一メートル、深さ五十センチほどの小さなクレーターが出来ていた。

機械の体の微かな駆動音、風の音、叫び声、三人の体が地面に倒れ転がる音。

エイジは、熱波を背に受けて氣を失い自分の上に倒れかかる父を抱き起こすと、ウーと協力してそれぞれ両方から父の肩を支え、歩き出した。周囲には薪が散らばっている。薪のほとんどは熱波により炭化し、崩れてしまっていた。トウジが背負っていた物だ。おかげで、致命傷は免れたようだが、重傷らしい様子に変わりはない。すでに巨人たちは自分達になど目もくれず、彼ら自身の崇高な戦いに戻っていた。

「負けるな。あんなの、やっつけちゃえ」

タクが叫んだ。二機を相手に戦っている緑色の機体に向けての言葉であった。タクは好奇心から、兄達について来ただけ。現在戦っている、巨人に乗る者達に、直接に迷惑を受けたことなどなかった。それどころか、麓の町などあちらこちらで、十メートル以上もある大きな大きな甲冑の戦士が戦っていると友達に聞き、少なからず心を躍らせてもらいたのである。

だが、エイジたちを助けるために犠牲になつた父の姿に、タクの心は変化した。ドングリのような幼い目には父達をめがけて銃を撃つたそいつが敵に見える。二対一の戦いを平然と挑む卑怯者に思えた。だから、タクは、まだ自分達に銃を向けているのを見たことがない、一機で戦う緑色の巨人に声援を送つた。

視界のきかぬ方の機体を狙う事は当然である。故にそれを庇う事も当然である。カメラを少年達の水風船で汚された一機の、頭部の一つ目から、まるで涙でも流れるかのように黒い水がこぼれた。洗浄液がカメラを洗つているのである。その機体の前に、無事な一機が立ちふさがろうと動く……その瞬間を狙われた。緑の機体は素早く踏み込み、刀を振り上げた。カメラを洗浄している一機に襲い掛かる。だがそれは、フェイントだった。庇うために立つっていた機体が、無防備な仲間を守ろうと反応したその時が、緑の巨人の狙いだつた。銀色の刀は、金属と金属がこすれる耳障りな音をたてながら

も、実にあつさりと、底おうとしていた一機の首を飛ばしていた。そしてその首が地面に落ちるよりも早く、すでに次の犠牲は作られていた。

エイジたちの見ている中、三機を相手に戦つた緑色の巨人は、その三機をそれほど苦戦もせずに、無傷で倒したのである。

6

少年達の視界には、残骸となつた三機が転がつている。緑色の巨人は、戦いの決着がついた後、さらに一機一機の胸部をサーベルで貫いていった。人間同士の決闘で、倒した相手の命を確実に奪うために心臓を突き刺しているようにも見えた。実際のところ、それと同じだろう。搭乗者の命を確実に奪つているのだ。

巨人は片膝をつき、地面にしゃがみ込んだ。胸の装甲は出入りするための扉にもなつてゐるらしい。弾けるように上に開く。さらに中にある一枚の薄い扉が左右にスライドする。

「うちゅう……じん？　え……いや、違う、あれは……」

少年たちは啞然とした。中から自分達と同じ姿をした……人間が出て來たのである。

誰も、情報として宇宙人が戦つてゐることは聞き知つていたが、姿を見たことはなかつた。単に漠然と宇宙人ととらえているだけで、考えてみれば、どんな姿なのか想像すらしていなかつた。地球に訪れた目的、地球を戦地とする目的はすでに語られているのだから、姿は既に地球人には知られている。ただ、自分達が情報に疎く、思ひ巡らせるこどもなく、単に知らなかつたのだ。

機体から降りてきたその姿に、少年達はみな啞然とし、無言になつた。

すらりとした体躯ではあるが、どこかまだ幼さの残る……。そう、それは少女だつた。肩まで伸びた赤い、柔らかそうな髪の毛が風になびく。材質はまったく見当がつかないが、微妙に青みがかつた白い色の、上下繋がつた服を着てゐる。腰の形やまだ発展途上中の胸

の膨らみなど、その肉体が作り出すラインは、地球の人間の少女のものと何ひとつとして変わることはないなかつた。機体内部がどれだけの熱気に包まれていたのかは分からぬが、少女は額の汗を拭いながら、風を気持ちよさそうに浴びている。

「おい、あれ地球人じゃないか」

やつと夢から覚めた心地のエイジは、隣のカンツに語りかける。「あの娘が宇宙人から奪つて操縦してたのか。それとも、あの娘はやつぱり宇宙人で、地球人と同じ姿をしているということなのか」

カンツからの返事はないが、エイジは一人続けていた。

「……なんか、ムチャクチヤかわいいなー。好みー」

ウーが鼻の下を伸ばしている。

「アホ、こんな時に」

カンツがウーのふつくりとした頬に軽く肘うちを食らわせる。手がかり足がかりのある昇降用ワイヤーロープで地面に降り立つた少女（の形態をした生物？）は、ひとしきり地球の風を堪能する、次の行動に移つた。自分が巨人を駆つて刀で吹つ飛ばした、地に転がつた巨大な首のところまで駆けて行くと、そこで何やら作業を始めた。何をしているのかエイジ達には全く知ることが出来ない。しばらくすると少女はそこから少し離れ、振り返つた。左腕をかざしてで目を覆うと同時に爆発が起きた。転がつた機械の首の、刀による切断面等から爆風による煙が激しく噴出した。内部の細かな機械が粉々に散り、表層の骨格だけとなる。……あの、呪術儀式のような、首を腰に吊るす行為のためだらうか。

少女は自分の乗つっていた機体に引き返そうとし、ふと足をとめた。少年達に気付いたようである。

ウーは少女の外観に安心したのか、様々な興味もあつたし、無意識の内に近づいていた。

少女と目が合う。

少女は赤い髪をなびかせながら、その大きな瞳で近寄つてくる小太りの少年を見ている。

「ウー、あんまり近づくな！ 馬鹿」

カンツの制止を聞かず、ウーはさうにゅうくりと近づいて行く。敵意のないことを示そうとしているのか、大きく両手を広げた。そのまま近付き続ける。少女は先ほどと変わらぬ体勢だが、少しその表情が訝しげなものになっている。ウーは少女と数歩の距離まで近寄ると、ようやく口を開いた。

「わたし、地球人」

二口りと笑つた瞬間、ウーの肥満した大きな肉体は後ろに吹き飛ばされた。

父トウジをとりあえず安全そうな場所に横たわらせて戻ってきたエイジは、ウーが苦しそうにもがきながら地面を転がつている様を目撃した。

腰の右側と、右の太股と、それぞれのホルスターに銃らしき物を吊していた少女は、ウーの動作に反応するや少しだけ身を屈めて右太股にあつた一丁を素早く引き抜くや、有無を云わせる隙も覚悟も与えずに、ただ発砲したのである。あまりの早業に、少年達は何が起きたのかまったく理解出来なかつた。ただ、地に横たわる少年と、銃を構えた少女の姿と云つた結果から、何が起きたのか判断出来た。ウーが、撃たれた！ エイジは混乱した。走る。少女のいる方へ。ウーが倒れ転がっている方へ。ウーの生死を確認し、助けようとしているのか、それとも少女に対して何かしようとしているのか、エイジには、何のために自分が走っているのかよく分からなかつた。ひたすらに、雄叫びをあげ、走つた。

少女は今度はエイジに銃を向け、引き金を引いた。この躊躇のなさは、別に彼女の残忍さを証明するものではなかつた。戦争の理由は別として、現在の状態から自身を守ることは全くもつて正当な行為だし、その銃に、殺傷能力などなかつたことを、エイジは身をもつて知つた。光弾も実弾も、音すらも出なかつた。引き金を引く微かな音だけだつた。その音と同時に、エイジはいきなり力が抜けたように、受け身すらとらずに倒れた。痛みは感じなかつたが、頭の

中が真っ白で、何も見えず、何も考えることが出来なかつた。

体の大きさの故か、ウーには、それほどの効果はなかつたようすで、すでに立ち直りかけていた。入れ違いにぐつたりとなつたエイジの体を抱きかかえ、立ち上がろうとした。

少女がすぐそばに立つていた。少女は自分たちに銃を向けていた。そして少女の、自分の髪の毛ほどに赤い小さな唇がゆつくりと動いた。

「ウ・ゴ・ク・ナ」

その呟きは確かに、地球の共通語だつた。そしてまた呟く。

「地球の、子供、か？」

エイジはもがいた。意識はすぐに回復したのだが、身体が全然思うように動かない。ウーがさすつてみたりと努力をするが、全く効果はなかつた。

得体の知れない科学力をその身をもつて教えられ、すっかり怯えた目で少女を見ていたウーの表情であつたが、それが微かに変化した。少女……ではなく、その後方に焦点がいついていた。少女がそれに気づき、振り返ろうとした瞬間、木々に隠れていたカンツが少女の背後から飛びかかつていった。二人は地面に倒れ込む。下側になつた、うつぶせに倒れた少女を、カンツはすかさず頭を押さえつけ動きを封じようとする。が、そうされる前に、少女は強引に体をひねり、カンツの顔面を殴りつけた。少なくとも、外見から彼等が判断していたよりも、遙かに強い腕力を彼女は有している。横殴りの一撃に、一瞬意識が遠くなる。だが、少女が武器を持っていることを恐れているカンツは、その程度のことではひるまない。少女の体の上に馬乗りになり、体の自由を奪おうとする。

エイジに目配せで合図され、ウーもその争いに加わつた。常に少女の体は地面と接触する側にあつたが、巧みに身を動かし、腕を極められる事を避けている。少年一人がかりでも、なかなか捕らえることが出来なかつた。そして、ウーの巨体にカンツは邪魔をされた形となり、少女の右手が一瞬自由になつた。まずい、とカンツが思

つたその瞬間、

「野蛮だな、地球人はつ！」

ウーの体が強烈な電流を浴びたかのように痙攣し、気を失った。少女とカンツの上にその体重がのしかかってくる直前に、少女は体を回転させ、逃げ出した。

カンツは気絶したウーにのしかかられ、まったく動くことが出来ない。

彼等に、少女はもう田もくれず、自分の乗っていた草色の巨人のもとへと駆け出した。

ようやく、エイジの体の感覚が少しずつ回復してきた。耳鳴りがしていた聴覚も、だいぶ正常になってきた。

みな、呆然としている。なんだか狐につままれたような気分だ。少しして、彼等の両の鼓膜が同じようにびりびりと振動した。少女の叫び声が飛び込んで来たのだ。

巨人に、タクが乗り込もうとしていたのである。一体どうやってワイヤーロープの昇降操作をしたものか、すでに胸部の操縦席に入ろうとしていた。

「お前達にはそのシステムは扱えない。取り込まれて、人格崩壊する前に、ウーズイから降りろ」

だがその叫びも虚しく、緑色の巨人、彼女の云う「ウーズイ」は動き出した。

「まさか」

少女は目を見開いている。表情と気持ちとの対応関係が地球人と同一であるとすれば、彼女のそれはまぎれもなく驚愕の表情であった。

まさかと云つてはみたものの、目の前で起きている事が現実である。少女は気を取り直したのか、尻餅をついた格好で手足を出鱈目に振り回すウーズイにゆっくりと近寄つていった。まだ垂れ下がつたまま収納されていないワイヤーロープに手をかけた。よじ登ろうとするものの、激しい揺れにままならない様子。ワイヤーロープが

出たままであることから、どうやら地球人の子供は、ただ強引に機体をよじのぼつただけのようだ。高い木々に囲まれている土地だし、木登りなどが得意なのだろう。

規則性のまったくないウーズィの動きに、少女はロープにしがみついているのがやつとで、何をすることもできず、ただ振り回されていた。

最初から辛い悲劇という訳ではなかつたが、眼前で演じられる物語は喜劇の域へと変じていた。父を負傷させられ、自分も変な銃で撃たれて苦しい思いを味わされたエイジであつたが、どうにもあの少女を憎しみの目で見ることが出来なかつた。

「カンツ、あのデッカイの中に、弟が乗つちまつたようだ。降ろすの手伝つて……」

まだたどたどしい口調でエイジが云いかける。その時、立ち上がりかけていた緑色の巨人ウーズィが、爆音と同時に、巻き起こつた重く激しい風に真横に吹き飛ばされた。肩の装甲が、細い木にぶつかり、木はそのままへし折れた。ウーズィも地に崩れ、けたたましい地響きを起こした。

閃光。あたり一面が、カメラのフラッシュのよう光り、そして再度爆音。津波のように、見えない熱波が風に乗つて襲つてきた。少女もその熱く激しい風を全身に受けた。華奢そうなその軽い体は簡単に遠くへと飛ばされた。咄嗟のことながら、体が無意識に反応し、受け身をとろうとする、が、間に合わなかつた。下生えがクッシュョンになつたものの、激しく地面に叩きつけられた。少女は苦痛に、短く鋭い悲鳴を漏らした。彼女は朦朧としかけた意識の中、敵の姿を見た。

「ギ・グルーヴか」

さきほど戦つていた機体と同じタイプだ。流線型をした焦げ茶色の巨人である。しかも三機、崖の上に並んでいる。一機が飛び降りると、残る一機も続く。三機の姿は完全に木々の中に隠れた。微かな機械の駆動音が、風に乗つて不気味に届いてくる。

少女は意識を強くもち、両腕で這うように地を進み、ウーズイへと向かつた。

ウーズイは倒れており、胸部の操縦席に乗り込むのは簡単だったが、地球人の子供を降ろすのには時間がかかりそうだった。神経、筋肉の動きから情報を読みとるための、触手のようなセンサーが、すっかり体に固定されてしまつており、いちいち解除している時間もない。少女は、自分も操縦席に入り込み、少々のプログラム変更をした。気絶している子供同様に、少女の体にも触手が伸びてからみついた。そしていくつかのスイッチ類に手をやり、素早く動かす。手慣れたいつもの動作である。だが……

少女の頭の中を、「何か」が襲つた。熱く激しい衝撃。鈍器で脳味噌を直接殴られているかのような痛み。体をしぼられるような激しい圧力。ねじまげられる窮屈な感覚。細い細い道を強引に押され、詰め込まれ、体の形がどんどんねじくれていく。肉体ともども、精神までが醜くいびつに変形してしまった。

通過した。それは、真つ暗で、広大な空間だつた。宇宙のように見えるが、実際は異なつていて。少女には、だいたいわかつていて。自分の精神の世界だ。だが……

「同調に失敗した時に起きる、あの感覚……いや……何か、違う……」

ともかく、自己の精神が見せる世界に変わりはないはず。なら、何が違う？　きらめく光の中、自分の肉体が浮いていた。意識と云う名の身体が。……さきほどまで、自分の隣で気を失つていた地球人の子供もいた。これか……

不意に感じる、溶けそうな感触……

なれば恍惚とした気持ちの中、少女は考えた。……自分が同調に失敗したからではない。逆だ。そして、この子供も機械と同調している……それで……

瞬時にして、暗黒と恐れの中に、その感情は飛んだ。少女は否定する。

「そんなはずはない。ありえない。こんな生き物などが……」

少女は叫んだ。その場を逃げ出した。その精神の世界を。

狭い操縦席の中、隣には地球人の子供が気絶していた。

少女は額の冷や汗を拭つた。

ウーズイは立ち上がる。

「動きが鈍い。同調率が低下していく。当然か」

地球人の子供が一緒にいるため。それと、自分自身の負った怪我のため。だが、今は都合がよかつた。得体の知れない、嫌悪と恐怖の世界から抜け出すために、自ら同調率を下げた程なのだから。「未知」は恐怖であり、危険である。だが今は敵の襲撃により自分の生命が危ない。考え事は、あとでゆっくりとすればいい。

ウーズイの巨大な手が、転倒した時に落ちた銃を拾う。だが、もう残り弾がない。再び地面に放り捨てた。

左腰の刀を外し、右手に構える。銀色の鈍い光沢を放つ刀に、次第に薄いピンク色の、霧のような光がまとい始める。再び敵、ギ・グルーグの砲撃。今度は狙いは正確だったが、少女は木々の向こうに見える銃口の先が輝く発射のタイミングを瞬時に判断し、ウーズイの巨躯を右へと跳躍させた。後ろの巨木がバリバリと音を立てて、裂けた。燃え出した。

「あまり、地球を壊すな」拡声器を通して、少女の声が聞こえた。「中身は全く違うのだろうけれど、同じような姿をしてる地球人の……あの目で睨まれると、夢見が悪くなる」

その言葉は、ギ・グルーグの行動には何も影響を与えたなかった。ウーズイは再び砲撃を受けた。しかも今度は単発の攻撃ではなく、大まかな狙いを定め、連続して撃つてきた。爆発、爆音、土が舞い上がり、嵐のような風が周囲の木々を揺さぶり、枝を折り、葉を吹き飛ばした。

巻き起こった風もおさまらぬうち、攻撃の一幕目が上がる。もうもうと吹き上がる煙の中から、刀を振り上げたギ・グルーグが踊り

出、ウーズイの頭部めがけて振り下ろした。ウーズイは、咄嗟に後ろに飛びすさりながら刀を真横に薙ぎ敵の刀を払う。バランスを崩してやつたつもりだつたが、次の瞬間、ギ・グルーグの蹴りが腹部を直撃、ウーズイは背中を木に叩きつけられた。

「アロ・イーグじやなくとも、こんなやつら……」

操縦者の意識が遠のく一瞬を狙つて、ギ・グルーグが素早く次の攻撃に出るが、ウーズイに乘る赤毛の少女は驚異的に早い立ち直りを見せた。ギ・グルーグの勢いをつけるために両手の刀を天高く振り上げる行為は、ただ大きな隙を作るだけのもの、自分自身を死の世界へと送り込むためだけのものしかなかつた。ウーズイの頭部、両頬が唸り、火花が散る。激しく上り立つ水蒸気。地球の古い兵器にあるバルカン砲の類だろうか。一つ目の巨人、ギ・グルーグのそれぞれの目を覆つっていた半透明の装甲板が、すべて砕け散つた。おそらく、三機とも視界は完全に奪われているに違いない。それでも、ギ・グルーグは防御を何も考えず、両手の刀を振り下ろした。だが、ウーズイはすでに、その振り下ろした先には存在していない。その刀は虚しく地面に突き刺さる。ギ・グルーグの腹部から刀の先端が突き出てきた。背後にウーズイが立つていた。刀を抜く。うつすらと、赤黒い液体がこびりついていた。再び刀を一閃させると、今度はギ・グルーグの首が飛んだ。

ギ・グルーグはまだ二機、残つている。だが、メインカメラを完全に破壊され、すでに戦闘力は無い。機体を脱出するつもりだつたのだろう。一機の胸部扉が同時に開いた。だが、その直後、軽く跳躍するように一機の間に割つて入つたウーズイは、一機の胸部に刀を突き刺し、もう一機の胸部に右足を蹴り込んだ。一機のギ・グルーグは胸部から火花を散らし、ほぼ同時に後ろに倒れた。木々が折れ、轟音があがる。刀で貫かれたほうの機体が、小さな爆発を起こし、操縦席から炎と煙が噴出した。

少女はウーズイの操縦席の中で、大きく息を吐いた。

キーを操作し、地球人からみついたセンサーを外していく。そ

して自分の分も外し終えると、扉を開いた。見える木々は今まで超高解像度スクリーンに映っていたものと同じだが、流れ込む空気が体にまとわりつく感触が、映像ではないことを教えてくれる。かなり汚染されている大気ではあるようだが、それと戦闘後にまだ命のあることを感じ風を浴びることの心地よさとはまた別の問題だ。

地球人の子供を抱きかかえようとした。が、赤毛の少女はふと思つたように子供から手を離し、身を前方へと屈めた。外へ出る前に、弾切れになつたままの銃にエネルギーを込めておこうと思ったのだ。足下付近にある小さな引き出しを引っ張る。少女はそこから、手のひら大の鉛色の箱を取り出し、銃の尻に当てる。エネルギーの充填は一瞬で終わった。

だが、少女は降りて来なかつた。

中で椅子に腰をかけたまま……そしてタクを抱きかかえたまま、氣を失つていたのである。

丸太を積んで固定しただけの単純な壁で、調度品もほとんどない。殺風景な部屋である。だが今誰が部屋に入つて来ても、部屋の造りなど微塵も気にとめることはないだろう。ここを出た後に、果たしてどんな模様の部屋であつたのかも全く覚えていらないだろう。部屋の真ん中、ある一点があまりにグロテスクで衝撃的であつたから。恐怖に顔を歪めた形相の、不気味な死骸の山が築かれていたから。安物回路に内蔵された電子音のように軽い音であつたが、その都度に放たれる、凝縮された青い光弾は男たちの額を的確に撃ち抜き、永遠の無へと送りこんでいく。

男たちはすでに手足を撃ち抜かれ、酷い怪我を負つており、身動きのままならない状態になつていた。ただがむしゃらに助けを求めるだけの、哀れな男たちの頭部を、一発、また一発と青い光弾が貫いていく。虐殺、そう表現しても大袈裟ではない光景だつた。焼け焦げた血の匂いが室内に広がつていた。

残るはただ一人。彼も右足と右手の筋を撃ち抜かれており、その部分はえぐられたかのように蒸発して消失している。血と肉とが熱に焦げて癒着している。

連續した射撃に温かくなつた銃口が、男の額に押しつけられた。エズワードンは、六人の仲間を目の前で殺され、足の激痛も忘れるほどの恐怖にかられていた。今まさに自分にも同じ運命が襲いかかるらうとしているのだ。自分の心臓の音をはつきりと聞くことができた。

目の前に、死神が立つていた。革製のような光沢を放つ真っ黒なスース、真っ黒なヘルメットをかぶつた人影。真直ぐとデンの額へと伸びた左手には、銀色の正方形の箱に握りをつけたような無骨な形の機器が鈍く光り輝いている。これが、彼らの銃なのである。そ

の銃の凶悪なまでの破壊力をデンは嫌というほどに見せ付けられた。何しろ、分厚い鉄板に隠れて身を護ろうとした仲間の一人を、その鉄板ごと貫いてしまったのだから。

デンはなんとか自分の喉の奥から言葉を搾り出すことが出来た。まだ言葉というものを忘れていた事に驚く冷静な自分もいた。「わかった。一時間以内に用意するよ。だが地球の物なんかで間に合うのかい」

また、軽い銃声。デンのこめかみから血が流れる。

「余計な事は云わなくていい」

ぐぐもつた声がヘルメットの奥から聞こえる。抑揚の全くない、若い男の声だった。

デンは足を引きずりながら、出ていった。苦痛をこらえる呻き声が、一步ごとに漏れる。だんだんと小さくなっていく。

黒いスーツの男は、銃を腰のホルスターに納めると、ヘルメットに手をかけ、ぬいだ。

透けるほどに色の白い、きめ細かい肌の男であった。造り物めいた、半透明の青い髪の毛が、窓から差し込む淡い陽光を浴びて輝いた。髪だけではなく、存在の全てが、誰かの造作物のようであった。高名な芸術家の彫刻のようであった。見た目は、二十歳前後であるか。眉目の秀麗なその顔には、何の表情も浮かんでいなかつた。男は、右手の甲、手袋にある小さな装置を口元に近づけた。

「カイだ。明日の回収地点は確認した。それまで、地上でジーン・ウーズイの首を稼ぐ」

カイ、と名乗った男は、通信を終えると山小屋の外へ出た。

なだらかな傾斜地になつており、辺り一面を針葉樹に囲まれている。

目の前に、茶色の鎧に身を包んだ巨人が跪いていた。木々の隙間から漏れる太陽の光を受け、鈍い輝きを放っている。全体的に流線型の装甲は、様々な攻撃をすべるように受け流してしまうだろう。薄暗い場所ならば、土や木々の色に完全に溶け込んでしまうであろう。

う黒みがかつた茶色のカラーリングが施されている。

ギ・グルーグと呼ばれるこの機体に乗つて、カイは戦つてきた。だが、機体に無茶をさせすぎて回路がショートしてしまった。通常の動作に問題のない程度ものではあつたが、戦いの場では何が起ころか分からぬ。修理を行つておこう、とギ・グルーグの外へ出たところ、デンたちに狙われたのである。

周囲を取り囲む木々は、全てを見ていた。近くに一件ポツンと建つていた山小屋から、男たちが出てきた。七人いた。近寄つて来る。彼等は何やら理解の出来ない台詞を云いながら（恐らく翻訳機の性能の問題ではないだろう）歩み寄り、不意に隠し持つていた銃でカイを狙つた。だが、一人は銃を持つた腕を蹴り折られ、一人は青い光弾で銃と腕とを落とされ……あつという間に全員とも戦闘不能に陥れられた。カイは、それでも情け容赦なく一人一人の頭部を狙いとどめを刺していったのである。

たまたま最後に残つたデンには、とどめを刺さず、生きる権利を与えてやる代償に回路修復に使えそうなパートを要求した。

酒盛りでもしていたのだろうか。食い散らかした跡。焚き火の跡。カイはそこに焼け残つた本を見つけ、少し興味を覚え、手に取つた。黒い皮カバーの本である。

小屋へ戻る。中は簡素極まりなかつた。物資の乏しい時代だけではなく、デンたちが食べられる物を食らい尽くし、燃やせる物を燃やし尽くしてしまつた結果であつた。もちろんまだ部屋の中央には死体の山が築かれている。

カイは手にした本を開いてみる。

一九七一年 九月十九日

彼らの戦闘は、この付近でも絶え間なく続いている。

彼等は我々と同じ姿をしているが、中身は悪魔の化身に違ひ無い。なんでも、この大陸に、一千機ずつをつぎ込んで、正々堂々とし

た星と星との戦いなのだそくな。

疲弊しきり、全世界中の政府が無力化し、科学的にも衰退し、物質はなくなり、大地のほとんどが汚染され、我々は免疫を持つているが人類の半を死滅させた死の風が常に吹く……その地球を守り、正しく復興させるため、地球を外部から統治するのだそうだ。低級な生物は、脳を別に持たなければ進化できない。単細胞生物から脱することが出来ない。ああ、我々にとつて實に有り難い行為だ。その統治権利をどちらが有するかを決するための戦争なんだそくな。本当に本当に有り難いことだ。汝らに光あれ、だ。

たしかに、いろいろな大罪をおかしてきたのではあるう。だが、科学文明が滅び、闇に怯えねばならない暗黒の時代を向かえたことで、我々も学んだのだ。つまらぬ者もまだ多くいるが、種全体として精神は浄化され、向上したはずなのだ。（せめてこの程度はどううと発言出来なければ、そもそも我々の歴史はあまりに悲しすぎるではないか）

政府の無力化も結構なことではないか。ぐどいようだが暗黒の時代を向かえることで、精神的に無垢で純然とした光の時代も来たとも云えるのだ。ところが、奴らは我々の精神を暗黒の状態に引き落とそうとしているのだ。一体、何度輪廻しても許されぬ罪などというものを、いつ我々

まだ燃え残った部分はかなりあるのだが、文章はここで終わっている。ペンを持つている最中にデンたちに乗り込まれたのだろうか。そして、撃たれ、切り刻まれ、この近くで永久に眠っているのだろうか。文章の途切れているその頁には、大量の血がかかっている。

カイは、本を投げ捨てた。どのみち、彼には何と書いてあるのかなど、全くわからない。生命体の意志を読みとり、相手に意志を伝えるだけの翻訳機に、文字の解読など不可能であった。

話に聞いていた、地球の紙というものを初めて見たので、つい手に取つてみただけで他意はない。

デンが戻るのは早かつた。頼まれた部品ではなく、武装して自動車に乗った十人近くの仲間を引き連れてきた。カイが撃ち抜いた彼の右太股には包帯が巻かれている。薬のせいかそれとも過度の興奮のせいか、もう全然苦痛を感じてはおらぬ様子で、カイを罵る言葉を吐いている。

カイが全く無防備な様子で小屋の中から出てくるのを見ると、怒りと、その後に襲い来るであろう快楽を想像し、奇怪な笑みを浮かべた。

「いいかてめえら、あの瘦せぎすのくそ野郎を……」

横を向き、他の男達を見回して叫ぼうとした瞬間、デンの左側頭部に小さな穴があき、同時に右側頭部から血と脳しじうが吹き出た。血と皮膚が蒸発し、音をたてる。小さな穴から一瞬湯気が立ち上る。予期もせぬきなり降りかかってきた赤黒いシャワーに、驚いた運転席の男が大きく口を開け、絶叫した。その口の中が青く輝いたと見えた刹那、その光はその男の首を突き破り、後部席にいた大男の胸板を貫いた。大男は奇声を発し、車から転げ落ちた。男はそのまま永遠に動くことはなかつた。

カイは銃を手にしていた。一瞬で三匹を屠殺したカイは、さらに二回引き金を引いた。結果を確かめもせず、小屋の中に身を躍らせた。閉まつた扉に銃弾の雨霰。櫻製とはいえ所詮木製である。瞬時に蜂の巣のような無数の穴があく。だがもうその先にカイはいない。カイは小窓から目をやる。小さな爆弾らしき物を持つた男が、それを投げようと手を振り上げた。カイはその爆弾めがけて銃を撃つ。正確な狙いだ。男が手にしていた物が爆発し、すぐ隣にいた男をも巻き込んだ。四肢が千切れ乱れ飛ぶ氣味の悪い光景が続く。わずか数秒で七人の仲間が地獄に叩き込まれる様を見て、残つた三人は逃げ出そうと、慌ててハンドルを握りなおす。カイはゆっくりと銃を手にした腕をあげた。確かめるように一発ずつ、三回撃つた。

カイは悠々と銃のエネルギー・カートリッジ交換を始めた。

その時である。地球人をあなどるあまり警戒心が鈍っていたのだろうか。小屋の中、奥の扉の向こうに気配と物音を察知した時にはもう遅かった。火薬が爆発する小さな音が響いた。扉に穴があき、飛び出した何かがカイの腹部を突き抜けた。カイの腹と背から血が流れた。無地の木の壁がカイが背にしていたところ赤く染まった。火薬を爆発させて、金属の弾を飛ばす。原始的かつ有効な殺傷兵器だ。カイは、自分がその銃弾に腹部を貫かれ、負傷したことを体を襲う激痛により認識した。だが、彼の表情は相変わらずであつた。痛覚などたがが脳に送られる情報の一つだ。そう云わんばかりである。

撃ち抜かれた瞬間、彼はもう反撃に移っていた。低く跳躍し、一瞬で扉へと迫る。扉を蹴った。何か柔らかいものを一緒に蹴飛ばす感触。扉が開く。そこは地下室への階段になっていた。扉と壁の間に挟まつているのは、まだ十歳にも満たない幼い子供であった。カイが押えていた扉に身体の自由を奪われ、右手に持つた銃をカイに向けることが出来ない。

「悪魔め。父ちゃん達のカタキ」

カイを睨み付けた。小屋の持ち主の子供だ。デン達から隠れ、母親と一緒に地下室に潜んでいた。地下室にも当然魔の手は伸びた。母親の機転により、この子だけ死角へと隠れ、難を逃れたのである。連れ去られた母親がどうなったのかは、子供には分からぬ。すでに何日も過ぎているのだろう。げつそりとやつれており、目だけが幼い子供とは思えぬ殺氣をはらんで輝いていた。自分の体力精神力が限界に近づいていた頃、運良く愚かな傭兵たちが仲間割れを起こして殺し合い、一人きりになつた。そう思い、出てきたのだろう。カイは子供を静かな表情で見つめた。すでにカイの腹部からの流れは止まつており、服の上からでは分からぬが、損傷が治癒し始めてさえたのである。

カイは、子供の額に銃口を当てた。引き金を引いた。三発、撃つ

た。床に叩き付けたトマトのようすに、頭部は砕け、飛び散った。

「銃さえ向ければ、おれは敵ではなかつたのにな」

血の池の中に立ち、呟いた。

常人ならば間違ひ無く吐き氣を催すであろうほどに完全に原形を失つた頭部。……なぜ二発も無駄弾を使つてしまつたのだろうか。カイはそれだけを考えていた。

3

約五千メートルの高度に、超大なその姿は浮いていた。テオ・リュー・フィルク。タグザムティア軍の一一千メートル級超大型戦艦である。紡錘形で、中央に艦橋らしき突起が見えるだけの単純な形状であるが、常軌を逸脱した巨体が、その無個性を必要以上に補つていた。汚染されたドス黒い雲の遙か上空は、燐々とした陽光が輝いていた。それに反射して輝く白銀の機体は、現在の編成軍をまとめた旗艦としての威儀を十分に備えていた。

テオ・リュー・フィルクの周りを、シル・カルと云う名称の黒鉄色の戦闘艦が七隻、囲んでいる。こちらは、全長一千メートルほど。タグザムティアの戦闘艦としては平凡な数値である。地球の英字である「I」に似た形をしており、船体の横幅だけで比較するならばテオ・リュー・フィルクと対等のボリュームを有している。ただし前述したように、真ん中がざつくりと切り込まれたような形状になつていて、二隻をつなぎ合わせたように見える。

それらは気球のように、海上に浮かぶ船のように、静かに風の中に浮いていた。ただ微かな動力炉の駆動音だけが漏れ、風に溶けていった。

いつた。

星座の中に見える小宇宙のように、遙か彼方にも同様に戦艦の群が見えた。ライスカイス軍の戦艦であった。「取り決め」により、距離は一定に保たれ、決して戦艦同士で争う事はなかつたが、雲の下では、空中、地上を問わず、壮絶な命の奪い合いが行われていた。テオ・リュー・フィルクの、通路にある窓から、一人の少女が遙

か下で行われている戦いを見つめていた。窓と云つても、外壁の力メラが捉えた映像を内側の壁に投影しているだけである。この船には、地球で呼ぶ感覺での「窓」は存在しない。

メルリカはまだ小さな女の子だ。淡いブロンドの髪の毛が腰に届いている。元気に笑えばさぞかし可愛らしいのだろうが、彼女の顔は憂いに覆われ暗く沈んでいるように見えた。

「なんでみんな仲良くできないんだろうね」

討伐、制裁……理由を造り出しては戦つてばかりいる。

少女は思わず嘆息まじりに咳くと、地球のクマに似た動物のぬいぐるみを、ぎゅっと抱きしめた。

汚れた分厚い雲が船と地上との間にある。本来ならそれに阻まれ、戦いの様子を見る事など出来ない。だがコンピュータの特殊処理により、「窓」は雲の下の様子を人間の目で直接見る以上の鮮明さで映し出していた。遙か遠方まで連なる山々。湖。平野。小さな町など、様々なものを窓は映し出す。その上空で、鋼の巨人が戦つていた。刀で互いを壊し合い、銃で互いの命を奪い合い、無数の巨人が宙で死のダンスを舞つていてる。

ギヴェイ元帥は軍部内では位人身を極めた存在である。自らの率いる軍に次々と勝利の果実をもたらし、カリスマ的立場を不動のものとしていた。名声実力共に一流の男だ。だが、政治面に関しては微塵ほどの発言権もない。メルリカはギヴェイ元帥の孫娘だ。正規に登録された軍人ではないし、まだ成人もしていない。自分が誰かに意図的に痛めつけられた経験などはないし、他人をそのような目に合わせたこともない。精神的にも肉体的にも極めて平穀無事に過ごして来た。野蛮な世界とは完全に無縁の場所に身を置く存在だった。

彼女は銃後の保護者を気取つて戦争を讃美する他の連中と違い、徹底的な戦争反対論者だった。偉大な人間が祖父にいる事実への幼稚な反発心が起こした感情なのかも知れない。由縁はともあれ、現在は自分の精神がそう育つた偶然に素直に感謝している。

延々と続くベルトウェイを移動中、一レクツル（レクツル・タグザムティアの距離単位の一つ。彼らの換算によると一レクツル＝一・一八九メートル）毎にある小さな窓が、戦士たちの戦いを、そしてその壯絶な死に様を映し出していく。

ベルトウェイの上を、様々な者が行き来する。メリリカがその身を乗せているのは船尾へと向かうベルトである。反対側、船首へ向かうベルトの上に、祖父の姿を見た。他の兵同様黒と銀の服を着ているが、胸には猛禽をモチーフにしたような階級章。その階級章は、タグザムティア軍にはまだ一つしかないものであった。肉体はまつすぐだったが、顔を見ればかなりの老齢であることが分かる。まるでシワの中に顔が存在しているかのようだ。

ギヴェイ元帥は補佐の男と並び、護衛の兵士たちに囲まれていた。移動中ですら、何やら多忙そうな様子で、声をかける事すら出来なかつた。

ギヴェイ元帥。今回の奇妙な遠征の発案者である。

4

元帥は、応接用の部屋で、椅子に座っていた。反対側には、背広を着た男たちが何人か座っている。地球人である。外交官や、色々な使節の人間などだ。

タグザムティアの人間と、地球の人間とは驚くほどに外観が似通っている。実際、外見上での差違が全くないのだ。地球の者がそれを話題にすると、

「発達していつた知的生物が、このような形になることは、当然のことではないのかね？」

と、元帥は逆に不思議がつていた。

そして、話は本題へと入った。室内のボイスレコーダーが音声を記録していく。

なぜ我々の住む地球が襲われなければならないのですか。

別に襲つてはいない。

流れ弾に当たつたり、町が燃やされたり、かなりの被害にあります。住民たちが怯えています。なんの権利があつて、地球を奪おうといふのですか。

権利ではない。義務だ。

今、義務とおっしゃいましたね。それは一体誰のどんな義務ですか。

地球はどこにあるのかね。

どことは。……宇宙……ですか。

そう、宇宙だ。辺境ではあるが、宇宙に地球はある。地球は地球同士で勝手に汚し合つから、他に迷惑はかけないから、ほうつておいてくれ。勝手に、好きなようにさせとおいてくれ。このよつたない分を持つ者がいたら、どう思つかね。

……
地球は、代表となる生物の魂を早く上の次元へと昇華させねば、宇宙の害となる。

そんなことは……

実際、過去にあつたではないか。都合よく忘れてはいるのかね。宇宙は全ての星を見ているのだよ。君たちの暦でいう、「西暦一三七八年」ある惑星の権利を巡り、一つの争う勢力が戦争を起こし、挙げ句の果てには惑星を粉微塵に破壊してしまった。「西暦一四〇一年」ある惑星上で発見された宇宙史上でも珍しい新種の生物を、狂った宗教がらみの科学者たちの抗争で、死滅に追いやつた。（中略）「西暦一四八五年」宇宙空間で、地球人にとってかつてない規模の艦隊戦が起こり、その砲撃による重力場の変動が、十一の天体を持つある星系のうちの、四つの惑星の地軸を狂わせた。これが、その星だけでなく、星系そのものにどのような恐ろしい影響を与えるか、云つまでもないだろう。

だけど……もう、わたしたちにそんな力はない。

それもまた一つの罪なのだよ。あれほどまでの恐るべき力を持ち

ながら、己を御そつとする努力をまったく行わず、結局、その力で自らを滅ぼしてしまった。自分たちを操れない者が、「進化する力」を持つことは、大いなる罪でしかないのだよ。

最初から、君たちは「動物」でいればよかつたのだ。我々の手が差し伸べられるまで。

結局、地球人たちは、一言たりとも反撃の言を吐く事が出来なかつた。後にまた新たな論客が送り込まれる事になるのだろうが、それもどうなる事か。……とにかく彼らは何をする事もなく地上へと戻ることになる。キュー・ジ・ヴィと呼ばれる輸送船に乗り込んだ。有人式人型戦闘兵器エクシユールを運ぶ事を主な目的として建造された船である。エクシユールを十機ほど搭載する事が可能だが、今はみな出撃しており、ガランドウの状態だつた。だが、地球人たちは貸し切り飛行を楽しむわけにはいかなかつた。広いのは格納庫だけで、部屋はすべて狭く、汚れていた。彼らは兵士が仮眠をするための小さな部屋に全員一緒に詰め込まれ、窮屈な思いをみなで共有していた。

激しい攻防が繰り広げられている閃光の中を、船はゆっくりと真下へ降下していく。

「すぐそばで戦つてるじゃないか。本当に大丈夫なのかよ」

「取り決めで、大丈夫なんだとさ」

「紳士のつもりかねえ。それだったら、最初からゲーム盤で勝負をつけてくれよな」

みな口々に文句を云い始める。監視の兵が睨んでいたが、彼らなど別に怖くはなかつた。あの元帥の、冷たく不気味な……そう、まるで機械のような表情に比べればどうと云う事はない。

ギヴェイ元帥は地球人達を地上へと運ぶ輸送船を見送つた後、突然に血を吐いて倒れた。ケギル特殊補佐官が抱き起こそうとするが、

元帥はその手を振り払つた。

「かまわんでもよい。お前が忠誠を誓つたのは、この肉体にではあるまい」

元帥はシワの中から口を選び出して、小さく開いた。弱々しい囁きが漏れる。

「はい。……と云うことは……しかし、まだ早いのでは」

「いや。もう、これも保たぬよ」

ケギルはまた頷いた。そうだった。それを予期していたからこそ、彼は……

6

メリカは軍人ではないが、さすがにあわただしく駆け回る軍人達の中にあつて、気疲れをしたのか、自室に戻るや否や柔らかい布団のしかれた寝台へと倒れ込んだ。

「はやく……帰りたいな」

母親に会いたい。と、彼女が買い与えてくれたぬいぐるみを、再びぎゅっと抱きしめた。

タグザムティア社会の地位に関しては世襲と云う制度はない。だが、ギヴェイ元帥の息子（メリカの父）が、次の元帥になる事は確実と云われていた。軍部での実績、人望ともに申し分のない存在であつたし、皇帝の信任も厚かつたからだ。しかし、ある戦闘地域への移動中、兵士になりすまして潜り込んでいた敵対組織の者の攻撃により、爆死した。現在は、候補と噂されている数人が、見えないところで醜い引っ張り合いをしている。

メリカは、今よりもっと小さな頃は、新米兵士のいる教練所の宿舎に入り込んで悪戯をしたり、それどころか仲良くなつた兵士から銃の扱いを習うなど、奇行の目立つ、兵士達の間での有名人だつた。……ただ、その時は戦争の悲惨さを何も知らなかつた。そして知つていく。学んでいく。見知った顔の、仲の良い人間たちが死んでいく。笑つて出て行つた者が、翌日に死体となつて戻つてくる

る。

レクズという名の彼女と一番仲が良かつた男がいた。彼女が「おじさん」と云えば、まずこのレクズを指していた。彼はエクシユールの操縦に關して抜群の腕前を持つており、歴戦の勇者と云つても過言ではない存在だつた。普段はとても優しく、人を笑わせる冗談ばかり云つていた。メルリカは彼が大好きだつた。そんな彼も、宇宙で、仲間を助けるために死んだ。

なぜ今回に限つて、祖父は自分などを、このような辺境の惑星まで連れてきたのだろう。大きな枕に顎を埋め、考へていると、ブザーの音が部屋の中に響いた。メルリカはすぐさま跳ね起きた。立ち上がり、すぐそばの壁にあるボタンを押し、ドアの開閉を操作する。通路には、元帥と数人の男が立つていた。

「おじいさま」

今頃何の用だらう。メルリカは訝しいと思ひながらも、笑顔をつくつた。だが、もとから感情豊かとは云い難かつた祖父の、いつも以上の冷たい表情に、メルリカの笑顔も凍りついた。元帥は肉体が衰弱しているのか、立つているのもやつとに見えた。足下がふらふらとして頼りない。危なくなると後ろの男たちが手を伸ばし支えた。「涙こそ出ぬがな」老人が閉ざしていた口を、不意に開いた。「わしのような者でも……良心は痛むのだよ。我が孫娘メルリカよ」

元帥の横に立つていた若い男。ケギル特殊補佐官が、右手を上げた。真直ぐにメルリカの顔へと伸びたその手には、短銃が握られていた。それは黒く無気味な光沢を放つていた。

運命の神は目を見開き立ちすくむ幼い少女にその鋭い鎌を振り下ろした。

それはまるで、熱湯から立ち昇る湯気のように見えた。澄んだ湖面に反射する映像に突如、石を投じたかのように、一瞬、空気に波

紋が見え、搖らめき広がった。次の瞬間には、眼前のゾ・ヴィム編隊はその大半が消滅していた。

気配を察知して逃げた機もいた。中途半端な逃げ方をした者に一番無惨な運命が訪れた。鋭利な刃物で果実を切ったかのように、機体は断面を見せていた。ある機体は、真ん中から縦にすっぱりと断たれていた。つい今まで中で操縦をしていた、人体標本のようになつた人間の切断面から、熱したチーズのようにどろりと臓物がこぼれた。火花を散らしていた機体が一斉に爆発を起こした。水に浮くよりも軽く、さも当然のように空に存在していたそれらの機体は、突如として地表から伸びた重力と云う名の巨大な手に掴まれ、煙を噴きながら落下していった。

果たして複数の機体を一瞬にして破壊した兵器はどのようなものなのか。原理を大雑把に説明すると、異なるエネルギーによる二つの力場をレーザーに強引に同調させて飛ばし、力場形状差分によって分子を引き潰してしまう兵器、となる。だが熱湯に溶けて蒸気と混ざつて大気に霧散していく、そんなイメージを見た者に与えるため、その兵器は「昇華子粒砲」と呼ばれている。

タグザムティア軍の、有人式人型戦闘兵器アロ・イーグは、空戦の主役とも云える存在であり、その機体を強化したレ・アロ・イーグは隊長機として乗られることが多い。レ・アロ・イーグに備えつけられた昇華子粒砲は、エネルギー装填完了まであまりにも時間がかかりすぎると云う欠点さえなければ、そして故障さえ少なければ、今ライスカイス軍のゾ・ヴィムに対して威力を示したように、空中格闘戦においてはまさに無敵の兵器であつた。が、通例に漏れず、リーアック隊タゲン隊長の操るレ・アロ・イーグの昇華子粒砲も、二発目を放つた時点で調子がおかしくなつた。タゲンは舌打ちするものの、まったくおしみなく、昇華子粒砲を敵機へと投げつけ、砲に内蔵されていた小型の爆弾を爆発させた。昇華子粒砲のエネルギーを作り出す駆動系心臓部は、一つ一つのパーティがバリアーで護られており、それらがさらに厚い金属の装甲に覆われている。攻撃を

受けても爆発しないように強固に対策してあるのだ。だが、心臓部に直付けされた爆弾は、それらを跡形無く吹き飛ばす。制御のできない、解放されたエネルギーは、直径三十レクツルほどの真っ白な円状空間を造りだし、その中の物すべてを消失させた。

「無」となった暗黒の空間に、どつと空気が流れ込む。周囲のエクシユール全てが、風に引つ張られる。それもほんの一瞬のことだ。

「まったく、相変わらず豪快だねえ、おれたちの隊長さんは」

リーアック隊所属のツーが、のんびりと軽口を叩く。それにやけた表情とは裏腹に、彼の操縦するアロ・イーグは、ゾ・ヴィムの群に斬り込み、刀を振り回し、攪乱させていく。

隊長機のそばに、同じくタゲンの部下リーアック隊所属のウェルの乗るアロ・イーグの姿。両手に構えたライフル銃が、ツーが作り出した一瞬の混乱を利用し、敵の動力部を確実に撃ち抜いていく。爆発が起きると、地球の重力の存在を突然に思い出しでもしたかのようすに、そのゾ・ヴィムは落下していく。

「あまり離れるなよ、ツー」

とかく勝手な行動をとりがちなツーに、ウェルは注意を促す。隊長があまりチームワークを重要視しないので、どうしても自分がその役に回らざるをえない。遙か年輩の人間を注意するのは好きじゃないが、仕方がない。

タグザムティア軍のアロ・イーグも、ライスカイス軍のゾ・ヴィムも、酸素の薄い高度を、縦横無尽に飛び回っている。水の中の魚のように。背中のランドセルのような部分や、腹部、脚などから、炎が吹き出していたが、それはごく少量であり、素人目に見ても、それは姿勢制御のためのもので浮力を生み出すものではない事が分かる。

空を飛ぶ技術を完全に失った地球人にとって、超重量の機械を空高くに飛ばすと云うだけでも信じられない事だ。そのうえ機体からは炎がほとんど出でていないのだ。それを疑問に思った地球の使者に案内人は快く答えた。浮力そのものは重力を制御する装置で作り出

している。彼らにとつては別段秘密でも何でもない初步の科学だ。

「またせたね、タゲン」

低い女の声と共にアロ・イーグが上空より降下してくる。タゲン機の前で静止する。タゲン機操縦席の副画面に女の顔が映る。まだ若く、黒髪は長い。少し吊り上ったきつい雰囲気の目が印象的であった。

「ノウヤン、直つたのか」

「ああ。同調プログラムのちょっとした破損だつたよ。整備士のヘボさ。あんなヤツ使うから、ルキロがぶつ壊れそうなぼろいウーズイで出なけりやならなくなつちまうんだ」

「心配が、ルキロが」と、タゲンが笑う。

「まあ、妹みたいなもんだから。……あの娘、かなり癖のある操縦するし……全然学んでいない機体で、大丈夫かどうか。……まあウエルほどびくびくと心配はしてないけどね」

「お、おれは別にそんな……」

ウエルからの通信が割り込んだ。端麗だがどこか朴訥とした青年の顔が、それぞれの操縦席内副画面に映る。

「そろそろ始まる頃だぞ」

ツーは、右側の副画面の一つに、テレビ映像を映し出した。

「おい、戦闘中だぞ」

ウエルがまた口を酸つぱくする。

「まあまあ。……もうこの近くにはいないじゃんよ、敵」

画面には、ライスカイスの人間特有の、病的な（彼等の主觀では）ほどに青ざめた顔が映っていた。ツーは、画面のその男に、銃を真似た指の形を作り、撃つ仕草をする。

ライスカイス側の地球のテレビ放送用電波を利用した演説である。話している内容は、タグザムティアのギヴェイ元帥が訪れた地球人使者達に伝えていた事とさほど変わらない。

「さて、もうそろそろかな……」

画面が乱れた。押し潰したように映像がひしゃげ、真っ白に光つたかと思うと、真っ暗になり何も映らなくなつた。数秒後、また映像が表示されるが、幕の合間に主役は交代していた。

ブロンドの髪の毛を結い上げ、軍服を着こなしたその姿は非常に美しい、凛々しいものではあつたが、どこと一言で名状のし難い違和感があつた。それは、全てが奇妙だったからである。画面に映つているのは、少女になつたばかりのよつな、幼い女の子だったのである。

ツーは絶句した。

「割り込み電波で演説するつてのは聞いてたけど……。おい、みんな見てみろよ」

本来、そこに映るのは老齢にさしかかった元帥の顔であるはずだつた。

「地球の皆さま、はじめまして」

少女がその小さな口を開く。声も、顔と変わらずまだ幼さから完全に脱しきれてはいない。

ツーは予期せぬ出来事にあっけにとられていて、口はだらしなく半開きになつていて、タゲンもノウヤン、ウヨルも同様に驚きを隠せない表情でただ画面を見つめるばかりであつた。

少女は微笑んでいたが、そこからは得体の知れぬ冷たさしか感じられなかつた。

「わたくしは、タグザムティア軍元帥代行メルリカ・カ・レ・ムともうします」

「にゃにい！ ゲンスイダイコウだあ？」

ツーは叫んだ。自動索敵装置の状態を全開に切り替えてから、あらためてテレビ映像をメインスクリーンに映してみる。非常に鮮明に拡大されたメルリカの顔からも、やはり、どんな表情すら読みとることができなかつた。整つた、冷徹そうな顔がただ大きくなつただけだつた。

「おい、聞いてくれ」

メリリカのよどみのない美しい声に、タゲンの野太い声が重なつた。

「今入つた情報だが、ギヴェイ元帥が亡くなつたらしいぞ」

「うへえつ」ツーは大袈裟に体をのけぞらせながら叫んだ。彼を知らない人間には、単にふざけているようにしか見えない。「こんな辺境の惑星で、死んじやつたのか。……それにしても、あのお嬢ちゃん変わりすぎだよ。本当に……レクズや、ルキロとよく遊んでた、あのお嬢ちゃんなのか……」

大型戦艦から宇宙へ向けて射出された小さなカプセルは、一見滑稽にも見えるが、いま全体を占める雰囲気は実に肃々としたものだつた。

タグザムティア軍の旗艦テオ・リュー・フィルクの外壁の上は、数千の兵士たちにより埋め尽くされていた。彼らを保護する力場の外は、激しい風が吹いている。

射出と同時にその数千人の右腕が一斉に前方へ突き出され、胸の高さに上がる。右拳を引き戻すように、左胸に当てる。敬礼の意を示す動作だ。

周囲を囲む戦闘艦シル・カル内のすべてのスクリーンが、それを映し出している。

ギヴェイ元元帥の亡骸を収めたカプセルは、引力の影響を全く受けず、ただ風に揺られながら、ゆっくりと、ゆっくりと宇宙を目指して上昇していく。死亡した惑星での宇宙葬は、タグザムティア獨特の習慣である。たとえ地上で死んだ者だろうと、宇宙に上げて葬るのである。戦闘で死ぬ事、そして死んだ地で眠る事、それは彼らの本懐とするところだ。だが、彼らは敵に対する様々な汚れの気持ちが強く、死んだ場所から真上、そのまま宇宙へと上げる習慣が生まれた。勿論厳かにかつ盛大に儀式が執り行われるのは上部の人間だけであり、運良く死骸の回収された一般の兵士たちは、全作戦終了後にまとめて宇宙に葬られる。

一人の少女がいる。長いブロンドの髪の毛を上げて縛り、さっぱりとまとめている。少女兵の物を間に合わせで改造したような服は、それでもかなり大きいらしくぶかぶかとしている。顔は幼さを多分に残しているが、柔弱さは微塵も感じられず、不気味なほどに落ちていた。これから軍部を支配する事になる覚悟が、そうさせて

いるのだろうか。と、側近の一人は横目で少女メルリカ・カ・レムを見遣りながら考えていた。しかし、時折彼女の姿を見る事はあったが、このいきなりの変貌ぶりは異様であった。数年前まで一般兵士達に混じってふざけて遊んでいたという話ではないか。元気で、とても優しい少女。会う前からそう聞いていたし、会つてからもう感じていた。魂の根底に寂しさがあるようで、思わずその笑顔を全力で守つてやりたくなる……

自分の祖父が死んだのだ。以前の彼女ならば泣き崩れていだらう。何かが彼女を強く変えたのか？　いや、彼女の顔に悲しみをこらえている様子はうかがえない。……彼女は悲しみを感じていない。いかなる感情も、そこに読みとる事が出来ない。ただ、ショックに感覚が麻痺してしまっているだけなのだろうか。……そうに違い無い。……側近は、そう考える事で自己の感情を欺瞞させた。

何だ……今のは……。側近は、それを見のがさなかつた。彼女の、その変化を……

メルリカの瞳がうるみ、そして涙が頬を伝つた。

驚いた。だが、もつと驚き、そして困惑しているのはメルリカ自身のほうだった。注意せねば気付かないほどの狼狽ぶりではあつたが、とにかく、側近の目には、彼女が突如流した自身の涙に驚いているように見えた。何か恐ろしい秘密を知つてしまつたような気がして、側近はそのことを自身の胸の中だけにしまつておくことを決心した。

2

眩しい……

薄目を開けると真っ白な光が鋭い凶器となつて、網膜や脳を刺激する。

ここはどこだらう……

光に目を慣らしながら、考えた。

この重力は……少なくとも、アロ・イーグの中じゃない。

だんだんと視界がはっきりしてくる。地球人の、木材で建築した居住空間のようである。

窓から、陽光が漏れてきていた。

「気がついたみたいだね」

低い女の声。地味な服装は木の壁、調度品にとけ込んでおり、声をかけられて初めてそこにいる事に気づいた。小太りした中年の女だ。仕事の邪魔にならぬようにか、長い髪を後ろで無造作に束ねている。

「ここは……」

狭い部屋のぐるりを見回す。ドアの向こうから、見知った顔が覗いていた。身長のかなり離れた二人の少年達だ。一人は興味深々の顔付きを隠そとせず、物陰からじつと少女の顔を見つめていた。今、赤毛の少女は部屋の壁際にいくつかある寝台の一つに寝かされていた。赤毛の少女は、またあらかめて女の顔に視線を向けた。

「あたしゃ、あれらの母親だよ」

女は笑う。

視覚に続き、触覚が戻つて来た。何やら全身が締め付けられる感じがする。体をうまく動かせず、確認する事は出来ないが、包帯が全身のあちこちに巻いてあるようだ。以前、物資のない場所での戦闘中、このような原始的な手当を受けた事がある。鈍かつた感覚がだんだんと蘇つてくると、下半身にどうにも無視出来ない不快な感触が襲ってきた。それが気になつてているらしい事に気がついたのか、女が小さな声で耳打ちする。

「あんた、今、生理中でしょ。……処置しといたから。しかし本当に驚いたね。宇宙人だつて聞いてたから、どんな姿かと思つてたけど、何から何まで地球人と同じなんだから」

赤毛の少女は、自分の頬をその髪の毛よりもと赤く染め、うつむいてしまった。

扉の向こうのエイジとタクは、何があつたのだろうと顔を見合っている。最初のほうがよく聞き取れなかつた。

「あんた、名前は何ていうの」

女……エイジとタクの母親、キヨウコ・シテが訊く。その問い合わせ結果にエイジは非常な興味を覚えた。単にキヨウコは、名前が分からないと扱い辛いと思つただけなのだろうが。

少女は目を閉じた。数秒の沈黙の後、目を開き、続いて口を開いた。

「ルキロ・エ・ル」

ルキロエル……エイジは心に呴いた。どこの国の名前でもないな、と当たり前の事を思う。彼等が聞いた話が真実であるならば、彼女は異星人なのだ。ふと氣づいてみると、彼の足は部屋の中に数歩入つてしまっていた。もともと彼とタクとの部屋なのだが、しばらく入るなど母キヨウコに云われていたのだ。慌てて後ずさりして出行こうとしたが、キヨウコにもう別に入つても問題ないといわれ、拍子抜けしたようにそのまま壁によりかかった。

「どこが姓で、どこが名なの」

再びキヨウコが問う。観念したのか、少女……ルキロ・エ・ルの答えは早い。

「ルキロと呼べばいい。……あとはそれぞれ、型番と位だから」

「型番に、位だって……」

エイジが隣のタクに話している。徹底的に人間が管理されている惑星なのだろうか。

窓から空が見える。

暗雲が一面を多い、その隙間から見える空は赤い。一度慣れてしまつともう眩しさなどまったく感じない弱々しい光だつた。

遠くに見える丘から、全長六、七十メートルほどの船が一隻浮上するのが見えた。

「キュー・ジ・ヴィ……いけない。回収の時間が……」

ルキロは悲鳴めいた高い叫び声を出し、慌てて上体を起こそうとするが、全身に針で突き刺すような激痛を感じた。大きな悲鳴は上がらず、呼氣として口から漏れるだけだったが、その顔の表情から

苦痛の度合いを簡単に窺い知る事が出来る。

タグザムティアの輸送艦キュー・ジ・ヴィと、ライスカイスの輸送艦ガ・ガーヌが上へ下へ飛び、それぞれの陸戦用有人式人型戦闘兵器であるジーン・ウーズイとギ・グルーグとを回収していた。この数日間にわたった戦闘がようやく終了したのである。

「無茶だよ。全身打撲の酷い怪我してんだから。医者にはもう帰つてもらつたけど、肋にもひびが入つていてさ」キョウコは骨太のごつい手でルキロの柔らかそうな肩を軽く押さえつけ、横たわらせ、乱れたシーツをかけなおした。「うちの息子が迷惑かけたらしいね。……でも、そつちだつて、何もしていなこの星を侵略に来たんだから、文句いわれる筋合はないけどね」

「シンリヤク？」

ルキロは激痛を堪えながらも、触覚ではなく聴覚からの情報に眉をひそめた。それを知つてか知らずか、キョウコの口調が少々厳しくなる。

「まあ、あたし達は別に特別いい生活してたわけでも何でもないし。頭の連中がどう変わろうと、あたしらには何が変わるもんでもないだろうし……だから、それだけなら、息子との件でどつこいどつこいでもいいんだけど……こつちは、亭主まで同じような目にあわされていいんだよ。あんたらが勝手に始めた意味のない戦いのせいで……まあ、ただの一兵卒にいつてもしかたない事かも知れないけど。とにかく、あたし達があんたを許す許さないは、あんたの考え方次第だよ。戦い、殺しを楽しむような人間なら、戦争を起こす者の加担者だ。一般市民を平気で殺せるような人間は許せないよ」

ルキロはキョウコの顔を見つめ、時折口を開きかけた。だが、キョウコは有無を云わさぬ口調で、ルキロがなかなか口をはさむことが出来ない。

「でも……」

エイジがルキロと母に近寄る。

ルキロの上半身は、裸の上に包帯を巻き、寝間着を引っかけただ

けだ。あらためてそれに気付いたのかルキロはシーツや服をたぐりよせて露出した肌を隠した。

「戦いが起きた以上は、勧告にしたがつて、逃げていればよかつたのに、おれが余計な事をしようと考えたのが、もともとの原因だつたのだし……」

「地球を汚すな」あの巨人の中で、そう叫んでいたルキロの声が忘れられない。よそではどうなのか知らないが、自分は彼女らの側から直接の被害を受けた事はないし。と、無意識にルキロを庇つてしまつた言い訳をエイジは後からいろいろと考えていた。

「確かに何で逃げなかつたのかは腹立たしいけど、もとのもとつて云うのなら宇宙人が侵略に来た事が原因でしょう。貧しいけど平和に暮らしているところに、勝手に武器持つて攻撃して来て。……出でいつて欲しい、平和な暮らしを返せ、と抗議をするのは当然の事じやないの。そんな人間を邪魔だからと攻撃するなんて畜生以下の最低な行為だよ」

「黙れっ」

異星人の少女は叫んだ。うまく声が出せず、少し裏返つてしまつた。だが、滑稽さは微塵もなく、むしろその小さな唇から発せられる高く鋭い声に、エイジは萎縮してしまつた。

ルキロは急激に動こうとし、再び生皮をはがれるかのような激痛に全身を襲われた。呻きながらも、ゆっくりと上半身を起こした。荒く呼吸をしながら、キョウウコの顔を睨む。

「地球人は愚かな種族だ。生物の大半を死滅させ、自らの母星を汚染させ、自らをも貶めた。ゼロから再開した地球人は、いざれ科学水準は戻るだろうが、精神は何も変わつていない。今度は宇宙で同じ事を繰り返すだろう。絶対的に必要なのは現段階からの優秀な者による統治。宇宙の平和のためには、地球は我々の力を知る必要がある。逆らえない事を学ぶ必要がある」

「よくそんな台詞がスラスラ出てくるね。教本じゃなくて、あんたの意見を吐いてみなよ。……あなたの星はそんなに優秀なのかい。

誰と比較して、何がどう優秀だつて云うのさ」

戦争の大義名分を、間髪おかずに冷やかされ、ルキロは痙攣した
ように唇を動かした。怒涛の言葉の攻撃を浴びせてやりたいのだが、
何も言葉が出てこないのだ。やがて、ゆっくりと云つた。

「……少なくとも、自分らの星で……殺し合いはしない」

「だから、ひとの星に来てやるんだね。自分らは可愛いものね」

ルキロはまた激昂しかかつた。が、急に力が抜けたように、頃垂
れる。

「確かに、今度の戦いは……掲げる大儀の……云つてゐる事の論法が
あまりに滅裂としそぎてゐる。それは分かっていた。……地球を統
治してもなんの益もないし、ライスカイスとの戦いは昔からの事だ
けど、わざわざこんなところまできて行う必要はないし……」

涙を流すところまで地球人と同じなんだな……。エイジはルキロ
の目に涙がにじむのを見た。ルキロは、その視線に気づき慌てて手
で目元を覆つた。

今までのきつい眼差しは負傷しこのよくな境遇になつた故の防御
反応だったのか……もう、彼女の目には攻撃的な光は宿つてはいな
かつた。

3

ギヴェイの遺言により、彼の孫娘であるメルリカは地球に滞在し
ている間、元帥の代行を務める事になった。補佐付きとはいえ、い
つまでも務められるはずもなく、母星に帰つた後にあらためて次の
元帥が選ばれる事になる。昔の地球には王族など能力の有無に関わ
らず世襲により子孫がその地位を継ぐことが出来る制度があつたら
しいが、タグザムティアには有史以来そのような法的な制度はない。
せいぜい自営業を息子に継がせる程度だ。それだけに、亡くなつた
元帥の孫というだけの理由で幼い少女が代行を務めるなど、たとえ
一日だけであつたとしても、本来起こりえないことである。だが不
思議なことにその点に疑問を投げるような報道記事は、現在も未来

もまったく出てくる事はなかつたのである。

取り決めにより今回の戦闘地域は昔大国のあつたこの大陸となつた。しかし、メルリカ元帥代理は地球全土に探査隊を派遣していた。輝く未来のためにも、惑星の探索は有益だ。今回の遠征は戦争が目的で、しかもライスカイスとの取り決めにより行動可能な範囲が限定されている。だがそれは軍事力を持つ者に対しての取り決めであり、武装さえしていなければ軍に随行してきた民間探査艇とでもしておけば、どうとでも通る。だが今回は、普段とは明らかに異なる雰囲気を周囲の人間に感じさせていた。指揮する者が幼い少女であることを差し引いても、やはり何かが奇妙だ。彼らの疑問は、次の会話を耳に入れていたならばさらに深まつた事だろうが、そこは密室で当事者以外は誰もその声を聞くことは出来なかつた。

「……でも、もっとも重要なのは、今いるこの大陸。それは間違いない」

狭い部屋の中、メルリカは両手で頭を抱え、目を閉じていた。

「見えますか」

傍にケギル特殊補佐官が立ち、自分より遙かに背の小さな少女を見下ろしていた

「映像の断片がね。うまく処理されている。残されているのはこの断片と、わずかな既存情報だけ。複雑なパズルのようだけども、わたしはそれらをまず一つ解き、この星である事を突き止めた、この大陸であることを突き止めた」

探査隊のもたらした地球に関しての情報によると、ここ数百年において歴史は完全に失われており、口伝として諸処に話が残されているに過ぎない。蒐集編纂する気概のある者も、現れてはいないようだ。技術力もかなり低下している。技術不足を補おうにも、資源が絶対的に不足している。材木は豊富だが、地下の鉱脈などはすでに掘りつくされて枯渇している。科学を研究しようにも、自然からの資源が得られぬ状態だし、技術向上により将来恩恵をこうむる事になるはずの市民たちからも、何も協力を得る事が出来ない。それら

の悪循環により技術レベルはさらなる低下を招いていく。

「おかげで誰にも知られていないのは助かりましたが、それは彼らの情報操作が行き届いていた結果でしょうな」

「だと思うけれど……でも、何のために」

「さて。今の我々の戦い同様、ゲームを挑んで来ておるのかも知れませんな。情報は封じて、隠しておいてやる。ただし早急にパズルを解かねば、公開してしまうぞ、と。繰り返しますが、誰にも知られていないのは幸いでしたが、それだけに自らの手で探し出さねばなりません」

「最初からそう考えていたから、今回の地球行きを考えたのでしょうか？」わたしたちは

「ええ」

ルキロは木の筒を口にくわえ、反対側の先端を竈の中に入れると、大きく息を吹いた。竈の中の木片が燃え上がり、ちりちりとはぜる音を立てる。木炭を作っているのだ。古来より人類に利用されてきた燃料の一つだ。エイジの話だと石油、太陽熱、水力、木炭などの燃料源が等しく重要視されているらしい。ルキロの感覚では、どれもエネルギーとしては非力で役にたたないものばかりだ。ただ、市民の生活を見て、この程度の燃料で十分に間に合うのだろうなども思う。よくよく考えてみれば、低レベルの技術と云つても、何一つ自分では作り出せない物、理解出来ない物ばかりだ。科学技術は歴史の積み重ねであり、科学技術の高さは個人の知識や能力の高さを示すものではない。このような場所で、あらためてそのような事に気づかされる等、思つてもいなかつた。

ルキロは右腕の袖で額を流れる汗をぬぐつた。竈の中は千度を超える高温だ。汗がいくらでも出てくる。顔は煤にまみれており、透けるようにさらさらとして綺麗な赤色だった髪の毛も、光沢がなくなり、ところどころ焦げ縮れてしまつてている。キヨウコのお古の作業服を着させてもらつてている。綻びを繕つた後が随所に見られる。二人の体格差がかなりあるため、服の布地がかなり余つて垂れている。動きにくそうな部分は、縛つてしまつていて。

毎日、くたくたになるまで働く。適度な疲労は心地よい眠りや健康をもたらすし、何よりルキロにとっては体を動かす事が楽しくてならなかつた。戦闘訓練では嫌と云うほどに格闘の練習をさせられたが、実際の任務は常にエクシユールの暗い操縦席の中。すっかり慣れてはいたが、実際にこうして外で仕事をしてみると、エクシユールが精神に伝えてくる肉体感触よりも、直接自分が風に触れる感覚の方が数段気持ちが良い。

炭焼きはエイジの父トウジの仕事で、ルキロは彼の体調が戻るまでここで働く事になつていて。あまりに回復が長引くようであれば、一人地球に取り残されるのも嫌なので約束を破棄せざるを得ないが、トウジの順調な回復ぶりを見ると、とりあえずは心配なさそうだ。

ルキロはキヨウコと口論をしたあの日、タグザムティア側、自分達側の非を認めるに、少々の照れを残しながらも潔く謝った。勿論タグザムティアの正義は微塵も疑つてはいない。しかしながら、他の命を奪つていいくのが戦争だと云うのに、この星が戦地となつた理由を矛盾なく説明出来ない事は如何なものか。説明責任を果たしていない点に関しては戦争を起こした側に非があるようと思つ。

怪我で数日はまともに動けまい。「地球人を見下している傲慢な気持ち」を持つたまま彼らの世話になるのはとても辛い事だつたが、謝つてみると拍子抜けする程に気分がすつと軽くなつた。戦地での緊張がほぐれ、地球人と打ち解けてくると、ルキロは実に明るく活発な仕草を見せた。彼女はエイジ達を驚かす程に早い回復を見せ、わずか二日後にはもう不自由なく動けるようになつていて。次に開始される戦闘の終了時に、自分も回収してもらおう、エクシユールが大破してしまつたので地球人から身を隠して一人で救助を待つていた、とでも云つておけばいい。

回収される日までは、トウジの仕事を手伝うことにした。熱線を間近に受けたトウジは、意識こそはつきりしているものの、まだ自由に動ける状態ではない。自分がやつたわけではないが、やはり知つた顔になつてしまふと、巻き込んだ責任を感じてしまふ。エイジ、キヨウコ、それと椅子に座つた状態のトウジに教えて貰いながら、ルキロは木々の伐採、乾燥作業、薪割等を覚えていった。その華奢そうな小さな体の、どこにそんな体力があるのかと皆を驚かせる程に、仕事に家事にと実によく働いた。

「ルキロ、休憩だよ。ご飯にしよう」

エイジが、斧で割つたばかりの薪を竈のそばに置く。煤で真つ黒

になつたルキロの顔を見て声を出して笑つた。ルキロは立ち上がる
と頬を少し膨らませてエイジの頭を小突いた。

「もうくたくただよ。……それじゃ、行こうか。今日のお昼はね、
わたしも少し手伝つたんだよ」

淡く赤い陽光に、少女の屈託のない笑顔が照らされる。

「だからさつき、母さんと何かしてたのか。果たしてどんなもんが
出て来るのか、心配だなあ」

「ひどいなあ。……この星つて、わたしの知つてる野菜と形も味も
似ていてるのが沢山あつたから、それを使って得意料理を作つたんだ
から大丈夫だよ」

「「ごめん。植物や動物つても、やつぱり同じとまつたく違うの？」

「同じようなもんだよ。タグザムティアに限らず、知的生命体のい
る星の自然の風景はね。宇宙の塵に同じような条件が加わつて恒星
惑星が出来て、恒星からの距離が同じような惑星に生物が誕生して
行くわけだから、当然でしょ。離れてはいても全て同じ物質空間で
の出来事なんだから……って学校の先生が云つてた」

「そんなもんなのか。……あともう一つ聞きたいんだけど」探求心
旺盛な彼はルキロに質問ばかりしている。「宇宙船。凄い遠くから
来たわけだろ。やつぱり、あれ、ワープ航法やら何やらで一瞬で来
ちゃうの？ A点とB点をくつつけてつ……て」

ルキロは首を横に振る。

「じゃ、何だる。別の世界を通つてくる。……分かつた、魔法だ」

「正解は、ただ凄い速度を出すだけ、だよ。他にどういう技術があ
るのか知らないけど、タグザムティアでは星間移動にはこうした技
術を使つていて」

「えつ、だつて、それだと、光以上の速度は無理じやない」

「光は確かに光以上にはなれないけど、宇宙船は光じやないからね
「どういう事？」

「例えば……端から端まで光速で何年もかかるとんでもなく長い棒
があるとするね。その棒の先を、指でちょっと押す

少女は身ぶり手ぶりを交える。

「ふむ」

生徒は腕を組んで眉間に皺を寄せている。

「さて、その反対側の端が動くのは、指でちゃんと押したのと同時にどうか。それとも、何年もかかってしまうのでしょうか」

「わからん。……同時……な気がする」

「その巨大な棒の上で、同じような仕掛けを用意して、また同じ事をして、そのまた上で……」

「なんか、限りなく速度を出せそうな気がしてきた」

「まあ、そんな事は絶対に不可能なんだけどね」

ルキロは笑つた。

「なんだよ、そりや」

「わたしにも、よくわかんないんだよ。単なる軍の一兵卒で、技術者じゃないんだから。ただ、基本の基本はそういう事なんだって。

……あとはね、重力場の隙間をぬつて進むって事かな」

「宇宙にも重力つてあるんだ」

「引力とは違うけど、星から離れたところにも様々な力は働いているよ」

「考えてみれば当たり前だな、潮の満ち干きなんかそうだもんな……」

「あ、こつちは引力か」

「もとは一緒でしょ。重力は惑星規模だと单なる引力として働くし、星雲規模だと……なんて云つたか忘れたけど、何らかの働きがあって、超高速移動の際には、それが单なる障壁になってしまつ。だから、それを取り除くための技術が必要なんだよ。なんだか自分で何を云つてんだか分かなくなってきた」

「お前ら、問答しとる間に、スープ冷めちまつた」

窓からエイジの父親が顔を出していた。

「トウジさん、一人で立ち上がり、大丈夫なの」

ルキロが近寄り、庇うように手をさし伸ばす。

「お、心配してくれるのは、ルキロちゃん。嬉しいねえ」

ヒゲ面の大男のくせに、とても軽い口調だ。意識が戻つて、初めてルキロを見た時からもうこのような態度だった。だから、この家でルキロになつかれるのも一番早かつた。

2

エイジにとつてささやかな自慢なのだが、彼の家には自動車がある。軽トラックだ。燃料が高価なのが難点だが、とにかく今日は自由にトラックを動かせる日だ。作った炭を荷台に乗せ、麓の町に行き、取引相手にそれを渡すのだ。空いた荷台に買い込んだ食料や雑貨を詰め込んで帰つて来る予定だ。車はかつて少しだけ運転させてもらつた事はあるが、自分で全て行うのは初めてだ。父がまだ不自由な体なので仕方がない。いつもは助手席に乗つていたが、今日そこに座り同道するのはルキロだった。

「どうした、エイジ」

ルキロを前にして無言で突つ立つてゐるエイジを見て、トウジが声をかける。

「い、いや、何でもないよ」

ルキロはよそ行きの軽装だ。これもまたキヨウコから貰つた簡素な服だが、作業用のドロまみれの格好しか見ていなかつただけに、エイジにはとても輝いてみえた。それに、ルキロはもともと顔の造作が小さな花のよう可愛らしい。女性にほとんど免疫のないエイジが魅了されてしまふのも無理からぬ事ではあつた。

「惚れたな」

トウジがぼそりと呟つ。また「ドンピシャリ」である。

「そんなんじやないよ」

「前つきあつてた娘はどうしたんだ」

「あれだつて、そんなんじやない。……おれが一方的にいいなつて思つてただけで……しかも、彼氏がいたんだよ」

「そーかそーか。それじゃ、ルキロちゃん地球に引き止めて、求婚でもしろ」

「なんでそうなるんだよ。云つてること、支離滅裂だぞ。全く意味がわからんねえ」

脱力感がエイジを襲う。

「だつてすげー役に立つし。お前なんかと違つて、すげえ楽しそうに働くじゃん」

「確かに……楽しそうに働くよなあ」

一週間とたたぬうちにエイジの頭の中の大半を彼女の存在が占めてしまつたのは、その躍动感のある動きや笑顔が原因のようだつた。

「二人で何こそこそ話してんの。あやしー」

ルキロはトラックの横に立ち、二人に疑惑の眼差しを向けていたが、すぐその表情は笑みに変わつた。助手席側のドアを開け、一足先に乗り込む。エイジもすぐにドアを開ける。

「なんでもない。仕事の話だよ。さあ、行こつか」

エンジンをかけると同時にトラックは激しく揺れた。マフラーからはもうもうと黒い煙が吹き出た。乗つている二人の体も激しく振動し、舌を噛んでしまいそう。トラックが走り出すと、その路面の悪さも手伝つて揺れはさらにもよくななり、さながら暴れ馬に乗つてゐるようだつた。

「うわあ、何これは。揺れるなあ

「自動車はこうこうもんなの。昔は違つたんだらうけど。タイヤが無かつたらしいし」

「それが普通じゃないの？ まあ何事も経験だ」

「ねえ、ルキロ。本当に、もうすぐ帰っちゃうの」

「何、急にそんな事。……いつまでも、ここにいたつて仕方ないでしょ。もづじきにまた戦いが始まるはずだから、その回収時にね。こんなところ密告でもされたら処罰もんだけど、そしたら地球人の捕虜になつてたつてウソでもつくよ」

慣れない激しい揺れと戦いながらも少女の表情や口調はのんびりと楽し氣だつた。何やら手に紙切れのような物を持ち、見つめていた。紙なのか布なのか、または全く別の物質なのかは分からぬが、

あきらかに写真のようであった。人間の姿が写つていて。エイジは訊ねた。ルキロはそれをエイジの目の高さに上げ、運転中でも見やすいようにしてあげる。軍服らしい格好の数人の男女の姿が写つていた。

「楽しそうな写真だね」

ルキロが両側の男二人と肩を組んではしゃいでいる。その前には肌の黒い大柄な男と、ライフルのような長銃を持つた男がしゃがんでいる。写真の端には、そんな撮影に加わりたくないと遠く離れているような、しかしどことなく楽し気な様子の長身の女。

「ルキロのいた小隊？」

「リーアック隊つて云うんだ」

「へえ、どんなチームなの」

「空中戦適応能力の高い者を集めた少数精銳の部隊だよ。アロ・イークっていう、空中戦闘用のエクシユールで戦うんだ。宇宙戦ではまた別のエクシユールを使つたりもするね。だから、本当はウーズィは苦手なんだ」

「エクシユールつて何？」

「あれ、教えてなかつたつけ。エイジつて何でもかんでも質問してくれるから、わたしも何を教えたか覚えてらんないよ。エクシユールはね、有人式人型戦闘兵器つて事。ザウエ・ジオ・ネギュ・フファヴィを縮めた言葉。おんなんじ人型でも、今戦つているライスカイスでは、エクシユールじゃなくてティオつて呼んでいるみたいだけどね。まあ、星が違うし、別の兵器なんだから当然なんだけど」

「ふうん。あれ、何でそのザウなんとかつてのが、縮めてエクシユールになるんだ」

「あとで綴り書いて説明してあげるよ」

「いや、いいよ。ますますわからなくなりそうだ。で、ルキロが乗つてた、そのエクシユールつての、緑色の、あのがアロ・イーグなのか」

「あれはジーン・ウーズイ。陸戦用」

「そういうや云つてたな、ウーズイつて。でも空中戦部隊なんだろ。なんで、陸戦用なんかに」

「冗談にもならない話なんだけどね。わたし用にカスタマイズしてあつたアロ・イーグの調子が、急に悪くなつてしまつたんだ……おかげでホントに酷い目にあつた」

「酷い目つて、何機もを同時に相手して、凄い戦いをしてたじやないか」

「えへへ。リーアック隊は優秀な人材の集まりなんですよ。……でも、わたしなんかまだまだの下つ端なんだけどね、ほんと凄いんだから、他のみんなは」

またあの生活に戻れる。風に髪をなびかせながら話すルキロの顔は幸せそうだった。だが、不意にその表情にかけりが見えた。再び写真に目をやつた。ルキロと肩を組んでいる男の一人レクズ、彼はルキロの命を助けるために自らの命を犠牲にした。彼との記憶を忘れるわけではないが、この悲しみだけはこの風に流してしまったかった。

……彼が自分の命と引き替えにしようとする価値などが、自分にあつたのだろうか。レクズが喜んでくれるようにしつかりと生きていこう、と心を決めたはずだったのに……地球では自分の馬鹿さ加減を思い知らされて……

「ルキロ、何だか、表情暗いよ。悲しい事でも思い出したの」

「悲しい事？ 違う……悲しい事なんかじゃないよ」

そう、思い出してみれば、レクズとの思い出は楽しい事ばかりだった。ルキロは今度はレクズとの過去を語り始めた。ルキロの顔に笑みが戻った。

「……そしたら、レクズつたら、どこに隠れてたと思う？ 砂の中に潜つてたんだけど、禿頭だから太陽でピカピカ光つててさあ……」

ルキロは一人で腹をかかえて可笑しそうに話している。エイジはルキロのその微笑みに微笑んだ。

「……そう云えば、メルリカに最近全然会つてないなあ」「今話してた、元帥の孫娘とかつて」

「うん。……レクズが死んでから……わたしを避けだして……といふか、自分の家抜け出して出かける事も全くなくなつてしまつたみたい。戦争に関係する人間がみんな怖くなつてしまつたんだろうね。それが今はこっちに来ているつて聞いて、どういう心境の変化だろうつて思つてた。もしかしたら、こつそりと会いに来てくれるんじゃないかつて、ちよつと期待してたんだけど」

「来なかつたのか。……あ、そう云えば、そのメルリカつて名前、聞き覚えがあるぞ」

「え、どうして。何でエイジがあの娘の事知つてるの」

「友達の家が金持ちで、なんとテレビを持つてているのさ。そいつから聞いたんだ。地球のテレビの電波使って、地球は管理されねばならない云々とか演説してたんだよ。……元帥が死んだからつてんで……」

「亡くなつた？ ギヴェイ元帥が」

「代理で、そのメルリカつて娘が喋つてたらしいよ」

「……そうか。それじゃ、抜け出すどこじやないか。……でも軍人でも何でもなくて、ただ祖父に同行して来ただけなのに、代行を務めるなんて妙だな。……メルリカ、おどおどした様子だつたんじやない？ 無理矢理喋らされて」

「見てないからよく分からぬけど、堂々としていたらしいよ」

「え？ 変だな。あのメルリカが」

ベツ一ヘンジャナイヨ

「何？ 今のが」

まるで鼓膜を通さず、音声を感じる脳組織に直接刺激を送られたかのよう。それほどはつきりと、その感覚は音として、声としてルキロに認識された。それなのに、それがどんな声なのか、男か女か、人間が発したものかも全く分からぬ。ただ、愉快か不愉快かと問われれば、間違いなく不愉快の部類に属する声であった。

「え、声なんか聞こえないぜ」

やはりエイジには聞こえていないんだ。何かがいる。見られる？　どこに……。わたしの中？　わたしの中に何かが……

ルキロは頭を抱えた。残響がいつまでも消えない。逆にどんどん大きくなっていく。たまらない不快感。頭の中に獣が入り込んで、頭蓋の内側から爪を立てている……

「大丈夫か？　頭が痛いの？」

運転中のエイジが、心配そうにルキロの顔を覗き込む。

「平気。何ともないよ。……ただ、ちょっと頭痛が……」

またルキロは鋭い悲鳴をあげた。首の後ろに鋭い痛みを感じた。キリを深々と突き刺され、抉られたかのような堪え難い激痛。ルキロはまるで発狂したかのように絶叫をし、暴れはじめた。

エイジは慌ててトラックを停止させた。

「ルキロ」

エイジの声に反応するかのようにルキロが動いた。エイジの方に身を乗り出し、彼の足元へと手を伸ばした。そこには一度も使った事の無い護身用の銃が取り付けられていた。ルキロはその銃を素早く抜き取ると、自分の頭に当てた。何が起きているのかさっぱり分からぬエイジであつたが、ほとんど反射的な行動で、その銃身を横から叩いて、銃口をルキロの頭からそらした。ルキロは躊躇なく引き金を引いたが、目的を遂行するには一瞬だけ遅かつた。彼女を貫いたのは鉛弾が空気を切り裂く際に生じた衝撃だけだった。

エイジの叫びも彼女は全く正気に戻る様子を見せず狂乱した表情のまま、また銃を自分に向けようとする。軍人として鍛えているせいなのか、それとも何か特別な精神状態となっているためか、とにかくルキロの腕力は非常に強く、とても銃をもぎとる事が出来ない。ならば、とエイジは引き金に添えられたルキロの人さし指を押さえ、銃を空に向けて撃つた。

すぐに全弾を撃ち尽くした。エイジが安心したのもつかの間、ルキロは銃を捨てて、獣のように吼えながら、彼の首に手をかけて、

力を込めてきた。ルキロの小さく柔らかな手が自身の筋力により壊れてしまうのではないか。それほどに凄まじい力が躊躇もなくエイジの首にかけられようとしていた。だが、エイジは首の肉に完全に指がめり込む前に強引に身をよじってルキロの手を振りほどいた、するとルキロは、攻撃的な表情だったのが今度は逆に怯えたような表情となりエイジから逃げようとした。トランクのドアを上手く開けられず、窓から這い出た。バランスを崩し、受け身も取らずに不自然な体制のまま地面に落ちる。すぐさま起き上がり、脚の筋でも傷めたのかびっこをひきながら森の中へ入つて行こうとする。

エイジはルキロを追おうと、車から降りた。だが追うまでもなく、ルキロは突如倒れ、全く動かなくなつた。エイジは恐る恐る近寄つてみる。どうやら気を失つているようだつた。恐怖と苦痛とに歪んだ形相は、少しだけやわらいだが、悪夢でも見ているのが時折表情が痙攣する。彼女を抱き上げたエイジは、生命には別状なさうなのを確認し、少しだけ安堵の表情を浮かべた。

「大丈夫だから

そして、力強く抱きしめた。

3

タグザムティアの超大な旗艦であるテオ・リュー・フィルクを、七隻の戦艦シル・カルが護るように囲んでいる。護るようにと云つても、数十キロの向こう上空にいるライスカイス軍船団との間にこれといった緊張もなく、なれ合いの戦争を小馬鹿にしている者すら内部に多かつた。ましてや今回はその色が強いためなおさらである。シル・カルの外観はどの機体も違ひはないが、内部人員の構成割合が若干異なつており、差別化が図られている。ある一隻は、通信兵の割合が他と比べて高かつた。演劇を行うホールのような、広大な空間の中、千五百人近くの通信兵がびっしりとつまつている。その空間の七割近くを女性が占めている。暗号解読、変換、送信、傍受、そしてそれらを行うプログラムの開発検証。彼等彼女等の仕事

である。

レクン・ニユ・ヤという短い黒髪の少女も、そんな通信兵の一人だ。

今回の戦いは、人々が考へてゐるように、まさにルールに乗つ取つたゲームであり、諜報戦に必死になる意味はない。せいぜい、元帥代行が飛ばした探査機、それからの信号を残さずに拾つておけばいい。仕事の無意味さに、だれた空気が場に充満していた。

レクンは、そんな中にあつて一人真面目な表情で、顔にかけたゴーグルディスプレイの情報を睨んでいた。手元のツマミを回す。耳に当てているゴーグル脇のスピーカーから、ノイズのような音が聞こえており、ツマミを回すことによりそれが変化していく。だが音の高さが変化するだけで、ただの雑音に変わりはなかつた。彼女はある信号を必死で探していた。その信号が、絶対に発信されていい事を願いながら。

彼女の背中に男の声が投げかけられた。レクンはスピーカーからの音に集中しており、一度目の呼び掛けで初めて気付き、びくりと肩を震わせた。振り返り、ゴーグルを外した。

長身、赤茶けた髪の毛の青年が立つていた。リーアック隊の一人、ウェルである。

突然のウェルの訪れに、レクンは明らかに動搖していた。何も言葉が浮かばない。ウェルと見つめ合つた。ウェルの表情が少し変化する。普段のレクンならば、ウェルの顔を見た途端、元気に話し掛けてくるのに……

「ルキ口から、まだ連絡はないのかな」

ウェルの言葉に、またレクンは身を震わせた。怯えのよくな、怒りのよくな……悲しみのよくな、複雑な表情を浮かべた少女の姿がそこにあつた。

「どうした。何かあつたのか」

レクンとウェルとはもともと全然知らない間柄だったが、レクンがやたらと話し掛けてくるため、いつしかウェルも通信兵に用があ

る時はレクンに声をかけるよつになつてゐた。

「……なんでも……ないです」

レクンの声はどこか力ない。

「そうか。で、ルキロは」

「まだ、何も。……あの……そんなに、あの娘が気になりますか」
「当たり前だる。……まあ、親が決めた事ではあるけど。それに、

同じ隊の仲間だらう」

「……」

「君は彼女と同期だつたよね。そういうれば、ぼくは彼女の子供の頃とか全然知らないなあ。どんな娘だつたの」

「どんなつて……。あの、いま忙しいですから、ちょっと……」

「あ、そう。邪魔したね。じゃあまた」

「すみません」

レクンは頭を下げる。

「ルキロからの連絡、まだないつてさ」
すぐそばで腕を組んで待つっていたノウヤンに歩み寄り、話し掛けた。

「聞こえてたよ」「……

にべもない反応。

ノウヤンは長身の女性で、黒の髪が腰まで届いている。地なのがどうか、少し怒つたような表情を浮かべている。

「しかし、レクン、なんか様子が変だつたなあ。いててて……鼻をつまむな」

「鈍感だねえ。」この女心の分からん坊やめ

「な、何がだよ」

「もうレクンが可愛そだから、あまり近寄らないほうがいいよ

「?」

「そうだよ、カイ、ぼくが思うのはね……」

タ・ト・カイはライスカイスの人間である。ライスカイスは単純な空間距離で地球から数千光年も離れた惑星であり、タグザムティアと同星系に属している。

「……違う違う。……それだとそもそも君の……」

カイの生まれ育った居住区域は、成人男性の九割以上を軍人職が占めている。軍人、または軍人となるべき人間のための生活エリアであり、彼等の生活のためにその他一部の職が存在するにすぎない。基本的にライスカイスの人間は、感情に左右される事なく仕事をこなす。他星に自らを輸出する事業が成り立っているほどである。だが、生まれてくる子供の脳に欠陥が見つかる割合が非常に高い。大半は軽度なもので生まれたその場で治療されるが、それすら不可能な場合は人間扱いすらされずに処分される。

「あー。……そうじやないんだがなあ」

まれに、生まれた時は健常であつた者が、大きくなつてから発症する例もある。さすがに簡単に処分というわけにはいかず、よほど重度の障害でなければ、放つておかれりし、就労する事も可能ではあるが、あくまで本来は存在すべきでない者、「異端」として扱われた。いま、カイの目の前にいるトキ・ワ・キーレンもその「異端」の一人である。彼等の種族は基本的には男女ともにほつそりとした長身で、地球人などの価値観からすると驚くほどにみな容姿端麗なのだが、キーレンは鼻が赤く大きく、唇は異様にぶ厚く、肉体はかなり肥満している。腕は太いが詰まっているのは筋肉ではなくただの脂肪で、一步を踏む度に腹の肉と一緒にだらしなく揺れる。運動能力も、反射神経も鈍く、ディオを操縦しての戦闘どころか、援護の砲撃手としての役割すらもこなせそうと思われない。

彼は自分を異端と認識しているのか、やたらと感情と云うものを気にする。理屈っぽく、議論が大好きだ。もつとも、議論とは返してくる相手がいるから成り立つものであり、もつぱら彼は押し付けの講演専門だつた。

「友よ、そもそも心とはなんだ」

キーレンは大袈裟に両手を広げてみせる。

「心は心だろう。他にどう云える」

カイはにべもない反応を見せる。

「心があると云つ事はだね、つまり生きていのつて事だ」

「当たり前だ」

「なぜ君たちは飛び跳ねて喜んだり、泣いたり出来ないのかなあ」

「そんな無意味な事は、下等な生物だけにさせておけばいい」

「違うんだなあ。笑つたり泣いたりは高等な生物でないとできないよ」

「科学的に高等な反応だろ？と下等な反応だろ？と、ぐだらん行為に違ひはない」

「そういうのを否定しちゃつたらや、生きている意味ないじやない。ただ楽に生きたいんだつたらや、死んでいれば、楽だよオ。ぼくはまっぴらだけどね」

とふうとキーレンは、ひやつひやつと下品に笑った。

「 もういいだろ？。おれは行くぞ。グルーヴの調整がある」
彼等は幼少の頃、同じ居住塔で暮らしていた幼馴染みである。だから、キーレンはカイによく話しかけてくる。カイも渋々と相手をしていたが、最近苦痛になってきた。

カイが立ち去つたその後も、キーレンは一人で話をしていた。芝居のように大袈裟な口調、手ぶりで。

「 聞くがよい、市民よ…」

壁面の真つ黒なスクリーンに、緑色で数行の文字があらわれた。

「なになに、グド監査官が呼んでいる？彼は最近よくぼくに話しかけてくるなあ。ぼくの思想に胸うたれたのかしら。ひやつひやつ」

ついに共感者を得たりと勝手な妄想の世界に浸りながら、キーレンは飛び跳ねるように部屋を出た。だが.....そのキーレンは一度と戻つて来る事はなかつたのである。

「……キロ……ルキロ……」

深い海の底から、その声が水面に波紋を作るのが見えた。ルキロの意識はその波紋を目指し浮上を始めた。

「……つた、目が覚めたよ、ドクター」

ルキロは薄暗い部屋の、汚れた堅いベッドに寝かされていた。服装は出てきた時とままだが、袖がまくられ、腕には点滴の針が刺さっていた。心配そうに見つめるエイジのそばに、見知らぬ、眼鏡をかけた中年の男が立っていた。男は、いたるところに薄茶に変色した古びた白衣を着ている。

「エイジ……ここはどこなの。なんでわたしはこんなところにいるの。……この人は？」

ルキロは状態を起こすと、不安そうにあたりを見回した。

「ここは麓の町だよ。こちらはよく世話になるお医者さんでリーゼムさん」

「リーゼムです」

長身の、がつちりとした体躯に相応しい低い声だった。田元の雰囲気は笑っているわけでもないのに柔らかく、威厳と愛嬌とを兼ね備えた顔の造作であった。

「前にルキロが怪我で意識を失つてた時も、リーゼムさんが来てくれて、ルキロや父さんの事を診てもらつてたんだよ」

「そうだったんだ」ルキロはリーゼムの顔に視線を向けて、「ルキロです。気付かない間に、何度もお世話になつてしまつて……」

「ただ趣味でやつてるだけなんだから、別に気にしないでいいよ」

「おい、君が云々台詞じゃないよ、エイジ君。……それで、具合はどうかな、お嬢さん」

エイジの茶々をやんわりかわすと、リーゼムはあらためて赤毛の少女へと視線を向ける。

「どうつて、わたし、自分がどうなつたのか、全然……ただ、なん

だろ……なんだかとてもすつきりした気分。……わたしに、何をしたの？」

医者は問いかけに即答しなかった。

「もうしばらく横になっていたまえ。もつとよくなつたら、隣の部屋で話そつ」

ルキロはその言葉に従い、横たわつた。目覚めたばかりだというのに、目を閉じると、すぐに睡魔が襲つてきた。ルキロはそれに逆らわなかつた。

6

「コンピュータの暴走、だと思つのだが
リーゼムは淡々と推測を述べる。

「コンピュータの……暴走。そんなの聞いた事がない
ルキロは不安と驚きの表情を隠す事ができなかつた。

「何？ コンピュータって？ ルキロと何か関係が……え、まさか
エイジは記憶の糸を手繕り、驚愕した。

「地球でも昔はそつだつただろつ。歴史研究家のエイジ君
「あの、体の中に埋められた……何だつけ」

「樹脂コンピュータと呼ばれる物さ。最初は、マイクロチップを拒否反応を示さぬように本人の細胞と同じ情報でコーティングして埋め込んでいた。最終的には、コンピュータそのものがある特殊な樹脂で作つてしまつた。従来のコンピュータが『石』であつた事を考えれば、『樹脂』であつてもおかしくはない。そう考えたある技術者が生み出したものだ。それは精神、肉体に様々な影響を及ぼす。当初は人を治療するための純然たる医療目的に利用されていたが、結局軍人のオモチャにされ、人々の怒りに触れ、消滅した」

「そういや聞いた事がある。……それと、同じ物が
エイジは小さく呟く。

「ああ。しかし驚いた。その樹脂を体に完全に吸収させる……つまり、消去してしまつと云つてあるんだが、ちょっと彼女には悪い

がその薬を注射してみたんだ」

「人体実験かよ、リーゼムさん」

「大丈夫大丈夫。体内的成分分泌率を少し変えるだけの薬だから。あくまで異物除去を行うのは自分自身の肉体だ。……で、そうしたら、薬の効果はテキメンだ。悪夢から解放されたのか、心拍数もすぐ正常値になつたよ」

「でも、そんな無茶して……体は大丈夫なの、ルキロ。……ルキロ？」

さきほどの異変が、体内に埋め込まれていた樹脂コンピュータの為だと分かつても、まだ、ルキロの表情から困惑の文字は消えなかつた。

「平気だよ。……何ともない。……でも……薬で素子がなくなつたのなら……何で……わたし……言葉が、わかるの？ どうして二人とも、わたし達と同じ言語をしゃべっているの？」

7

「なんと、樹脂コンピュータが翻訳装置のよつた役割もしていたとは。だが、結局そんなものは必要なかつた。……どつちがどつちの真似しているのか知らないけど、偶然とは考えにくいな」

ドクターリーゼムが腕組みする。

「昔、なんらかの接触があつた」

現在の状況から回答を推測すると、どうしても非個性的なものにしかならない。エイジは、ルキロが素子と呼んだ樹脂コンピュータ、それによる自身への影響がどう云つものなのか想像してみる。翻訳と云うのは、吹き替えのように誰かの声が重なつて聞こえてくるのだろうか、それとも声ではなく五感として捉えられない情報を直接脳が受け取るのだろうか。

「まあ、それはそうだろうな、エイジ君。……非常に安っぽいドーラみたいだが」

「それが、地球がこんなに退廃してしまつた事に関係あるかも知れ

ないね

「ちょっと話が飛びすぎるが、何かしら関係があるのかも知れないな。……それとだ」リーゼムは、ルキロに視線をやる。「今回の件で、地球への先発隊がすでにいろいろ調査しているわけだろ?」「勿論。地球に向かう途中、収集したデータをうんと勉強させられた。地理、気候、人種、文化、歴史」ルキロは答えた。

「今現在の事情を探るために、先発隊が派遣されたわけだが、我々も知らないような、ずっと昔の地球の歴史も、君たちは知っているんだろう?」「航行可能な宙域は、ほとんど監視しているはずだから、ある程度は……」

「それなら、言語が同じ事を知らないわけがあるか?」

その言葉はルキロの胸を鋭く抉つた。

確かにおかしな話だ。最終的に首の素子が簡易的な翻訳をしてくれるとは云え、どの言語体系に属するのか、またどう云つた文字を書くのか、その程度の講義は必ず行われる。今回、それが一切なかつた。

いつたい誰が何を隠しているのだろうか。ルキロの脳裏にさらにふとした疑問がわいた。

「……地球に、エクシユールみたいな機械はないの?」

「エクシユールとは?」

「あの機械の巨人だよ。緑色の方に、ルキロは乗つてたんだ」エイジが補足する。

「見たことも聞いたこともないな。地球では戦争にそのような兵器が使われた事は一度もないはず。でも、地球にはかなり塗りつぶされた歴史があるから、何とも云えないがね。樹脂コンピュータに代表されるような情報処理技術の高速化や大容量化に関しては格段の進歩をとげた事は間違いない事実だが」

「近くに、軍事用研究施設で有名なところはないの?」

ルキロは、この大陸が戦闘の舞台となつてゐる事も、偶然ではないと考えていた。

「変な事に興味を持つんだな。近くには無いけど、この大陸内ならば……ええと、その昔、カナダと呼ばれる国があつて……現在では完全に荒廃してしまつてゐるが昔はここに、凄い都市が存在していたんだ」

「どんな」とエイジも興味深そうに尋ねる。

「単純に云つと、研究のためだけの都市だ。様々な科学技術が生み出されていく都市。西暦一千年代において世界の医学や科学は、常にそこを中心として発展していつたそうな。民間だったのかどうか知らないけど、主な兵器もそのあたりでかなり開発されていたと聞く。わたしが知つてるのは、そのくらいだな」

「その都市は、どの辺にあるの？ どう行けばいいの？」

ドクターは地図を見てくれた。手帳に印刷された小さな世界地図で、かなり汚れており、文字は完全に読めなくなつていて。彼は地図の一点を指した。ルキロとエイジは覗き込んだ。

「ここが現在地だ。地図上では……ここから……ここ、北西にまつすぐ……山間や荒地の地形を無視して直線ならば約一千五百キロ」

ルギロは初めて目にする「地球の青い空」に驚きを隠す事が出来なかつた。エイジがトラック修理の部品を買いに行つてゐる間、近くの岩に腰を降ろし、何もする事なくつてはいたが、ふと気付くと頭上一杯に青い空が広がつてゐた。常にどんよりと灰色の雲に覆い切られ、そこから覗く空の色も弱々しい赤い色だつたのが、一体どうなつてゐるのだから。

「うわあ」とそれだけ云うともう紡ぎ出す言葉を口が忘れてしまい、役目を失つたその口はただ開いたまま素頓狂な顔のまま、天を見上げているばかりであった。

曲がりくねつた狭い道の途中で、急にトラックの調子が悪くなり、動かなくなつた。前々からおかしいと思っていた部品が原因だつたようで、エイジは徒步でその部品を買いに出かけた。道は緩やかな傾斜になつており、眼下には街の景観が広がつてゐる。そこはエイジたちがよく訪れる「麓の町」ではなかつた。すでに彼等の「町」は南東遙か数百キロの彼方にあつた。

「その都市へ行ってみよう」と云い出したのはエイジだった。自分自身の好奇心もあったが、それ以上に、ルキロの心を助う手伝いがしたかった。トウジは気が抜けたほどにあつさりと、承諾してくれた。「仕事が手につかないほど気になる事があるんなら、ひとつと行って、ひとつと帰つて来いや。そのかわり、あとで倍働いてもらうぞ」と。

自分達にあのような恐ろしい運命が待ち構えている事など、当然
今のエイジ達が知るはずもなかつた。

買い物に行つていったエイジが、いつの間にか戻つて来ており、ルキロの顔を見てくすくすと声を漏らしていた。ルキロはちょっぴり恥ずかし気な色を見せ、軽く笑う。

「部品買つてきたよ、すぐに修理するから」

「うん。わたし全然わからないから。でも何か手伝える事があれば云つてね」

「ありがとう。ま、おれ一人で大丈夫だよ」

「……ねえ、エイジ、この空の色つて……」

「本来地球が持つていなければならぬ、本当の空の色だよ。何かの風の具合で、低空の汚れた空気が飛ばされる時がある。目に見える大きな汚れが消えて、光の屈折率が変わるから一見綺麗に見えるだけで、危険な菌を沢山含んだ空気に変わりはないんだけど」

「でも、ほんとに綺麗な色だよね、青い空なんて。そうか、昔はこの見た目と同じように、実際も澄んだ空氣だったんだ」ルキロの楽しそうな顔が、次第に寂し気なものになっていく。「……でもそんな環境で生きる権利を地球人は自ら放棄してしまったんだね」「そうだね。でも人類が驕慢な心を抱いたりしなければ、いつかはもとに戻るよ」

「驕慢な心を抱いたりしなければ……」

ルキロは少年の言葉を反芻してみる。

「ルキロの星はどんな空なの」

「ここにいつもの空とあまり変わらない。赤くてばかでっかいけど弱々しい太陽が輝いている。わたしが幼い頃にいた居住区は、夜になつても太陽の頭が出ていて陽が暮れないんだ」

「ふうん。どんなとこなんだろう。ここと全く違う生活なんだろ」ルキロは頷く。勿論彼女が地球で経験した短い記憶との比較でしかないが。

どちらからともなく黙つてしまい、一人はざつと空を見上げていた。風向きが変わり、段々とまた赤い空へと戻つていった。

「ルキロ」

寂寥を破つたのはエイジの声だった

「ルキロつていま何歳?」

「……どうしたの、いきなり変な事を聞いて」

「いや、ちよつと氣になつてさ。別に、答えたくなればいいんだけど」

「いいだよ」

「エーヒュウに？ えつらく若く見えるんだなあ。星が違うからしうがないのかも知れないけど。……なんだ。凄い離れているなあ、ちえつ」

「何よ、その顔は。……それじゃ、エイジはいくつなの？」

「十六」

「じゅうろく？ え、まだ子供じゃない」

「失敬な」とエイジは慄然とする。

「違う違う……十六なのに、体が大きいから……メルリカよりちょっと上なだけなのに随分と……」

「普通だけなあ……待てよ、あの幼女よりちよつと上？ ……ルキロ、地球時間とはまた違うんじゃないか？」

「あ、そうか。そうだね。他の星の人間と、年齢の話なんかした事ないからすっかり忘れてた」

資料で学習していた地球の時間を計算し、暗算で自分の地球での年齢を割り出してみる。

「……十七年と……六十一日」

「十七。……そつか。一歳上なだけか。おれも来月で十七だから、ほとんど変わらないね」

「だからさ、さつきからなに年齢なんか氣にしているの。変だな、地球人で」

「ルキロ、好きな人いるか」

「ちよつと何？ 調子狂うな、もう。……リーアックのみんなも、あとエイジ達も好きだよ……」

「その好きじゃなくて。なんていえばいいんだ……愛してる奴はいるの」

「だから、みんな愛してるって」

「うわあ、言葉の感覚が全く違うのか。……じゃあ、け、結婚した

い奴はいるの？」

「いるよ」

即答。

エイジの内部で何かがガラガラと音を立てて崩れていく。
がつくりとうなだれながら、なんだかんだとさらに質問を続ける。
「結婚……したいだけ？　かたおも……ルキロがしたいと思つてる
だけとか」

「タグザムティアに帰つたら、結婚する予定だよ」

「ええ、いつたい誰とさ、つておれが知つてるわけないか。ほ、ほ
んとほんとなのかなよ」

「わたしは物心ついた頃にはもう親がいなくて、その人の家で育て
られたんだけど。その両親の考えでね。……でも、わたしもその人
の事、思つているし」

「そうだつたのか……畜生め」

「本当にへんだよ、エイジ。どうしちゃつたの？」

「そんな、いたぶるような台詞はやめておくれ」

「だから、何がなの？　はつきり云つてくれないと、全然分からな
いじやない。……地球人でみんなこんななのかな、それともエイジ
がどびきり変わつているのかな」

エイジはため息を吐いた。

異星人だから仕方ないのか。

それとも、ルキロは自分の星でもぶつちぎりトップレベルの鈍感
娘なのでは。……そうに違ひない。

遠くに、犬と遊ぶ子供の姿が見えた。ルキロはそんな光景を楽し
そうに見ている。

「ルキロ……」

エイジの口調が突然あらたまつた。

「なあに」

振り向くと、エイジの顔がすぐ間近にあつた。

「そんな近くに寄つて、どうし……」

小さく開いたルキロの唇を、ゆっくりとエイジの唇がふさいだ。ルキロの目が大きく見開かれた。そして、力抜けたように細められ……沈黙が訪れ……全てが静止した世界のまま、少し時が流れる。再び目が大きく開くと同時に、鋭い叫び声が雷鳴のように静寂を破つた。

「馬鹿！」

ルキロの右拳による一撃がエイジの頬に炸裂。エイジの肉体を刹那に襲う一種の反重力作用に、彼の肉体は軽々と宙へ舞つた。空中で不自然な体勢となつたところで、重力が正常に働き始めた。エイジは後頭部を地面に強打した。強烈過ぎる激痛に呻き声をあげる事すら出来なかつた。

あまりの痛がりよう、ルキロも少し気の毒に思わないでもなかつたが、彼女の心中は、それ以上に彼への怒りの占める割合のほうが大きかつた。ルキロの真っ赤な髪の毛と同じくらい、その顔も真っ赤になつていて。彼女らの習慣では、婚前では軽い口づけすら許されていないのだ。あくまでもそのような風習が美德とされると云うだけで、誰もが守つてゐるわけではないのだろうが。

2

「ルキロ、まだ怒つてる？」

車の修理は無事終了したものの、揺れの酷さは相変わらず。ルキロの顔色も相変わらずだつた。

「怒つてる」

ルキロはずつと窓の外に視線をやつたまま。エイジの方などこれっぽっちも見向きもしない。

「どうすりや許してくれんのさ」

「今考えてる」

エイジはカーラジオのスイッチを入れた。特権階級だけが持てるテレビと異なりラジオは大衆に広く普及している。ただ番組の内容が気のきいた音楽ではなく、今回の侵略に対して地球側の提示した

条件等のやりとりに關するものだつた。エイジはすぐにスイッチを切つてしまつた。つまらない番組といつものもあるが、それだけではない。何か、妙な音を聞いた気がしたからだ。

「ねえ、ルキロ、何か変な音がしないか」

「わたしの隣から変な声は聞こえるけどね」

「そういうイジワル云つなよ。……ほんとに変な音が聞こえたんだつてば」

「別に何も聞こえないよ」

「気のせいだつたのかなあ」

突然背後で何かを引っ搔くよつた大きな音がした。

「やつぱり気のせいじゃない！」

もう原価償却のとつくにすんだ、壊れかけたエンジンのたてる不快で大きな音にも消される事なく、今度はルキロにもはつきりと聞き取る事が出来た。引っ搔くよつた音から、何かを激しく叩く音へと変わつた。その叩きかたは次第に激しさを増していく。

荷台に誰かが乗つっているのだ。エイジはトラックをとめ、後ろへと回つた。荷台には誰の姿も見えなかつた。エイジは上へとあがり、荷物を一つ一つ点検し始めた。仕事に使う道具は降ろしてこなかつたので、食料、衣料の替えなどを含め、荷物はかなり多い。だがしらみつぶしに調べる必要などはなかつた。衣料品の入つたトランクが横になつてゐる。それが細かに揺れだし、引っ搔く音がその中から聞こえてきた。エイジは恐る恐るトランクを開けた。いや、留め金を外した途端、それは弾けるよつた勢いで勝手に開いた。

「ひどいや、兄ちゃん」

小さな男の子が飛び出し、それだけ叫ぶと、喘ぐよつに大きく息をしはじめた。

「タク。……お前、何やつてんだ」

体の力が抜ける。

「……これくらい離れていれば、もう戻される事もないと思つて、トランクから出よつとしたら、開かないんだもん。だんだん苦しく

なつてくるしさあ

「留め金外れてりや閉めるわい。スカスカのぼるトランクでなければ、お前今頃、天国をドライブしてたぞ」

「「めんね。……でももづ、ここまで来れば、帰らなくてもいいよね。歩いて帰れるはずないし」

「いや。家に戻つてもらう。道が遠かろうと何だらうと、たとえ地球の裏側だらうと」

「ええー」

「それが嫌なら、一つ云つ事を聞くか」

「聞くよ」

「……しばらぐの間、ルキロの御機嫌取りをしり」

「何かやらかしたの?」

「うん」

3

次の町でも物資の補給に立ち止まつた。食料は沢山あつたはずなのだが、三人目の出現で完全に予定が狂つた。エイジ発案ルキロの御機嫌取り作戦が予想以上に効果をあげ、縮こまつていたタクが逆に調子に乗つて、美味しい食事を要求しだした事が大きな理由であった。

町の中央の広場は広く、ささやかだが様々な出店があり、見ていて飽きない。

ルキロとタクはベンチに腰をかけ、話をしていた。

「へえ、来年から? 町の学校? 行けるんだ。よかつたね」

「うん。……兄ちゃんが、父ちゃんに云つてくれたんだ。仕事の手伝いをもつともつとたくさんするから、タクを学校に行かせてやつてくれつて」

「エイジが……」

「兄ちゃんが、今どき珍しくすつごく勉強が好きなんだ。いろいろ事を知るのが、楽しくて仕方ないみたい。小さい頃、今の時代は

学問なんてお金になんかならないんだぞ、ってどんなに父ちゃんに云われても、それでもいいから学者になるんだって云い続けてたんだって」

「で、なれたの」

「なつてない。兄ちゃんまだ十六だよ」

「あ、そうか」

「……結局さあ、学校にも行けなかつたし……たまに友達の家で本を読んだところでそれで学者になれるわけもないし……体も大きくなつて、家の仕事も覚えていつて……だから、ますます時間がなくなつていって……」

ルキロは空を見上げた。つこちよつと前まで、空一面に広がつていた青々としたカーテンは、今やまた再び本来の淀んだ赤い色に変わろうとしていた。

「結局、それつきりになつちゃつて……だから、余計にぼくには学校へ行つて欲しいらしいんだ。別にぼくは学者になるわけじゃないのにね」

ゆつくつと、空から地上へ視線を落とす。すると、向いから両手に力ゴを持ったエイジが歩いてきた。

「食料たくさん買い込んできただぞー」

「エイジ……」

ルキロはベンチから立ち上がる。エイジのほうに歩み寄る。

「なに……」

エイジの両肩に手を置いて、一瞬、

「許す」

しばらぐの間、エイジはポカんとした間抜けな表情をしていた。やがて、ゆつくつと丁寧に荷物を地面に置くと、途端に激しく踊りだし喜び始めた。

「やつたぞ、タク。お前のおかげだ。今日の食事おれの分も全部やるよ」

タクを抱き締めて喜んでいるエイジを見て、ルキロも声をあげて

笑った。

「ほんとに、変なのー」

「でも燃料は高かつたから買わなかつた。次の町に行つてからにしよつ」

「不便だね。燃料とか補給とかつて」

「どうして？ ルキロたちの乗り物は燃料いらないの？」

「補給は必要ないよ。内部で作られるから。激しい運動させたり大出力の兵器使つたりしない限りは、その場で次々作られるので十分に間に合つ」

「ふーん。地球にも、リトルバン発電池とか呼ばれる無尽蔵にエネルギーが作り出される電池があつたらしいけど……」

「へえ。……でも」ちよつと間をおいて、「本当にいいの？ 二人とも。こんなところまで……」

「大丈夫。おれが好きで始めた事だし、親父にだつて断つてきているんだから。タクが来てしまつた事に関しては、帰つたらぶつとばされる事はカクゴしなきやならないけどね」

「まー、ぼくが兄ちゃんと一緒に謝つてあげるからさ」

「お前が謝るのは当たり前だ。偉そうに云つた……どうしたの、ルキロ？」

すでに空から青色は完全に消え去つてゐる。赤い空を、どんよりとした黒い雲が覆い隠している。ルキロはそんな上空を見上げていた。何やら不自然な薄暗さを感じ、エイジたちも空を見上げた。雲の下に巨大な船が見えた。その下に小さな（その巨大な船に比べてだが）船が何隻か浮いており、その船の周囲を無数の黒い影が舞つてゐる。

「始まつた……」

「始まつたつて……まさか、タグザムティアとライスカイスの一度目の……」

真上にある戦艦はライスカイスのゴ・スイッグ。その中から、輸送艦ガ・ガーヌや、人型兵器であるディオの姿が見える。輸送艦は

おそらく陸戦用ディオであるギ・グルーグを搭載しているのだろう。地上を目指しゅつくりと下降してくる。

空中を青い光の筋が走つた。その線の先を追うと、何やら人の形のシルエットが見えた。

ルキロはアロ・イーグの姿を確認した。その周囲、後方に注意を向けた。雲の隙間から見え隠れするタグザムティアの戦闘艦シル・カルの姿があつた。輸送艦ガ・ガーヌは、その真下の山林や渓谷へと降りてゆく。

爆発が起き、地響きを感じた。このすぐ近くだ。建物の向こうにジーン・ウーズイの上半身が見えた。ルキロ達のいる広場に、ギ・グルーグが背を向け、飛び込んで来た。

町の人々は一瞬の混乱の後、一斉に逃げ出し始めた。店を出していた者たちも、それを捨てて避難を始めた。ギ・グルーグの出てきた通りから、さらにジーン・ウーズイが一機、また一機とあらわれた。数の上で完璧に劣勢となつているギ・グルーグは、起死回生の策とでも考えたか、巨体にみあわぬ高い跳躍をみせた。ジーン・ウーズイの群へと飛び込もうとする。だが、ジーン・ウーズイは一機たりとも遅れる事なく、銃をギ・グルーグへと向けた。黄色く輝く光の一閃。ギ・グルーグへの攻撃は操縦者の乗つている胸部を集中した。ギ・グルーグは空中で爆発した。

その爆音が人々の恐怖をさらにあおつた。口々に意味の滅裂した叫びを発しながら逃げていく。逃げずに頑張り家族を探し求める者もいた。大混乱の中、さらに光線が走り、建物が破壊され、燃え始める。戦いに適度な空間を発見したからか、それともコロシアムの勇者になつたつもりなのか、次々と円形の広場にギ・グルーグとジーン・ウーズイの姿があらわれ始めた。

ほんのわずかの時間で、ここ一帯は炎の燃えさかる大戦場となつた。

「なんで、こんなところで戦うんだ。ムチャクチャだ」

エイジはぼやきながらもタクの手を引いて走つた。路地に入つた

場所に駐車してあつた車に乗り、キーを差し込む。タクが、続いてルキロが乗り込んだ。

「わざとしているわけじやないんだろうけど、迷惑を全然意識していない事は確かだね」

ルキロは複雑な表情を浮かべている。

「歩いて蟻を踏みつぶすようなもんか。でも、変だよ。だつて、地球を支配したいんだろ。なんでこんな神経逆撫でするような事するんだ。町を、ちょっと避ければいいだけじやないか。……そもそも、みんなが何度も云つてる事だけど、なんだつて地球で戦うんだ。……くそつ、エンジンがうまくかからない。ポンコツめ」

「命令系統が統一されていないのか……それとも、すべて誰かの考えなのか。……とにかく、この戦いには意味なんてないんだよ。地球の人たちみんな云つてるよね、ゲームの戦争だ、と。本当にこれは、誰かにとつて文字通りのゲームなんだ」

「誰にとつてさ」

「分からぬ。地球の支配と云つ表向きの発言、一部の者は真剣に考えているのかも知れない。その人間がこの戦いを考えたのなら、少しあは納得がいくんだけど。過去に色々とやらかしているから辺境にもかかわらず地球は知られているんだよ。地球人肃正を考えているのなら、先に恐怖、混乱を与えておくのは統治という戦略上全くの無意味じやない。でも、そんな連中じやなくて、もつと上に……誰かいそうな気がする。でもそれが、どこの誰なのか……」

聴覚が捉える情報のほとんどを、炎の燃える音が支配していた。渦をまくように低く、聞いているだけで体が燃えそうになる。その音に、女の大きな悲鳴が加わった。ルキロたちのすぐ近くのビルにも炎は魔手を伸ばしていた。その前に若い女が一人、おろおろと建物を見上げている。上階の窓から一人の子供が助けを求めていた。入り口は完全に炎に阻まれており、助けに入る事が出来ないでいた。「エンジンかかつたら、先に行つて待つていて。すぐ追いつくから」ルキロは車を降りた。

「おい、ルキロ」

「ここは危ない。早く行つて！」

ルキロは走り出す。

女のもとに駆け寄ると、

「二人はわたしが助けるから、安全なところに逃げて」

壁の前に立ち、真上へと跳躍した。驚くべき跳躍力で、樂々と二階の窓の枠に手をかけた。熱気に手が焦げそうで、苦痛に顔を歪める。様々な重力下での戦闘を想定したトレーニングの成果は地球の重力に対しても有効だつた。体を引き上げ、その勢いでさらに跳ぶ。身を縮め、回転しながら建物内に入り込んだ。階段の踊り場に着地した。

自分は何をしているのだろう。炎の熱気を肌に感じ、炎の音をその耳にしながら、ルキロは冷静に考えていた。どうも自分は地球人に対して何かの特殊な思いを持っているようだ。エイジ達に助けられた、仲良くなつた、という事とは異なる気持ちのようだ。だがそれが何なのか、自分でもわからない。何なのかわからないままに、とにかくそれは重く、辛く感じるものだつた。こんな事をしていく中で、少しでも軽くなつていくのだろうか。

ルキロは階段をかけのぼつていく。

自分は何をしているのだろう。再び自問した。そしてその心のもうもやを吹き飛ばすように、強引に素早く答えを導き出す。やりたいからやつているのだ。子供たちが危険だから……助けたいからこの階段を登つているのだ。地球もタグザムティアもない。

4

「熱い、熱いよ、お兄ちゃん」

ビルの一室。ユカは兄、コーディに抱き着いた。恐怖による震えが肌を通して伝わってくる。

階下は炎に包まれており、もう降りる事はできない。運動能力の優れた大人ならば何とか飛び越えられるかも知れないが、まだ幼い

「ージとユカにはとても無理な事だつた。

「ごめんな、ユカ、ほんとにごめんな」

コージは妹の頭に腕を回し、ぎゅっと抱き締めた。

「お兄ちゃん、高いところのほうがシンリヤクシヤがよく見えるからなんて、引き返して来るんだもん」

「ージの胸の中の、妹の声は弱々しかつた。すでに体力、精神力を消耗し尽してゐた。

「ごめん。ほんとうはな、これを取りに来たんだ」

「ージは、つい握りしめてくしゃくしゃにしてしまつた写真を広げた。

「お父ちゃんの……」

家族四人が写つてゐる写真であつた。お世辞にも美男とは云えず、体型も少々肥満気味の、しかし優し気な顔の男が、まだ赤ん坊のコ力を抱いてゐる。

「これしか、写真ないんだ。これがないと、家族三人になつちゃうんだ。いやだろ、そんなの」

妹は頷いた。

「そうだ……あと、あれがあるよ」

ユカは弱々しい足取りで兄から離れると、窓際にある机の一番上の引き出しを開けた。丸まつた紙切れを取り出し、広げた。様々な色の鉛筆で、何やら人の顔らしき絵が描いてある。輪郭は非常に歪んでおり、目や口なども顔からはみ出していた。

「兄ちゃんが、ちっちゃい時に描いた、お父ちゃんの絵」

ユカは嬉しそうに微笑んだ。その時……。室内をまばゆい閃光が襲うのとほとんど同時に……。爆音と同時に……。ユカのいた側の壁が吹き飛んだ。衝撃はコージの体をも襲つた。体がねじまげられ、無数の見えない手に突き飛ばされる。薄れていく意識の中、ユカの叫びを聞いた。反対側の壁に叩き付けられ、完全に意識を失つた。闇に包まれた。だが、その痛みにより、すぐに意識は回復した。……まだ夢の中にいるのだろうか、視界は暗澹としていた。……むせ

た……煙が充満していたのだ。

「ユカ！」

叫んだ。

視界のろくにきかぬ中、一步踏み出した途端、何か柔らかい物に躊躇そうになつた。ユカの体だった。ぐつたりとして、動かない。口と耳から血を流していた。コーディはその体を抱き起こし、名前を連呼しながら激しく揺さぶつた。だが、何度も名前を呼んでも返事はなかつた。それでもコーディは名前を呼び、体を振り動かすという以外に出来る事を知らなかつた。

煙に咳き込む女の声。だが、それはユカの声ではなかつた。ドアが開いた。そこには、ルキロが立つていた。

「コーディ」

母親はコーディの姿を見て、驚きと歓喜の入り交じつた表情で叫んだ。子供達が手を振つて助けを求めていた部屋に流れ弾が直撃したのを見た時は、ショックのあまり氣を失いかけた。だから、赤毛の少女の後ろに、自分の息子の姿を認めた時は、あまりの嬉しさにどんな表情を浮かべればよいか分からぬほどであった。だが……少女に抱かれた我が娘を見て、その表情は凍りついた。

「ユカ……まさか……」

「ごめんなさい。わたしが着いた時には……もう……」

赤毛の少女はうつむいたまま、どこに視線をもつていけばいいのか困つていた。

母親はユカの体を受け取り、抱きしめる。もじやと云ひ思い、希望が完全に崩れ去つた。目に涙を浮かべながら、ルキロに御辞儀をした。またユカに視線を落とすと、力なく呟いた。

「神様……わたし達が、何をしたというんですか」
ルキロは黙つて立つているしかなかつた。

彼等は、侵略者達が互いに潰し合うのを待っていたのだろうか。その小規模な白兵戦が終了し、勝者側ジーン・ウーズイの姿が数体だけとなつた時、それは始まつたのだった。

一体のジーン・ウーズイの頭部が小さな爆発を起こし、カメラアイを覆う硬質ガラスが砕け散つた。

操縦席内のスクリーン映像は、ヒビが入つたように不自然に分割されていた。その映像に映つている人々は、ウーズイに対しあからさまな敵意をむき出しにしていた。対戦車砲等で武装した地球人達だつた。三十人ほどの大人数で、この場ではあまり役立ちそうなもない迫撃砲や、さらに役に立たなそうな機銃を持つてゐる者もいた。服装はまちまちで全く統一感がなく、中にはヘルメット替わりに頭にナベをかぶつてゐる者までいた。

町の自警団が攻撃を開始したのである。彼等全員の火器が一斉に火を吹いた。だが対戦車砲の直撃をもつてしても、ジーン・ウーズイの装甲にかすり傷程度の損傷しか与える事が出来なかつた。指揮者の命令により、頭部のカメラにターゲットが変更された。人間の目の位置にあたる部分だ。だが、その攻撃のほとんどは、カメラどころか頭部にすら擦りもしない。まったく訓練されていない者の技術だつた。……結果的には、それを自覚していからこそ、彼等の大半は命が助かつたのだが。

反撃を受ける前に、彼等はとつとと逃げ出し始めた。予定していたようにバラバラに霧散し、それぞれ細い路地、ビルの中などに入つて行つた。だが……ジーン・ウーズイは彼等を追つた。路地に人影を見るや発砲し、彼等の入つていつたビルに乱射した。光のシャワーが地面に降り注いだ。ビルの壁を突き破り、腕を突つ込み、手当りしだい中の人間を捕まえ、捻り潰した。ビルごと破壊し尽くす破壊力である。その中には、あきらかに関係ないと分かる女や子供も混ざつていた。血や脳漿で薄汚れた悪魔の手は、さらに次の獲物を求めて動いた。手を上げて投降してきた者もいるが、光に包まれた次の瞬間にはその者の肉体は空氣に溶けて、風に流れていつた。

ルキロは「コーディとその母と一緒に、小高い丘の向こうの丘指して進んでいた。

ルキロはまたユカの躯を抱きかかえている。丘の向こうにコーディ達の父親が埋まっている墓地があるとのこと。そこに向かつっていた。背後に激しい戦闘の音を聞いていた。両軍の戦いだ。彼等の戦いの結果などにルキロの興味はなかった。自分の星へ早く帰りたい気持ちに変わりはなかつたが、こんな戦いにはもう加わりたくないなかつた。命令だから、軍人だから、という理由で魂さえも投げうたなければならぬのなら、軍人でなどいたくない。

音がとまつた。戦闘が終了したのだ。だが、続いて風が運んできた音は、なにやら異質な匂いを含んでいた。この音は、エクシユールとディオの戦いではなかつた。

ルキロは振り返つた。そして彼女は眼下に展開する光景を見るのである。町は光に、続いて炎に包まれた。光、炎、風、震動、それら全てが一斉に、人々の魂を餌食に求めて触手を伸ばし出した。さきほどのエクシユールとディオによる戦闘の激しさなど非ではなかつた。町全体が炎上し始め、建物が次々と崩れていく。人々の断末魔の絶叫が届いてきた。

コーディも足を止め、自分の暮らしてきた町の運命を目に焼きつけていた。

ルキロの体は震え始めた。それでも目を逸らさず、両軍の残虐な行為をじつと見ていた。地球人達が死んでいく姿をじつと見ていた。全身の震えがさらに激しくなる。特に脚の震えが酷く、立っているのもやつとなほどだ。かつて味わつたことのない絶望的な感覚。ルキロは耐えた。辛かつたが、目を逸らしてはいけないと思った。これが、自分たちの種族なのだ。

「タグザムティアは宇宙の誇り」

かつてエクシユールの教官が云つていた台詞を小さく呟いた。口に出す事で、そんな言葉を自分の中から捨ててしまう事が出来るの

なら、いくらでも絶叫していただろう。

眼下の映像を網膜に、そして記憶に焼きつける。絶対に……忘れない。ルキロは思った。

6

それは暗闇であった。正確には暗闇という概念すらない。ただひたすら「無」である。「無」を示す、「〇〇」の「一」が連なるだけの、そこは宇宙であった。

ときおり青白い光が輝くが、眠りにでもつかのよつこ、一瞬にして消失する。「無」に戻る。延々と、ただそれだけを繰り返していた。あちらで輝いたかと思うと、今度はこちらで、といつまでも繰り返していた。また一つ輝いた。だが、今度はその光は、なかなか消えなかつた。いつまでも輝いていた。

「……」

なにやら、意志を持つているものようであった。

「……」

もう一つ、青白い光が輝いた。

もう一つ。もう一つ、

一瞬にして、そこは星の海とかした。

「来ているようだな」

「来ているな」

「近いか」

「近いな」

「我らの蒔いた種か」

「そうだ。我らの蒔いた種だ」

「そして、あれが……」

「ああ。一つ……いや、一つか、戻つて来ている

「見つけられはせぬだろつか」

「さて。とにかく、この場所はあれのメモリーからは外しておいたがな」

「やつの生まれた場所をな
「やつの造られた場所をな

「やつの造られた場所をな
映像の新「ざかを残してな

「映像の断片だけを残してな」「今、深づぶらぶら三三三

今、探つてあるようだそ

「まったく、無邪気な事だ」

「やれやれ。では、消えるか。……おやすみ」

- おやすみ -

ରମେଶ୍ୱର

輝きは一斉に、瞬時にして消えた。また、闇という概念すら持たぬ闇が戻った。

7

建物の残骸がうず高く積もつてゐる。ここは一時間前まで、平和で賑やかな町であつた。

た。

「まこつたな。……エイジ達、ビリニルのんだわ！」

地図があたまに入っているつもりもあり、先に進んでいてなどと云つてしまつたが、冷静になつてみると、さつぱり方向感覚がわからぬ。

崩れ落ちたビルの残骸により通る事が困難になつた道を、石を登る感覚で進んでいく。どこに行つてもこのような調子で、いい加減うんざりしてきた。

エイジと待ち合わせる場所を指定していなかつた。この町からは道は幾本も伸びてあり、あちこちをうろつると徘徊したが、結局、この町で待つてゐるのが一番確実かも知れない、と考えた。

「こりで一番高いと思われる瓦礫の山に登り、周囲を見回した。

意外と近くにいるかも知れない。

だが、エイジたちの姿を見つける事はできなかつた。かわりに発見したのは、こちちに向かつて飛んでくる四機のアロ・イーグの姿だつた。

「また戦いか……」

ルキロはため息を吐いた。近くにアロ・イーグの敵となるだらうギ・グルーヴの姿を探した。巻き添えをくつてはたまらない。しかしどうやら、この周囲にはいないようだ。ルキロは、近付きそして遠のいていくであろうエクシユールの飛行の軌跡を黙つて見つめていた。

何かおかしい……

アロ・イーグは近付いてくる。そしてルキロは理解した。四機のうち一機は隊長機であるレ・アロ・イーグ。一機は腰の両側に刀を釣り下げていた。一機は背中に長大なライフル銃を帯び、一機は装甲をほとんど取り外した超高速仕様。普通の編隊は統一された機体のカスタマイズが行われているはずなのに……今ルキロが目にしている編隊は、あまりにもそれぞれが個性を主張し過ぎている。そんな連中を、ルキロは「他に」知らない。四機のスピードが落ち、下降を始めた。ルキロを取り囲むように、着地した。

「リーアック隊……」

ルキロは確認するかのように、小さな声を出した。機体の左腕に、青い稻妻のようなマークが見えた。もう、間違いはなかつた。しかし、この空氣はなんだろう。ずっと、戻りたいと思っていたはずなのに、また、彼等に会いたいと思つていたはずなのに、嬉しいはずなのに……この張り詰めたような空氣はなんなのだろう。……どこから来る？ この緊張は……

「ルキロ……」

隊長タゲンの野太い声が、拡声器から聞こえてきた。懐かしい声だつた。

「本当にルキロだつたのか」

タゲン同様に懐かしく……そして、今もつともルキロが聞きたかつた声……

「ウエル……。なんで、ここが……」

「さつきにこで、戦いがあつただろう。ウーズィのマイクが拾つた君の声らしい音を……たまたま通信兵のレクンが聞いていて、教えてくれたんだ」

そう云うウエルの声は暗く沈んでおり、少しも喜びが感じられないかった。

いつの間に寄つてきていた四機のジーン・ウーズィがそれぞれアロ・イーグの間に立つ。

銃を地面へ……ルキロへと向けた。

「突然の命令だつたんでな……正直、おれもうろたえている」

タゲンの震える声には怒りや動搖が込められていた。

「チームの人間が見つかつたらしいから、そちらに向かう、つて云つたんだよ。……そしたら、すぐに上から命令が来た。……捕らえろ、と」

「捕える……つて」

ルキロの目は驚きに見開かれる。

「お前首の……除去したる。……敵対行動になるんだとか。それともう一つ、逃亡罪だ」

「……違う！ 逃亡なんか、していない」

ルキロは叫ぶ。

「おれに云い訳をしても仕方ない。おれはお前を捕らえると命令されただけだ。……逆らつたら、おれたちまで罪人だ」

逃亡罪と反逆罪……重罪である。それぞれの罪だけでも、捕えられて自由の身になれた者などルキロは聞いた事がない。噂でしかなが、大半は死刑かそれに匹敵する重罰と聞いた。ルキロは自分がそこまで罪に問われるような事をしたとは思つていないし、申し開きようなどはいくらでもある。だがルキロには、そんな事よりも、今やつておきたい事があった。

八方を塞がれ、どこにも逃げ場はなかつた。ルキロは歯噛みした。そして次の瞬間、それは起きた。……ルキロの精神を絶望の底に叩き込んだ、信じられない事が。稻妻のような、青く激しい閃光を感じた。同時に浮遊感を覚えた。足下の瓦礫が突然に消失したのだ。自分の体がゆっくりと落ちていったのは、反重力が働いたためではない。彼女の内で、一瞬、時が静止してしまつたからだ。できたばかりの五十センチほどのくぼみにはまり、ルキロは尻餅をついた。

「ウェル……まさか……」

ウェルの乗つているはずのアロ・イーグが、銃をルキロに向けて構えていた。ライフルは背中に回したまま。どのアロ・イーグの腰にも装着されている短銃だ。再び稻妻が光つた。立て続けにそれは撃たれた。ルキロの頭上をかすめ、両脇の瓦礫がえぐられた。激しい熱波がルキロを襲うが、彼女の神経細胞は情報伝達という本来果たすべき義務をすつかり怠つていた。

地球人の少女をいたぶつている狂人とでも考えたのだろうか。町の自警団の生き残りが、自分が瓦礫の下に埋もれている事を利用し、見えない位置からウェル機に向けて、対戦車砲を放つた。左肩に被弾し、アロ・イーグはよろけた。すべてのエクシユールの顔がそちらを向いた。と同時に全てのエクシユールは背中から激しい砲撃にさらされる事になつた。対戦車砲、迫撃砲、様々な火器が、様々な音を立て、四方八方からエクシユールに炸裂する。煙幕弾が投げ込まれ、視界がきかなくなる。さらに、重火器による攻撃は熾烈になつていく。それでも、エクシユールの装甲に傷をつける事はできなかつた。だが、それはそれでいい。煙が晴れた時、そこにルキロの姿はなかつたのである。

「逃げられたか」

ウェルが淡々と、かつ演技めいた不器用な口調で云う。

「逃がしたんじゃないの」

ノウヤンがうそぶく。

「……ウェル、どうして発砲したんだ」

タゲンがたどす。

「どうせ……また、見せしめのために、と処罰されるんじゃないですか。前も、いたじやないですか。……だから……それならば、せめて自分の手で、と思いまして」

「まったく。おい、お前ら」タゲンはジーン・ウーズイに乗つている者たちへ、通信を入れる。「見たな。命令通りルキロを捕らえようとしたが、地球人の邪魔が入り取り逃がした。ルキロを同胞と勘違いしたのか、本当にルキロが我々を裏切ったのか、それはおれ達にやわからん」

ツーは胸部扉を開けた。外へ身を乗り出して、自分の機体の様子を自分の目で確認した。

「くう～っ。あの地球人どもめ、擦り傷一つ負っちゃあいないけど、さんざん小汚くしてくれたよ。せつかくの勇姿が台無しだぜ。……でも、まあ肩の稻妻が薄汚れて目立たなくなつてんのはいいけどね。おれ、あれ嫌いなんだよな、だつせーつたら」

ツーの体を白い光が覆い包んでいた。

彼の肉体は川に砂を流すように、光の中で崩れていった。分子レベルで破壊されていく。

光はそのまま操縦席を通り抜け、アロ・イーグの背中から突き抜けた。数瞬の間をおき機体が爆発した。アロ・イーグは地にくずおれ、さらなる爆発を起こし、四肢が吹き飛んだ。真っ黒な煙を吹き上げ、炎上する。燃えるアロ・イーグの炎の熱に揺らめいて見える……六機のギ・グルーグの影。

「くそ。ツーの馬鹿がつ。ぼけつとしてやがつて。……敵討ちだ。

全員浮上」

レ・アロ・イーグに続き、残る一機も浮き上がった。四機のジーン・ウーズイによる部隊は、白兵戦が得意なのか、全機抜刀し、ギ・

グルーヴに走りよった。六機のギ・グルーヴのうち、三機がそれに応戦する構えをとり刀を抜き、残る三機はレーザー銃を宙に向けてアロ・イーグを狙つた。ギ・グルーヴのレーザー銃が放つ閃光の間を縫うように、縦横無尽に飛行するアロ・イーグ。時折レーザーがかすめる事もあるが、特殊コーティングされた装甲の表面を薄く剥ぐ程度である。ノウヤン機の頭部カメラへの一撃が一機の視界を暗闇とし、続いてウェル機のライフルの一撃が操縦席を貫く。エクシユールとディオはよほど個性的な仕様に力스타マイズしない限りは、装甲の厚みはさほど変わらない。装甲と、コーティングされている特殊塗料、それとレーザーなどをはじく効果のある微粒子で機体を覆っている。狙う角度、タイミングにより、一撃で装甲を突き破る事も可能だが、当然、そうはさせじと互いに邪魔をし合う。そんな戦いの中、ノウヤンとウェルのコンビネーションによる攻撃は、確実に敵の装甲を貫いていった。冷静であつた。仲間の死は、生きていなくては悲しめない。ジーン・ウーズイは四機中の二機が失われている。だが、すでに三機のうちの一機をしとめており、今は残る一機と交戦中だ。アロ・イーグが相手している機体も、あと一機。刀を持つたタゲンのレ・アロ・イーグが、空中から素早い下降で襲い掛かり、ギ・グルーヴの前で不意にコマのように回転した。ギ・グルーヴの首が飛び、さらに次の回転で、胸部を両断されていた。刀に人の赤い血がうつすらとこびりついていた。

残る一機のディオに、エクシユールすべての攻撃が集中した。ギ・グルーヴはたちまちのうちに、頭部が消失し、肩が砕け、脚がもげ、腕が飛び、戦闘不能の状態となつた。

バランスを崩し、倒れそうになつたその瞬間、胸部ハッチが開き、ヘルメットをかぶつた黒いスースの人物が飛び出した。七メートル以上の高さをものともせず、地面に着地した。それと、走り出す動作とがほぼ同時だった。銃の狙いが定まらぬように右に左に動きながら、走つていく。あつという間に、瓦礫まみれの狭い路地に入つてしまつた。

タゲンは「畜生め！」と叫び、コンソールを力一杯叩いた。

9

カイはヘルメットをぬいだ。

グルーヴを乗り捨て、何分も全力疾走したというのに全く息が切
れていない。

半分瓦礫に埋もれたディオを発見する。ゾ・ヴィムである。

「これは、まだ使えるな」ハッチが開き、中の操縦者だけが撃ち抜
かれて死んでいるのだ。「おれの星の者にも、さつきの馬鹿のよう
な男がいるのだな」

自警団とやらの、あの頼りのない弾丸でやられたのだろうか。操
縦席には傷一つないようだ。中の男は、頭部に一発食らって絶命し
ている。彼等はみな驚くべき肉体の強靭さを持つているが、さすが
に脳を撃ち抜かれては生きていけない。カイは、中の男に手を伸
ばし、引っ張りだそうとした。……風が変わった……周りを囲まれ
ていた。……地球人達……それぞれ手に構えた銃をカイへと向けて
いた。

高度な文明といつても単な歴史の積み重ねであり、生身の生物が地球人に比べて桁外れに強いはずもない。そう夕力をくくっていた自分達の考え方を、彼等はほんの数秒後に呪う事になる。自分達は五人、しかも相手は両腕で同胞の死骸を抱え持っていた。彼等は町の自警団の者である。煙幕などを使用して、赤毛髪の少女を無事救出したばかりだ。赤毛の少女は恐怖に麻痺したのか、全く動こうとしなかった。二人がかりで抱えあげ、なんとか彼等の目の届かない場所へ逃げる事が出来た。また急追して来るのはいかと恐れたが、いらぬ心配だつた。すぐさま敵軍との戦いが始まつたからだ。

少女は瓦礫の上にしゃがみ込み、目もうつろで放心したように何かを呟いている。

両軍の戦闘は短時間で終了した。自警団の逃亡を助けてくれた側の敗北だつた。だが、勿論、彼等も憎むべき相手である事に変わりはない。一人がこちらに向かつて逃げて来る。身を潜めて銃を構えるのは、当然の行動だつた。

恐るべき相手である事は最初から分かつている。だから彼等は、声をかけて投降を求める事もせず、目配せによる合図で、いきなり発砲した。だが異星人の男……カイは、すでにその場から消えていた。うろたえている一人の首筋に横から手刀が叩き込まれた。白目をむき、倒れそうになる。カイはその男を盾にとり、悠々銃を取り出した。光弾が空気を引き裂き、そして一人の地球人の未来を引き裂いた。銃声がする度に確実に命が一つ減つていく。人質を無視して攻撃を加えるべきか、逃げ出すべきか、それとも……ほんの一瞬たりとも迷つてしまつた事が、地球人達の敗北に繋がつた。最後に、カイが人質にとつた男が残つた。カイが手を離すと、それは地に崩

れた。続いて光弾がその頭部を消し去った。

カイは作業を再開した。ゾ・ヴィムの中に入り込むとする。すすり泣くような少女の声に動きをとめた。さらさらとした赤い髪を風になびかせながら、少女が、崩れ落ちた大きな壁に腰を降ろし、両膝に顔を埋めていた。

「地球の女、そこにいると邪魔だ」

地球の女？ 少女は……ルキロ・エ・ルは顔を上げた。

「タグザムティアか」

ルキロは黙っている。だが、間違いはなさそうだ。

ルキロは再び顔を沈め、両手で頭を抱えた。死んでいった地球人の顔が浮かぶ。今まで殺してきた人間の顔が浮かぶ。……アロ・イークの銃を自分に向けたウエルの顔が浮かぶ。

何だ、この感覚は……。カイの心の中に、今までに感じた事のない何がが生まれていた。仲間と、憎しみの目を向けてくる敵……力イの記憶の中で人間と云う存在はただその二種類だけで、人々の様々な「感情」に触れる機会などなかつたのである。

自分が感じている気持ちの正体が分からぬ事が、たまらなく不快だった。無意識のうちに体が動いていた。ルキロの頭を、容赦なく蹴りつけていた。ルキロの抵抗なく横倒しになつた。その体制の今まで起き上がるとはしなかつた。

「何があつたか知らんが、いつまでもそばで泣くな」理性で制御できない突発的な感情と云うのは、彼等には極めて希薄である。だが、カイは今、それを初めて体験した。「生きているのなら、死ぬまで行動しろ」

何を云つているのだ、このおれは。カイは自問した。……ああ、そうか。キーレンとの問答の中で、おれの中に知らず溜つていつた「何か」……それを吐き出しているのか。

「じゃあ……殺してよ」

力無く、哀願するような瞳をカイに向ける。ルキロの台詞が終わるか終わらぬかのうちに、カイの手にした銃は倒れているルキロの

額に当てられていた。ルキロは初めて、薄く笑つた。これからの大出来事に心を運ばせている。苦しみから逃れられる。

カイは、ルキロの頭を土足で踏み、固定し、まったくの躊躇も見せず、引き金を引いた。

カイは知っていたのだろうか。…… Hネルギーは切れていた。

2

「敵……なんでしょう、わたしは」

「お前のようなつまらんやつを相手にする気はない。自惚れるな」居住ビルの上階は消し飛んでなくなっていたが、下の数階は完全な状態で残っていた。

ルキロは部屋の隅にうずくまり、相変わらず惚けたような表情を浮かべている。邪魔になるから、とカイに引っ張つてこられたのだ。カイは、何かの役に立ちそうな物を、と棚などを片つ端から物色している。作業する手を休めはしなかつたが、少女に何が起きたのかをあらためて訊いた。彼なりに気になつてはいたのだろう。ルキロは素直に答え始めた。もしかしたらそれで少しは楽になれるかも知れないと考えたから。自分が逃亡兵として追われる存在である事。チームの仲間であり、ある特別な仲だった若者に、射殺されかけた事。それらの事を、無意味なほどに事細かに長々と話した。聞き終えてカイは、

「……もしもおれがお前達と同じ低級な生物だったならば、おそらく腹を抱えて大笑していた事だろうな」無表情に呟く。さらに表情を殺して、「そんな距離で、軍人が弾を外すかよ」

ルキロは膝を抱えてしゃがんだ姿勢のまま、横に倒れ、転がつた。ウエルハシャゲキノメイシユデシタ……

呼び出し音が鳴り、カイは腰の通信機を手に取つた。

「キーレンか……」

3

闇の中に炎が浮かんでいた。大きな炎だつた。ゆらゆらと揺らめいている。その中に、服やら木の破片やらが時折投げ込まれる。地上に座つた十数人の男たちが、炎を囲んでいる。その男たちを、さらになに十数機のジーン・ウーズイが囲んでいた。

平和で賑やかだつたこの町は、戦火にさらされ、時間わずかにして完全に壊滅した。

像が吹き飛び、水も枯れている噴水の、狭いふちで器用に四人ほどの男が踊る。タグザムティア北方の民族舞踊とされている踊りである。周囲の男たちが拍手をし、踊りに合わせて歌をうたう。

彼らは、目をこらせばそれと気付くほどに透明に近い黄色いドーム状の空間内にいた。上から落ちてくる枯れ葉や塵などが、それに触るとたちまち蒸発したように消える。しゅ、と音を立てる。その小さな音はひつきりなしに続いていたが、楽し気に騒いでいる彼らの耳には入らないようだつた。だが、ある音に、彼等は一斉に立ち上がつた。踊っていた者たちも、腰の銃を抜いた。ある音とは銃声であった。彼等めがけて銃弾が打ち込まれたのだ。枯葉同様に、障壁に触れたそれは小さな音を立て、空気に解けた。

立て続けに銃声が鳴り響く。

地球人がいるぞ！ 一人が叫んだ。障壁の向こう、崩れた壁に隠れて武装した数人の男達の姿を見つけた。彼等はのんびりとキヤンプを張つている憎むべき異星人を狙い、銃を撃ちまくつた。だが一発たりとも障壁を通過する事は出来なかつた。逆に、兵士たちの撃ち返した光の弾丸は障壁を突き抜け、面白いように命中していく。

生き残つた地球人達がみな逃げ去つた後も、彼等は戦闘体勢を解く事なく、障壁を解くや否、ジーン・ウーズイへと乗り込んだ。だが、それは、地球人に追い討ちをかけるためではなかつた。斥候からの通信が敵の接近を知らせたからだ。

乗り終えた彼等が、待機されていた動力のスリープを解除するのと、暗闇の中からそれぞれ六機のゾ・ヴィムとギ・グルーグが現れるのとはほぼ同時だつた。そして、ジーン・ウーズイの巨体が動き

出すのと、敵が攻撃を開始したのも、まつたくの同時だつた。ジーン・ウーズイは、レーザー銃による攻撃を避けながら、ギ・グルーグの群れの中へと身を踊らせていく。空と陸からの攻撃という敵の有利を打ち消すための当然の戦術だ。かくして乱戦が始まる。ギ・グルーグとジーン・ウーズイが刀を振るい合い、その最中、宙のゾ・ヴィムをジーン・ウーズイの銃が狙う。ゾ・ヴィムは飛び交いながらも、巧みに足場をずらしながら戦うジーン・ウーズイを狙撃する機会をうかがう。奇策の立てようのない単なる個人の技術の競い合いとなつた。

ギ・グルーグの一機が、脚を叩き折られ、よろける。その機会を狙い、別の一機が、背後に回り込み、首を落とした。ギ・グルーグの胸部の扉が開き、黒づくめの格好をした男が、ジーン・ウーズイへと跳躍し、手掛けりという手掛けりも無い胸部扉に、その握力で強引にしがみついた。手操作で外からハッチを開けようと、ハッチの脇にある小さなカバーを引き剥がし、小さなレバーを捻つた。空気の抜ける音と同時に、胸部のハッチが開いた。この間、ほんの一、三秒ほどしか過ぎていかない。……結局、彼はジーン・ウーズイの中に入り込み、敵の首をあげる事はできなかつた。操縦席内からの銃撃に、背中にいくつもの穴が穿たれ、最後は頭部を打ち抜かれ、彼は地へと落下した。隊長が叫んだ。

「だから操縦席狙えと云つたろう。格闘にもちこまれたら、一瞬で首もつていかれるぞ」

エクシユールは操縦者が生体ユニットとして加わつて、初めて機能する。彼等と同じ脳波を持つ生物でなければ扱う事は出来ない。だが彼等が今敵としている者達は、死への運命と引き替えに自己の脳波を変えてしまう事がある。ただ死なぬ、一機でも道連れに、と彼等の常套手段となつてている。別のジーン・ウーズイに乗つていた者は、すでにその方法で命を奪われていた。いや、まだ息はあるのかも知れない。だが、隊長はためらわずに、部下と敵のいる操縦席内に銃の照準を合わせ、撃つた。

「あんなのが地球人より優秀だなんて絶対認めないぞ」

エイジは燃え残った建物の中から、異星人同士の戦いを見ていた。
「人は、何かを守るために戦うんだ。……あいつらのは、何かを奪うためのもんですらないじゃないか。ただ狂っているだけだ」
タクはその後ろで、黙つて夜食のパンを口に運んでいた。黙つて
いるのは、単に、兄がこ難しい言葉をひつきりなしに喋っていたからだ。だが、兄がようやく口を開いたため、タクは兄に話し掛けた。

「「」はん、食べないの？」

エイジは振り向いた。

「ああ。……でも、お前にみんなあげるつて云つたじゃないか」「でも、お姉ちゃんがいなくなつちゃつたし……」「いなく……ルキロはきつと……いや……そうだな。ルキロはうまくやつてるだろ？……じゃ、傷みやすい物から、あとで一人で分けて食べよう」

4

空を飛ぶゾ・ヴィムの姿は、暗闇に溶け込んでいた。ただ一つ目
が真つ赤に光っていた。

「何を考へてるの？」

「何がだ」

カイはルキロに一瞥もくれず、スクリーンに映る黒い空を見据え
たまま。

ゾ・ヴィムの操縦席後ろの狭い空間に、ルキロは窮屈そうに体を
押し込んでいた。

「敵を、こんなとこに乗せて」

「お前みたいなのは敵じゃないと云つただろ？それに、大陸北方
はすべて自由に移動する権利を与えられている。敵と遭遇したら戦
えばいいだけだ」

「どこにも変わり者はいるんだね」

「おれは変わり者ではない」

スクリーン脇の副画面に人の顔が映った。かなり太っている男で、鼻も口も赤くて大きい。「カイの友人」と「異端」とを自称する男、トキ・ワ・キーレンである。

「やあ、カイ。ちゃんと、その場所に向かっているんだろうね」「丸く、柔らかそうな二つの瞳でカイを見つめている。

「うるさいな。お前がうるさいから、仕方なく云う事を聞いている」無愛想なカイだが、キーレンを相手にすると、少しばかり様子が変わってくるようだ。

少し前、ルキロはカイの通信機でキーレンと会話をした。キーレンの話術の巧みさに、ルキロは様々な事を聞き出され、喋らざっていた。どうせ隠しても仕方のない事ではあつたが、とにかく「異端者」キーレンはルキロに興味を覚えた。そして、ルキロの行き先に。「カイは黙つて彼女の行きたいところへ連れていってあげればいい。他の大陸に行くわけじゃないし、違反ではないんだから」

カイは鼻をならした。同時に、彼は思う。キーレンの態度はいつもと同じ、相変わらずの変人だ。ただ……やはり、何かが違っている。演技のように思えてならなかつた。気のせいかも知れないが、何かまとわりついている空気が違つているような気がする。

キーレンは、スクリーンの中でいそがしく舌を回し続けている。

「……そうだね、ルキロ。確かに我々の星と、地球とは文明の共通点はかなり多い。例えば、地球に昔あつた自由の女神、あれと同じような物が、我々のところにあるし。……接触があつたのは確實として、どっちからどっちへ、それはいつ……という事だね……」「ウソ偽りのない我々の歴史に、記録されてないわけがあるものか。地球との関係だと……ぐだりん。こんな下等な惑星が……」

カイが言葉を挟む。

「ウソ偽りだらけなんだよ。きっと」

ルキロはけだるそうな表情のまま、横目で黒い空を見ていた。

青い水晶のような半球形レーダーにいくつかの光の点が明滅し始めた。おおよその位置を特定し、さらに範囲を拡大する。点の色は黄色と白。ライスカイスの識別信号を出しているのが黄色。それ以外が白である。カイは進路をずらし、その場へと向かつた。

通信を拾う。隊長が抑揚のない声で作戦指示をしている。カイのすぐ後ろ、狭い空間で窮屈そうに体を縮めているルキロは、その声を聞き、複雑な表情を浮かべていた。まず、単純に、命のやりとりが馬鹿馬鹿しくなつてしまつたという事が理由の一つ。そして、やはり自分はタグザムティアの人間であり、その自分がディオと呼ばれる敵の戦闘兵器に乗つてている事。彼の「少しでもおかしなそぶりをみせたら、キーレンに後で何を云われようと構わない。おまえを殺す」などと云う声に、かえつて安心するほどであった。

上空に到着してみると、すでに全ては終結していた。

今までに目が腐るほど見てきた、小さな町での攻防戦だったようである。

炎上している家屋。エクシユールやティオの残骸らしき物体が見える。人影などは暗くてまったく判然としない。ゾ・ヴィムは地上三百メートルの高さに浮いているのだ。

カイの指が操作盤のスイッチ類に触ると、地上の映像が拡大された。

どれほど激しい戦いだったのだろう。両軍ともにおびただしい数の残骸を出している。

ルキロは信じられぬ光景を目にし、混乱した。男達が地面に立てた柱に縛られ、他の人間達に撃ち殺されていく光景。銃を持つ男達

タグザムティアの……いや、銃が……地球人！ 地球人に仲間が……いや、ライスカイス……交じっている……！

また一人、頭を撃ち抜かれて絶命する者。他の柱の男は、四肢を次々に撃たれ……

楽しんでいる……。笑っている。地球人による、異星人の虐殺……。

。 地球人も、結局。

続いての光景に、また疑問が湧く。女達の姿。まだ燃えている機体から引き出されている。男は、柱に縛りつけるまでもなく即座に殺されてしまうのもいたが、女達はみなにかつがれ、どこかに運ばれていく。これも同じくどちらの星の人間もいる。

「どこに連れていかれるのだろう」

「おまえらには、耐えられないだろうな。地球人の慰み者になるのは」

ルキロの全身の血液が逆流した。殺されるのはいい。仕方がない。だが……

「高度を下げて。おろしてよ。……助けなきゃ。あいつらをやつつ……」

ルキロは身を乗り出し、カイの首を締んばかりの勢いで騒いだ。
「これは戦争だ、馬鹿。しかも、おれたちが勝手に押し掛けた、な
で、でも……でも……」

引きずられているタグザムティアの女の一人が、口から血を流し、
崩れた。地球人達は、残念がり、そしてその肉体を蹴飛ばした。彼女は、自分の舌を噛み切つたのである。

「あなたの仲間だつて、いるんだよ」

また女が一人、数人に担がれて運ばれていく。真っ白な顔に、黒いヌース、そして血の赤。四肢の全てが撃ち抜かれ、動きを封じられていた。

「知っている。……」いっぽは、同じ師団に属してた。シェイルという名だ」

「画面に映つてているその女を指で差し示す。

「それじゃあ……どうして……」

「やつらはどちらも、地球人との戦闘に負けたんだ。わざわざ地球

人を倒しに行つても、時間の無駄だ」

「酷いよ、そんなの。仲間なんだよ！」

「せいぜいその『尊い感情』に浸つていいがいい。……もう行くぞ」
ゾ・ヴィムの駆動音が大きくなる。急加速に、ルキロは後ろに引
つ張られるような気分を感じた。途端に、集音機の風を拾う音が強
まり、ぱりぱりと激しい音をたて始めた。だが、ルキロの耳には全
く入つていないうだ。小さく口を開いて、何かを呟いている。力
イは音よりそちらのほうがよほど鬱陶しく、集音機をあえてそのま
まの状態にしておいた。

点のように小さく見えると、どんな悲劇でも滑稽に思えてくる。
だが当然、その犠牲者達には関係のない理屈であり、悲劇は現実と
して次々と起きていった。死にきれなかつた女たちも数多い。特に
タグザムティアと地球の人間同士は酷似した遺伝子構造になつてい
るのか……やがて憎むべき地球人の父を持つ私生児が生まれ、タグ
ザムティアで、そしてこの地球で、後の歴史に大きく関わっていく
事になるのだが、それはまた別の話である。

2

「これは、渡れないよなあ。話に聞いた通りだつた」

旅立つ時、汚染地帯とただ言葉に聞いていただけのエイジは、と
ころどころに腐臭を放つ沼地のある湿地帯を想像していた。だが、
目の前に広がっていたのは、砂の海だった。

「兄ちゃん、黄色の風つて、こんなのが運ばれてくるのかも知れな
いね」

「うん。……单なる荒地を想像してたけど、ここまで完全な砂漠地
帯とは思わなかつた。町で云われた通りだ。……なら、強引に進ん
でも放射能でやられるだけだ。どうしよ」

「……あつちでまたやつているよ、兄ちゃん」

タクが、自分達のやつて来た南東の方向を指さした。

ゾ・ヴィムとアロ・イーグの空中戦。もう、これまでに何度見た事だろう。以前ならば、タクは興奮しながらその戦いを見ていた。エイジはそれをたしなめながらも、自身タクと半ば同じような気持ちを覚えていた。それはあくまで自分に被害が及ばなかつたからだが、もう見飽きてしまつたし、それに、人々の死をあまりに多く見過ぎた。嫌悪と侮蔑の感情こそあれ、エイジの心象をよくするような要素はこの戦闘にはもう何もない。

一百メートルほど離れた場所で、どうやら、三対四の戦いを繰り広げているようだ。ゾ・ヴィムが三機、アロ・イーグが四機。姿勢制御と推進補助のための炎を四肢から爬虫類の舌のようにちらちらと出しながら、下降、上昇、旋回、そして旋回、集結、目で追い切れぬ素早い動きを繰り返す。幻想的ですらあつたが、エイジには、彼らは何を考えて戦つているのだろう、という疑問しか湧かなかつた。

幻想的な光景と戦力の均衡が崩されたのは、一瞬にして一機のアロ・イーグの頭部が爆発した瞬間だつた。当初、タグザムティア側が数の上では優勢に見えたが、操縦の技量においてはわずかに及ばなかつたようである。ゾ・ヴィムが三機、アロ・イーグが一機、数の上でもアロ・イーグが劣勢である。だが、逃げようとする様子は全く見られなかつた。

タクは叫び、北西を指さした。黄色い海の彼方から、もうもうと吹き上がる砂塵。嵐ではなかつた。何かが低い高度を高速で飛行しているのだ。どれくらいの速度だつたのだろう。雷のように速い事は確かである。タクが声をあげてから、数秒もたたぬうちに、その物体はみると大きさを増し、はつきりと視認できるよつになつた。

「エクシユールか……それともディオ」

エイジは、その謎の飛行物体に目を奪われた。それは、先ほどからの戦いの場へと一直線に向かつている。まだ距離はある。一機が、アロ・イーグが首をそちらに向けた。何かをとらえたアロ・イーグ

がメインカメラで確認しようとしたのだろう。だがその瞬間、アロ・イーグのその首が消滅していた。何か光線のようなものか……

ずっと目で追っていたはずのエイジは、いきなりそれを見失ってしまった。タクが先に気付き、指の示すほうに視線を向けた。その機体はすでに、黄色の海を渡り終え、じやれ合っていたアロ・イーグ、ゾ・ヴィムらの後方へと回り込んでいた。そしてその右手には、アロ・イーグの頭部が……五指がすべてアロ・イーグの頭部に埋まっていた。腕を振るい、それを投げ捨てる。その機体の大きさは、エクシユールやディオと変わらなかつた。赤錆に包まれたような色の装甲で、頭部、人間でいう目にあたる位置には横長の黒い空間があり、緑色の光が右に左にと素早く移動していた。

動き出した。背中から恐ろしく大きな炎が吹き出た。ほとんど白に近い、微量な青を含んだ炎の噴出。背中側から見れば機体のほとんどが隠れてしまつほど。そしてそれは、ゾ・ヴィムやアロ・イー

グの操縦者達にとって、巨大な白い悪魔の姿だつたのである。

実際に戦っているのは赤銅色の機体なのだが、エイジ達にもそれは巨大な白い悪魔に見えた。悪魔が手伸ばし、アロ・イーグやゾ・ヴィムを包み込んでいく。その都度、獲物は爆発し、命が確実に散つていく。

何やら靄に包まれたように全く事態を認識出来ずにはいるうちに、すでにエイジたちの視界には、その悪魔しか存在していなかつた。巨大な亡靈は姿を消し、もとの大きさに……赤銅色の機体へと戻つていた。

エイジのすぐ近くで、重い金属音がした。ギ・グルーグがライフル銃を構え、立つていた。ゾ・ヴィムを倒したいわば敵であるその機体に向けて、放つた。光線が赤銅色の装甲を貫いた。いや、その寸前で、光線は拡散、消滅していた。

赤銅色の機体は、背中の大砲を、上を通り正面へと回転させた。撃つた。無気味な光の塊が滲み出すように吹き出てきた。それは光線としてはあまりにも巨大で、そしてあまりにもゆっくりとしている

た。燃え尽きずに落下してくる桁外れに大きな隕石のように……
ギ・グルーヴを狙つたその巨大な光は、エイジたちをも包み込もうとしていた。

何も見えない。音も何もなく、皮膚の感覚すらもない。真っ白な光の空間の中に入り込んだ。時間はまるで静止したのかと錯覚するほどにゆっくりと過ぎていった。

3

それは地球側からの、ささやかな接待のはずだった。国防省センタービル跡地に立てられた催事館に、両軍の主立つた地位の者たちが賓客として迎えられた。

宴もたけなわに近づいた頃、その部屋の中に、武装をした男たちが入り込んできた。異星人の未知なる部分、そして既知の部分、どちらも驚愕に値する事を理解している彼らはの装備は、何かのまじないででもあるかのように重たい物だった。防弾服を一枚重ねて着込んだ上にレーザー反射鏡をくまなく張り付けている。手には、確実な威力を相手に与えるために鉛の実弾を発射する短機関銃。

政府の首脳陣を人質にとつたわけではない。それは、彼らそれぞれの星にいるのだから。だがこの行動が無意味である事もなからう。これを切り札に、有利な交渉をしていくのだ。

彼等への返答は、思いのほか早かつた。それは、両軍からの集中砲火であった。建物の存在した場所一帯は全て一瞬にして氣化し、巨大なクレーターをあとに残した。

両軍とも、ほとんどが替え玉であつたし、結局、地球の行動は、地面に大きな蟻地獄を作つただけだつた。「彼等の怒りをかつてしまつた」そう恐れた地球人達には、その蟻地獄が自分たちの運命、未来を飲み込んでいく地獄への門のように思えた事だらう。

以上、冗談にもならない出来事ではあるが、事実として起きた以上は記したまでである。

地上数百メートルの高度に、一機のゾ・ヴィムが浮遊していた。薄暗い操縦席の中、ルキロはついに画面にその光景を見る。そして、気を引き締めた。

広大な黄色い砂の湖が見える。雲から漏れる陽光を反射し、砂粒一つ一つが輝いていた。

カイは映像を、キーレンへと送った。その返事を待っていた。副画面に、一行の文字が表示された。ルキロには読めなかつたが、ゾ・ヴィムの駆動音の変化からその内容は読みとれた。ゾ・ヴィムは飛行を再開した。

「さつきの残骸、なんか気になるな」

また、ルキロは呟く。

「どこでもやつていい事だ」

汚染地帯との境目で、ゾ・ヴィムとアロ・イーグの残骸を見た。密集して六、七機。少し離れた場所に、一機。映像を拡大してみた。操縦者はみな生きてはいまい。ただ、あれが、普通の戦闘でやられたものなのだろうか。離れた一機は、正面が完全に溶けてなくなつており、残つた背中側の装甲などからかろうじてゾ・ヴィムと判別できた。

近くにあつた車のタイヤ跡らしきものが、風に吹かれて少しづつ削られていた。

レーダーはなんの反応もみせなかつた。だが、視界にははつきりと映つっていた。ゾ・ヴィムのカメラは確実に捉えていた。そして、二人はそれを見た。遙か低空、地面すれすれの高さを、何かが接近して来る。砂が高く舞い上り、煙のようにくもるが、すぐに砂自体の重みでそれは降りてゆく。それは、空気抵抗のない宇宙空間をでも進むかのような……彼等の常識からも考えられない速度で、近づいて来る。

「何、あれは？」

ルキロの心臓の鼓動が早まる。

砂煙の中を猛烈な速度で進む「それ」が、高度を変化させた。浮き上がったのである。

一時は死すら恐れぬルキロだったが、それと襲い来る驚愕や、「未知」が本能の中から呼び起こす恐怖などの感情は、また別の次元のものだった。

暗い。……スクリーンを、ぼやけた人のような影がふさいでいた。今まで、遙か下方にいた「それ」は、一瞬にして、ゾ・ヴィムに肉迫する距離にまで迫っていたのである。

カイは操縦レバーを思い切り引いた。ゾ・ヴィムの急上昇により、画面は下へと流れる。重たい物を載せられたような衝撃を頭に感じながらも、ルキロは画面から目を離さない。赤い空と一緒に、見た事のない赤銅色の機体が画面下へと消える。

カイはゾ・ヴィムの飛行能力を全開にした。ルキロには、その考えが分かつた。「逃げる」だ。機体性能差を考えれば、そうする事は当然だ。

無惨に溶けていたゾ・ヴィム。おそらくこの謎の機体が……。彼女は唾を飲み込んだ。

最大出力。続いて画面分割率を変化させ、全方位を均等に確認できる状態にする。

「まだ、さつきのところにいるよ。攻撃して来たわけじゃないのかな」

「いや……来るぞ」

普段眠っている機能を呼び起こす事で、ゾ・ヴィムもかなりの速度を出す事が可能だ。少なくとも最大速度はアロ・イーグを上回る。その速度により、さきほどの赤銅色の機体はものの十秒もせぬうちに豆粒ほどの大きさになつた。だが、その数分の一、一瞬にも等しい時間で、豆粒はもとの巨大な姿を取り戻していた。……いや、もとの大きさではなく、そして赤銅色の姿でもない。もつと超大な、

白い悪魔へと変貌を遂げていた。

「な……あれは」

「ただの巨大な炎だ。冷静に見ろ」

巨人の中央には、さきほどからの機体の姿があつた。そしてそれは、ついに攻撃をしてきた。接近をし、手を伸ばし、掴みかかつてくるという単純なものではあつたが、その接近する速度が半端ではない。カイが紙一重でそれを避ける事が出来たのは、ゾ・ヴィムの機体性能の良さもあつたが、それ以上にカイの操縦技術、反射神経によるものが大きかつた。悪魔の機体は速度をゆるめず、ゾ・ヴィムを追いこし、振り返った。

見覚えがある……何か、見覚えがある。

生と死の狭間での攻防中、ルキロの頭の中を何か判然しないものがよぎつた。だが、横殴りの一撃が瞬時に彼女の意識を現実世界に引き戻す。ルキロに衝撃を与え、頭部を強打させたそのまま犯人は単純な慣性の法則だつたが、間接的には謎の機体の攻撃を避けるために行つた彼の無茶な操縦のせいだ。おかげで命が助かつたのだから、文句は云えない。赤銅色の機体は、再び、遙か後方へ……。……向き直つた。動きが静止している。いや……姿はもう小さくなつてほとんど見えなかつたが、何かが動いていた。

「防御幕を！」

少女の叫びと青年の動きは同時だつた。ゾ・ヴィムの全身を黄色い光の粒子が覆う。同時に、機体を急降下させた。ルキロはもうシートにしつかりとしがみついていたので、浮き上がる事はなかつた。本来は人の乗る空間ではないので、ベルトなどはない。

恐ろしく大きな、うねるような光の束であつた。しかも通常の光状兵器と違い、伸びるその様を視認する事が出来た。よほど密度の濃い、半ば物質化した光なのだろう。あまりの高密度のため、それを作り出す様々な物質の絶対量も少量の空間の中に凝縮されて存在する事になり、それが光の物質化と呼ばれる現象を作る。

その光の束が上方を通過していく。避けたのだ。だが……防御幕

が張つてあるし、その余波は全体から見ればほんの微弱なものであるはずなのに……防御幕はたやすく破られそうになつた。カイは計器の動きからそれを一瞬で判断すると、機体を高速飛行用、地に対して完全に水平にし、防御幕を張るエネルギーのほとんどを背中側に集中させた。手が動くのがほんの少し遅かつたならば、機体が溶けてなくなつていたかも知れない。

それでも機体にかなりの無理がかかつてゐるらしく、噛み合わせの悪くなつた歯車のような、軋むような、耳障りな金属音がしてい。自分達の今いるこの狭い密室。このまま、自分たちが消滅してしまうのではないか。そんな恐怖がルキロを襲つた。……恐怖？ 自分は恐怖を感じてゐるのか……

「これからは何も喋るな」

カイのその台詞と同時に、ゾ・ヴィムがさらに加速をした。機体の揺れが激しくなる。戦うつもりなど最初からなかつたが、いざと。いつ時の事を考えて、戦闘力を残していた。エネルギーが機体を流れる配分を変化させ、全てを速度へと回した。通常まず見られない激しい炎がゾ・ヴィムの背中から噴き出た。機体はより激しく振動した。重力制御装置で風船のように浮く事ができるとはい、高速で飛行すれば空気とぶつかるといつ点は、地球古来の飛行機械と何も変わらない。全ての能力をただ前方への推進へと使って飛ぶが、追尾して来る物体を振り切るのにはまったく約に立たなかつた。

赤銅色の機体は、再び白い巨人の姿をとり、襲いかかってきた。

……完全な、戦闘姿勢……地に垂直になり、空気の抵抗を全身に受ける強引な飛びかたで。右に、左に動き、隙をうかがい、拳を伸ばしていく。

敵との正確な距離、今一瞬の相対速度、機械が次々と記憶し、吐き出している敵の行動予測。計器は常に激しく変動し、動き、光り、音を出し、カイにそれを伝える。だがカイはそれに目をやる事はない。音、そして画面に映る何気ない光から、それらを漠然と読みとる。視線は画面だけに集中してゐる。

細かな振動と大きな揺れとが延々と続く。お話に出てくる巨人に、箱につけられたまま、振り回されている気分。鍛えてきたはずなのに、ルキロは吐き気をもよおしてきた。Gを軽減させる機能は働いているのだろうが、あまり役には立っていないのだろうか。いや、それがなかつたら、どうなつていた事か。

矢継ぎ早の攻撃。カイは素早く手を動かし、足を動かし、それに対処していく。訓練、才能、そして動物的な勘が、本来ならば数パーセントしか無事でいられる可能性のないこの逃亡劇を、ここまでもたせている。

これが、彼らの能力なのか。それとも彼だけが特別なのか。ルキロは、あらためて、敵であつたはずのこの異星人の能力を見直していた。感情のない機械、どれをとってもまったく同じ人形程度に思い、馬鹿にしてすらいたのだが、彼等は自分たちと同じ「個」というものをきちんと持つていた。少なくとも戦闘能力には個人間にかなりの差があるようだ。キーレンという男も、今までのライスカイスへの認識を頭から覆すような性格だった。冷たい機械なわけではない。表現する方法が違うだけなのだ。

画面には、恐るべき敵の姿が、めまぐるしくその大きさを変化させている。その都度に、死の川へと流されているかも知れないこの小さな密室が激しく揺れる。

一瞬、顔が大きく映つた。また、離れる。からみあうように、両機は飛ぶ。

残酷なまでの酷使に、全ての機器、計器が悲鳴を上げていた。飛んでいる、ただそれだけの事に、機体の耐久力が急カーブを描いて落ちてきている。何もかもがレッドゾーンを示していた。いつ、ゾ・ヴィムが空中分解を起こしてもおかしくはない。

そうか……。脳を、鼓膜を揺さぶられながら、ルキロは心に呟いた。どこかで見た事があるわけだ。こんなところにあるはずがないから、全く考えもつかなかつた。だけど、実際、ここにこれはある。これが何を意味するのか……

「ウーズイのプロトタイプ、レイ・ウーズ」
口に出し、確認した。

「グルーヴ、プロトタイプ、ゲオ・ゼオル」

同時にゾ・ヴィムを操縦している青年も咳いていた。ぱりぱりと、鼓膜を振るわす耳障りな音がする中、彼らは互いの言葉を聞き逃しはしなかつた。

「あとで訊く」

「あとがあつたらね」

素早く云い、すぐに口を閉ざす。それにしても、グルーヴのプロトタイプとはどう云う事なのだろうか。見間違い？ 似ているだけ？ ジーン・ウーズイのプロトタイプと云う事は分かる。確實だ。実物を見た事はないが、資料に目を通した事はある。もう四五百年以上も昔の機体のはずだ。一般的にプロトタイプウーズイとして資料公開されているが、正確にはエクシユールのプロトタイプである。飛行能力、破壊力、機動性を持つ個人用究極破壊兵器を目指して開発された。様々な地での汎用性を考慮し、人型が採用された。

タグザムティアでは、星の歴史は政府と一部の学者たちだけの独占物になつており、公にされる事はない。だが、技術史に関しては別である。政治を知つて何かを学ぶ必要はない。政府の出す優秀なテキストを学び、政府の望む精神を作り上げていけばいい。反して、技術は過去の積み重ねである。それを職とする者は知るべきである。攻撃は執拗だつた。乗り手の事を何も考へていない。あの無茶な動きで、なぜ中の者は生きていられる？ 誰が乗つている？ 地球人か？ 同じ疑問が一人の脳裏をよぎる。その思いが強くなるほど、ある一つの疑問への気持ちが高まる。この先には、何がある？

あいつは、戦いのセンスが皆無だ。カイは吐き捨てるように心の中で云つた。いつたん気付けば、もう攻撃を見切る事はたやすかつた。計器の伝える反応が、同じようなリズムを繰り返している事に

気付いたのだ。だが……

ゾ・ヴィムの機体が大きく回転し、一人の身体を今までにない衝撃が襲う。カイは何とかバランスをとろうと努力した。ゾ・ヴィムの右腕が、肩から引っこ抜かれたかのようにもげ落ちたのである。空気の抵抗に耐えきれなかつたのだ。続いて左腕も同様の運命を辿つた。どのみち残る腕も切り離していただろうから、それはかえつて都合がよかつた。

結合部から火花を散らしながら、少しだけ速度を増したゾ・ヴィムは飛ぶ。

追つてくる……白い悪魔が……両手を広げて……もの凄い速さで。

追つてくる。

そしてルキロ達の目に……

あらわれた。それは、空気から湧いて出現したかのように突然だつた。

都市であった。無数のビルのいくつかは、ルキロが今までに見てきたどこの星のどこの建物よりも高い。五六百メートルはあるだろうか。ビルの間を、同じく無数の、様々な太さの管が通っているのが確認できた。

近づいていく。その都市は、ドーム状の薄黄色い靄のようなものに覆われていた。防御幕？ だが、都市を覆い包めるほどの防御幕など、二人とも聞いた事がない。なにかを攪乱するための空間が、ここに生成されているのか。レーダーに反応がなく、肉眼でも、突然に飛び込んできたように見えたのは、そのためか。

この速度で、このゾ・ヴィムの防御幕で、通り抜け、中に入る事が出来るだろうか。

自らの進む方向、光の壁が……ドーム状を形作るその物質の一部が、開いた。ゾ・ヴィムが樂々と通れるほどの空間が生まれた。

追跡者は、白い悪魔である事をやめ、その炎はみるみる縮む。魔法が撃ち破られたかのように。炎の噴出がとまる事で、赤銅色の機体の動きもゆるやかになる。

カイも速度を落とした。「のままでは、あつという間に都市を通過してしまう。そして、ゾ・ヴィムは開いた穴をくぐり抜けた。」「何か」の存在するこの都市に、ルキロたちはついに到着したのだ。

分割された画面は後方をはっきりと映し出す。追跡者も、その穴を通過していた。都市に入ってきた。

ゾ・ヴィムは静止した。

静かになつた。今まで酷使される機械の唸りが絶えず耳に轟いていたのだ。

画面に映る都市も、レイ・ウーズも静かであつた。

「攻撃、してこないよ」

「都市がおれたちを迎えようとしたんだ。だから、あいつも攻撃をやめた」

ゾ・ヴィムの高度がゆっくりと下がり始める。

「もう少し調べてからのほうが」

「おれは何もしていない」

ゾ・ヴィムは、何かに引っ張られていた。

6

光などまあ確かに必要ないのだが、だからといって、一人でいるといちいち消してしまうのは何故だろう。習性が残っているのか。

「どこ」。

「脳」にか。

「まらない冗談だ。

この脳なしみ。

音がなる。

画面を見る。

太った男のシルエット。

「あつたよ」

とだけ云つた。

「そう」

同じく短く返す。高く、幼い声だった。

「場所は、ここだ」

大陸北の地図が映る。北西のある一点が赤く光る。
「わかった。こちらも、半数ほど回収し、残りは、戦わせておこう。
そちらのほうにも、動くようと指示を出しておくから」
その後、どちらも何も云わず、映像はいきなり消える。部屋は再び真っ暗になる。

この脳なしめ

プー

「元帥代理、ここにいましたか」

金属が硬い地面と触れあう音。それにもなうかすかな衝撃。箱に詰められ深海の底に辿り着いた、そんな異様な緊張感。一人を包んだ小さな空間は、いきなり真っ暗になつた。スクリーンの映像が消え、続いて計器の灯りが全て消えた。

ゾ・ヴィムは機能の全てを停止した。操縦席内の人工重力場がすべて消失し、小物がばらばらとカイに落ちてくる。それはさらに転げ、ルキロに当たつた。

すっかり消失していた自分の体重の感覚が蘇つてきた。

「どうする」

ルキロが訪ねる。

「お前はどうしたいんだ」

失念していた。ルキロ自身の冒険だったのだ。自分は何をしたかったのか？ ここにある、自分たちの歴史に関係した「すべて」を「知る」ただそれだけだ。ならば、今とるべき行動は一つしかない。ここから出る事だ。

「出るから開けて」

云い終わると同時に、なにやら物音が真っ暗闇の中でし始めた。金属のレバーを捻る音。錆び付いた金属の立てる、耳障りな嫌な音だ。動力が切れたため、手動で開閉の操作をしているのだろう。ルキロにも馴染みのある音ではあつたが、滅多に聞く事はない。

カイは足下にある左右のレバーを手を伸ばして捻り、ロツクを外した。外扉と内扉の間にあ、機密性を高めるための、何枚かの薄い金属扉が左右に開いていく音。この原始的、直接物質的な装置と、光学的な要素との組み合わせにより、操縦者の安全を守るのである。瞬間に空気の抜けていく音。そして、外の光が隙間から入り込む。そう何分も闇に包まれていたわけではないのに、ルキロにはそ

れがとても眩しかった。

カイは、上体を起こし、足を引き抜き、背もたれの部分にしゃがむ姿勢を取った。ルキロも懸命に体勢を整えようとしているが、なにぶん狭くて思うように動けない。

緊急時に、未知の場所で、未知の人間に囮まれた場合、咄嗟に動く人間の反応は二種類に大別できるだろう。その囮んでいる人間にちに攻撃をしかけ、叩きのめし、身の安全をとりあえず確保した上で、未知なる部分を解明すべく行動する。もう一つは、単純に両手を上げてしまう、という行動だ。「昔は、自分の事を好戦的だなんて思っていたけど、今考えると後者のほうだったんだな」ルキロは後にそう思った。だが、彼は前者の方に属する人間だった。ゾ・ヴィムにのぼつてくる足音。そこから、その重み、性別、性格などに思いをめぐらせるのと、扉をはねのけるように開き、跳躍するのとは同時だった。

馬鹿……。ルキロは罵る。迎え入れてくれたのだ。自分で、そう云つたじやないか。

そして、科学力も未知数なのだ。もしかしたら、地球人ですらないかも知れないのだ。

そんな相手の地で、戦いを挑んで何の益があるものか。だが不思議と物音は何も聞こえなかつた。

ルキロも懸命に手がかりを探し、身を起こし、はいのぼる。開いている外扉の小さな取っ手を掴み、身を引き上げ、外に頭を出した、その瞬間。……落下する感覚？ いや、浮遊感？ 体が何かに引き上げられるように……実際、浮いていく。ルキロの体が持ち上がりしていく。外に出た。さらに宙に上がっていく。カイの体も宙に浮いていた。そして……

男たち……。地球人？ 見た目は自分らと変わらない。おそらく地球人なのだろうが

変な物を着ている。そうだ、資料にあった。東洋の「僧」の格好。黄色い布きれを体に巻き付けている。頭髪は剃り上げてある。

「一、二……五人。ほとんど同じ背格好をした中肉中背の五人の男。ルキロは首をまわし、今いる場所を確認する。広い道路が交わっている地点。そこにゾ・ヴィムは落ちたのだ。さきほどに見た、一番高いビルの多い地点。その辺りだ。落下前に、画面に映つていた場所と変わりはない。あの後に、ゾ・ヴィムの位置を怪しげな技術で動かしてはいないという事だ。今いる位置の確認は、ここから逃走する時に役に立つ。

五人全員の体が宙に浮き、二人と三人、右と左とに別れた。ルキロは、一緒に重力の繩に捕縛された道連れを見る。彼なら、発砲しかねない。それをしないのは何故……納得した。彼の頭上、銃が浮いていた。それは、ゆっくりと、ゆっくりと高度を増していく。そして、銃は小さくなり、見えなくなつた。

二つに別れたその中央、遙か向こうから、一人の、やはり黄色い布を体にまといている姿が近づいてきた。宙に浮いている。さらに近づいてくる。老人であつた。ルキロたちのすぐそばまで来て、静止した。ルキロと老人はしばらくみつめあつた。視線をそらしたのは老人のほうだつた。正確には、続いて男のほう、カイに視線をやつた、というだけだが。

老人は口を開く。拍子抜けするほどにカン高い声だつた。

「いつかやつてくるとは思つてはいたが、まさか、一緒に来ようとはなあ」

「わたし達を知つてているのですか」

「知らんよ……おまえさんたち個人はな

「どういう事だ」

カイが問う。

「さて」と老人はとぼけてみせる。

「わたしは敵じゃありません。……ただ、すべてを知りたくて來たのです」

「それはいい。知りに來た、か。それはいい」

ルキロの台詞に老人は笑つた。いつまでも笑つていた。

ソシテスベテガアツマリ。ソシテスベテハウゴキダス。

ナンノタメニ。ソレハ、

「元帥。元帥代理」

「足音。声。闇が光へと変わる音。扉の開く音。

踵を合わせる音。空気が揺れる音。

3

薄暗い部屋だった。だが、それ以上に薄暗く、しかも蒸し暑いゾ・ヴィムの中にずっといたのである。それにくらべれば、とても不快とは云えなかつた。

「その地で、自分の身に何が起きるのか」。そんな事は思つてもみなかつた。

ルキロは一人きりだ。一人は引き離され、それぞれ独房と思われる部屋に入れられた。

地球の建築物に付き物の、穴に透明板を取り付けたような窓は、どこにもない。牢獄だからではないようだ。彼らの居住空間は、どうやらすべて地下にあるらしい。防御幕のドームだけでなく、地面と地下との狭間には厚さ数メートルにも及ぶ特殊な金属が張られている。ここは、ほぼ完璧なシェルターと化していた。地球が天変地異で滅ぶとしても、一番最後に滅ぶのはここだろう、と長老と呼ばれていたあの老人が云つていた。

もちろん尋問はされた。だが、拷問はされなかつた。おおまかには、ルキロたちがどういう存在なのかわかっているようであり、さほど興味もなかつたらしい。ルキロは逆に質問を交えもした。だが、ルキロたち個人をとつてみると、謎の侵入者であるわけで、いくらルキロがその潜入の目的を話しても、簡単に教えては貰えなかつた。「なら、どうしてわたし達が入つて来るのを拒まなかつたのですか」ルキロの質問も、長老には笑いの対象でしかなかつた。実際、笑つ

てばかりいる老人だつた。

まるでからかわれているかのよう。

ただ、一つ、どうにも気になる台詞があつた。

「来るのは分かっていた。だが、おまえさん達かは知らないし、何かを教えるべきかどうかはまた別問題なんだよ。まあ、教えたものかどうかは彼らが考えるだろ」

「何ですか、彼らとは」

「彼ら、さ。あわせるかどうかは、今から考える」

その後、一人の女に案内され、ルキロたちは体の自由は相変わらず奪われたまま、宙を飛び、地下都市の中を案内された。そして、そのまま独房へと入れられた。犯罪者として捕らえたというわけでもないのなら、独房に閉じ込める必要もないのだろうが、別にルキロにはまったく文句はなかつた。他の、一般の部屋も、粗末さではそれほどかわらなかつたのだ。娯楽設備がまったく無いどころか、生活に必要なものも原始的な物ばかりだつた。逃げられては困る人物を安全に移動させるためだけに、反重力装置を使用したらしく。ルキロは隅にしゃがみ、両膝に顎をのせ、思考していた。

ここに来ではみたものの、疑問はますます膨らんだ。何故、レイ・ウーズがここにあるのか。彼らは何者なのだろう。

都市の広さに比べて、実際にここにいる人間は少ないようだ。ほとんどの姿をみかけなかつた。彼らはここに仕方なくいる。よそから来て、何かのためにいる。ここにある何かを守るために、最低限の人数で。いろいろな考えがひらめくが、ただの空想で、確たるもののはやはり教えてもらわねば分かりそうもない。

彼にあつてみると、教えたものかどうかは彼らが考える

彼らとは特殊な階級の人間なのだろうか。それとも、ある具象的な何かをさして……

足音が響いてきた。静かに歩いているつもりなのだろうが、よく響いた。

足音が止まる。1Jの部屋の前だ。誰か立っている。

「おい」

知っている声。ルキロは慌てて立ち上がり、扉に近づく。扉が開く。カイの姿がそこにあった。カイは仁王立ち。扉や壁に手を触れた様子もない。何秒もの遅れで開くはずもないし、扉は何に反応して開いたのだろう。独房なのに、内側からだけ反応すると云うのも変な話だ。ルキロの疑問は、もちろんカイにもわかる。

「自分で見る。そういう事だろう。……彼に会つてみる、と

「彼に……」

通路へ出る。暗い。壁や床がぼんやりと発光している。唯一の光源だ。足下を見る。自分の足が真っ黒な影として見えるだけで、足の細かい様子までは全く分からない。

ルキロの体だけに再びあの奇妙な浮遊感が訪れた。ルキロは宙に浮き、進み始めた。

カイは別段表情も変えず、少女の後を追い、歩き出す。

4

さて。

来るぞ。

どんな者か。

もう知つてある。

ドットで捉えたデータではないぞ。

我らの内に入れてみた感覺よ。

長年の間に、何がどうなつたか。

我々の歴史の終結を果たしてつけてくれるのか。

うむ。

だがな。

だがなんだ。

ちょっと待て。

あれが近づいて来る。

確かにあれの反応が感じられる。

一機、いや一機。だが、なぜあちらにも。

わしさ、どちらかと云つて、こちらのほうが楽しみだったわ。

さて。

来るぞ……

来る……

く……

5

壁はあいかわらずほのかに光つてはいるが、弱く、暗闇と変わらない。自分だけふわふわと宙に浮いているなんて、どうもみつともない気がするが、後ろの足音の主の顔をつかがい知る事もできないほど、それは暗さだった。

「どこへ連れて行くんだろ?」

囁くような、ほとんど呼氣とかわらないほどの声の大きさで、ルキロは思いを口にする。

明かりが見えてきた。そして、ひらけた場所へ出た。牢獄が終わったのだ。出口の左右に、男が一人ずつ立っていた。十字路。だが今までとはうつてかわって、明るくかった。照明も完全に動作していたし、壁の色も明るい感じだ。何か別の建物に、あとから、いま通ってきた通路をくり抜いて作ったように思える。地下都市は、地上にあつたいろいろな建物の地階を利用していいるのだろうか。そもそも、いつ出来たのだろう。

「あの、ドアが勝手に……」

男はまだこちらを見てもいないと云つのに、ルキロは云いわけがましい事を先に口にする。だが、相変わらず、男達は前方を見据えたままだ。

「云つただろう。出ていいから、扉は開いたんだ」

ルキロは左へと曲がった。あいかわらず宙に浮いたままだ。

どこの惑星だつたか……アロ・イーグでどの雲よりも遙かに高いところでの空中戦を思い出した。自分がリーアック隊のレクズの命を結果的に奪う事になってしまった戦いだ。

相手の兵器は地球の「カニ」に似た形状だった。エクシユールより一回り大きい。

宇宙と呼んでも過言ではない高度。ルキロがエイジに聞いていた昔の地球のような、青い空、そして黒い宇宙空間が紫の細い線をさかいにくつきりと別れている。やられていく敵や味方が、もの凄い速さで地上に引っ張られる始める。かなり重力の強力な星であり、落下を始めた瞬間、もうそれは真っ赤になっている。

!

ルキロは声にならない悲鳴をあげた。いきなり体が上昇し、天井に頭を強打したのだ。

「何をしている」

「いや、ちょっと……」

ルキロは疑問に思つた。誰のつまらぬ悪戯だ、と考えたのだが、こここの主が果たしてそのような事をするものか。まさか……。自分は何を考えていた。そう。あの戦い。

反重力装置の故障だ。宇宙戦闘用エクシユール、リュー・ヴェルグは、操縦席のすぐ真下にその反重力装置がある。被弾し破損した場合、まず爆発し、操縦者も死ぬ。その装置が故障した。さっきの体当たりで……。そして、重力に引き込まれ始めた。

「あ、熱いよ……助けて」

まだ幼さからやつと脱したばかりという姿のルキロは、ことさらに背伸びしていたが、時が戻ったかのように……母親に助けを求める幼い娘のように、顔を歪めて泣き叫んだ。

誰かの機体が背中から抱き着いてきた。誰? ツーの叫びが、それに答えてくれた。

「おい、馬鹿。何やつてんだ、レクズ」

レクズ。背の小さな、嫌な中年男。子供子供と自分を小馬鹿にしていた男。何故？

温度が下がっていく。速度が落ちていく。

助けてくれた……レクズが……

レクズのリュー・ヴェルグが爆発した。背中を撃たれたのだ。遙か上方から。からみあい、落ちてゆくこの一機は、格好の餌食だったのだ。

爆発の振動に、ルキロは体を震わせた。続いて心ががたがたと震え始めた。

まだ、レクズ機の機能は活動していた。一機は、ゆっくりと落下していった。

戦闘終了後、ルキロは雲のすぐ上で回収された。

タゲンも、ウェルも、誰も何も云わなかつた。云えるわけがない。故障だつたのだ。そして、ルキロの運命を救つたのは、レクズの命令を無視した行動だつたのだ。ノウヤンの視線がルキロの心を貫いた。ノウヤンは口を閉ざしている。「あんたは、あたしの足ばかりじゃなく、レクズの命まで奪つたんだよ」……そう、ルキロは彼女にそう云つて欲しかつたのだ。責めて欲しかつたのだ。ただ黙つているなんて……辛すぎる。

一瞬の回想だつた。あの時ほど、重力が恐ろしいと思つた事はない。戦友たちはみな、重力への感覚が麻痺している。そう、自分の感覚は地球人に近い。

空へ……。もつと高く……

強く念じたあの気持ちを無意識に思い出していたのかも知れない。ためしに念じて見た。もつと高く上がれ、と。すると、天井が近くなつた。

「降りろ」

重力の繩がたちまちにしてルキロの体をがんじがらめにした。ル

キロは床に落ち、うまく着地できず、よろけた。

「この装置は、わたしの心に感應している」

カイは、興味なさそうに歩き続ける。相手が自分の知らない科学力を持つている事はもう分かっているのだ。

つまり……ルキロはさらに考える。ただまっすぐ進むだけならともかく、分岐点で自分は左に曲がった。あの扉を開けた時同様に誰かの意思が働いたためなのか、それともなれば……自分はどう進むべきかを知っていた。自分は、ここを知っている。

知っているよ。おまえさんたち個人は知らないよ……

長老の言葉。

遺伝子の記憶……。遺伝子には脳など記憶にならないくらいの個人の記憶が詰まっている。当然である。親の、親の、とすべての記憶が……脳すらも完全に忘却しきった記憶が完全な配列で記録されているのだから。

そう唱えた学者が、ルキロの星にはいた。

その記憶が、時折脳に送り返され、時折肉体に流れる。遺伝子は個人の記憶を学習する。配合により生まれた者は、一人分の遺伝子記憶を持つ。その遺伝子の学習が肉体に影響し、起こる現象の一つが「進化」である。

読み物としては面白い。ただ、感銘を受け、研究しようにも、人類の起源などの歴史はほとんどが政府管理のもので、学習する事ができないのだ。個人で研究する人間から直接話しを聞いた事があるが、どうしても自分らの星では、何の先祖となる生物の化石も発見する事ができない。地球では、「猿」という生物に似たものが進化して現在の人間になつたらしい。自分達は何なのだ。今この姿のまま、あの星の空氣中にいきなりわいて出たのだろうか。自分達は、どれだけの事を秘密にされているのだろう。

目の前の、斜めになつた一枚の扉が、それぞれ右上に左下に音もなくスライドする。

一人は進む。ルキロはあれからはずつと床の上を歩いていた。自分の体が宙に浮くのはどうも気持ちが悪い。アロ・イーグなどに乗り、浮いている時も、自分の体重は席に押しつけられていた。操縦席中には重力が働いていた。ここに来て初めて無重力を自身で感じたわけで、まだ慣れていない。気持ちが悪い。

入った先は、部屋と呼ぶのがためらわれるほどの巨大な空間だった。屋根が遙か上に見える。白い明かりが明滅している。何かの作業をする場所だつたらしい。錆び付いているが、大小様々な機械の類を目にする事ができた。

錆びた鉄の匂い。

もう宙に浮いているわけではないが、ルキロは自分の勘を頼りに進んでいた。自分が何かを知っているのなら、「それ」に会う事を念じながら、自分の意志で進んでいけば、きっとたどり着くはず。そううまくいかなくとも、何かしらの導きはあるだろう。ここを出て、それに会うための許可は出ているのだから。

突き当たる。また扉だ。ただ、今度は、部屋に負けぬくらいのとてつもない大きさの扉だった。一人が立つと、その扉は左右に開いた。

また同じような空間がそこにある。ただ、今度は殺風景なものである。

扉が閉まる。ふわりと浮き上がる感覚。またか。いや、違う。この空間が動いているのだ。巨大な昇降機のようだ。なるほど、ルキロは納得する。あの錆びた機械から分かる通り、ここは何かを作る工場だったのだ。地上から見た光景を頭に思い浮かべる。ビルの隣、あのひらべつたい建物の下だろうか、と。

停止した。

カイは表示板を探した。地球の数字を表す文字は学んだ。表示板があれば、全何回か、いまだの辺りか、などが分かる。それらしき物はみあたらなかつた。

扉は開いた。

独房のあつた通路ほどではないが、かなり薄暗い。その薄暗い明かりの中、ミイラと化した無数の死骸があつた。長い長い時を経て室内に溜められてきた腐臭が、一気に解放された。怨靈の群がルキ口を襲つた。

ルキ口は口元をおさえ、駆けた。近く作業機械の陰に行き、屈む。床に四肢を着く。右手の横に髪の長い死体。彼女は悲鳴をあげかけ、同時に食道をのぼつてくる液体を一部気管に入れてしまい、激しくむせた。苦しくて、涙目になつてゐる。むせながらも、吐いた。このよつな時に初めて気がついたのだが、とてつもなく空腹な状態だつた。激しい嘔吐感に襲われながらも、出でるのは胃液だけだつた。口の中に残つた胃液の嫌な味を唾で流してしまひたかつたが、唾が全然出てこなかつた。

自分は色々な障害を乗り越えて、強く成長したと思つていた。だが、この星に来て、それらの気持ちはすべて覆された。自分は弱い。強くなつていたのは、あくまでも、ただ戦争時に常に存在する事物に対してだけだつた。ただの敵の死体、味方の死体、そして自分自身を襲う「死」の運命。ただ、それらに關しての感覚が麻痺していただけだつたのだ。だが、今は、この周囲の死体が怖い。そして、それ以上に自分の死が怖い。「永遠の無」がとてつもなく怖い。……ここにあるミイラとなつた死体のよつな……あんな姿になりたくない。……死にたくない……

吐き気がおさまつた後も、ルキ口は頭を抱え、狂つたよつに泣き叫んでいた。

狂氣が空氣を震わせ、自分へと跳ね返る。より錯乱していく。だが、泣き続けると涙も枯渇するよつに、ルキ口は体中の狂氣を放出し尽くしてしまつた。今度は静寂が訪れる。「克服」したわけではなかつた。弱いまだ。弱いからこそ、それが萎えてしまつた。

「そつか……わたしは、こんなに弱いんだ……」

自分を納得させるようにわざわざ思いを口にした。

「そうだな」後ろにカイが立つてゐた。「行くぞ」

カイは歩き出す。

「行こう」

ルキロは立ち上がった。

いくつか扉はあつたが、ルキロは真つ直ぐ進み、突き当たりの扉の前に立つた。開く。狭く長い部屋だった。薄く盛り上がつたガラスに覆われた箱が、部屋の端までびっしりと並んでいる。

中をのぞき込む。人間がいた。人間が立つたまま、カプセルに入っている。そのカプセルが背中合わせに二つ置かれ、それが長い部屋の端から端まで続いているのだった。カプセルの数は五十ほどはあるうか。男と女が交互に並んでいる。どれも、ルキロの感覚では美しかつた。とくに女のほうなど、自分など比較の対象にするのもおこがましいと思えてくるほどの美人だつた。色が白い。生きているのか死んでいるのかはわからない。

植物の種のように保存されて目覚めの時、または生誕の時を待つているのか。だが、もう設備は壊れていらしく、彼らが活動を開始する事はあるまい。とはいえ、今にも目を見開き、動きだしそうな生々しさではある。

ただ、この色の白さ……地球人のものだらうか……

「おれの顔を見るな」

「ごめん」

ルキロはもう、カイにもカプセルの中の人間にも目をくれず、まっすぐ歩き続けた。突き当たる。そして、次の部屋への扉が開き、進む。扉が閉まり始める。

カイには珍しい事だが、何か気になり、振り向いた。彼らが立つていた。カプセルから抜け出していた。全員、こちらを見ていた。表情のない顔で。ただ、立つていた。

扉は完全に閉まつた。

「どうしたの」

何か激しい呼気を聞き、ルキロは疑問に思つて訊ねた。

「扉が閉まる直前、今のカプセルから抜け出たやつらがこちらを見

ていた

「見間違いでしょ。誰も立つてなんかなかつたよ。もう一度、開けてみようか」

「いや。いい」

みつともないことだが、確かに見間違いだろ。そんな詰まらぬ事はどうでもいい。カイは歩き出す。

「あのわ……何を云つてゐのかつて思つかも知れないけど、へたな自尊心は、今この場に全部捨てておこう。わたしも今、経験して思つた事だけ……自分を弱く無価値なゴミぐずのよつな人間だつて、この先のぞまないと、とんでもない事になるかも知れないよ」
「無意味な問題にいちいち心を動かし、惑わされ、まぬけな暴走をするお前達や、地球人などに云われる筋合いの事じやないな」
何もないこの部屋を抜けると、正面には壁、狭い通路が左右に走つてゐる。

「左だよ」

もうルキロは自分の直感を信じている。

左右に扉がある。

「ここじゃない」

また扉がある。どこまでづづく通路なのか、この薄暗がりではまったく確認できない。

「ここも違う」

次。右側に扉があつた。真つ赤に塗られた扉であつた。何かプレートに書いてあるが、一人には分からない。だが、ルキロは心の中で頷いた。

「ここだ」

ルキロは扉に手を触れる。開く。

青い光が部屋を照らしている。さほど広くないその部屋の中、床から無数の管が人の腰ほどの高さまで突き出している。よく見ると管ではなく、さきほどのカプセル同様に何らかの物が収納されている。植物の薦を連想させるコードで、それぞれが繋がっている。

何かが上に載っている。半球状のケースの中に、何かがある。

カイは、水の中を泡がのぼる音を聞いた。ルキロも、水の中を泡がのぼる音を聞いた。そして、その中を見、ああついに来たのだな、という実感を持つたのである。

半球状の中には、脳があつた。羊水の中の赤子のように、脳が水の中に浮いていた。部屋の青い光に照らされていた。その、脳を載せた柱がさして広くもない部屋の中をみつしりと埋め尽くしていた。

柱を結ぶ薦のようなコードが音を立てた。動いているのだ。それらのコードはうねり、集まり、束になった。そして「ヘビ」が鎌首をもたげるように、しゅるりと音を立てて浮かび上がった。二人は用心した。ルキロも、「この部屋なのだ」という実感こそあれ、ここで何が起こるのかは全く分からぬ。

だが、その用心は無駄になつた。少なくとも一人には。よけぎれぬほどの速度、いや目で追う事すら不可能なほどの速度で、それは襲いかかってきたのだ。

鈍い音がした。より集まつたコードの束は、鋭い先端を作り、その赤子の拳大ほどもある先端は、容赦なくルキロの頭蓋骨を碎き、貫き、突き抜けていた。

ルキロの動きがとまつた。力が抜けたように、腕がだらりと下がる。硬直した、そのコードが、ルキロの体を支えていた。そのコードの先端にカイは目をやつた。赤と灰色、ピンク色の、どろりとした粘液状の液体がこびりついている。ルキロの頭部から伝わり、赤い液体が一滴、また一滴と先端から床にこぼれおちる。

「死んだか」

カイが誰にともなく云つ。

「当然だ。こんな物で、頭をぶちぬかれたのだから。……結局、何をしに来たのだ。死ぬためか。『ゴリゴリ』のよつに思えだ。そうすれば、死ぬ運命への恐怖も少しあやわらぐと考えたのか。だが、それは、お前だけが思つておけばよい問題だつたな。だいたい……」

いつになく饒舌になつてゐる自分に……いつまでも喋り終えぬ自分に腹が立つて仕方がない。この胸くそその悪い気分は何なのだ。
くそつたれ。

6

「助かる可能性は……そつだな……なんとも、云えないね」医者はそう云つた。

目の前で、弟のタクが寝ている。
あの赤銅色の、謎の機体。それを狙つたギ・グルーグがいた。だが、攻撃は跳ね返され、それは反撃に転じた。レーザー砲の類だろうか。やや離れた場所に車をとめていたエイジは、それでも、その攻撃に、光に包まれた感覚を受け、全ての感覚が麻痺しおそらく呆然としていた。

車から降りて、戦いの様子を見ていたタクは……まだ小さなタクは、すさまじい風に吹き飛ばされていた。無数の砂が体に皮膚を食い破り、氣味の悪い痕になつていた。エイジはぐつたりしているタクを抱き上げ、車に乗せた。

圧倒的な強さを示した赤銅色の謎の機体は、いきなり体から煙を吹き出しあり、ゆつくりした飛行で、もと来た場所へと戻つてつた。

エイジの網膜には、その機体の姿はしつかりと焼き付いていた。絶対に忘れる事はない。だが、まずは医者だ。エイジは来た道を引き返し始めた。

体に食い込んでいた砂は、すべて吸い出した。怪我に対しての応急処置はすべてすませた。だが、体に入り込んだ様々な菌が問題だつた。

「破傷風ですか」

「それだけならまだいいよ。……放射能が……」

「放射能」

「あとの辺まで来れば、まあ放射能に直接つて事はないけれど、それらの影響や、他の大気汚染なんかもかなりなものでね。弱つてゐる、しかもよその空氣に慣れた人間には耐えられないかも。……と云つて、この辺に大きな病院はないし。長く車に揺られるのなんて、こんな状態では絶対に駄目だ。……昔の医学ならば、簡単に治せたんだろうけど……」

……を犠牲にした事により、我々は心を手にいれたのです。科学の進歩と人類の進歩は同義ではないのです。なぜならば、進歩、そして進化とは、魂がともなわねばならないからなのです。確かに、人に対する善なる行いから、技術が進歩していく事もあるのでしょう。尊くないとは、思いません。だけれども、人の心や命と引き替えにしていいものではないのです。そのために、一人でも救う事が出来ないのならば、もうそれは、価値のないものなのです。進歩は、一人残らず、万人へ幸福をもたらすものであるべきなのです。すなわち、それは、心以外にはありえないのです。

みなさん、神に祈りましょう。

エイジは教会で何を話しているのか、神父が何をしているのかに興味を持つた時期がある。町へ降りた時に、ふらりとそこへ向かつた事がある。もう五年ほど前になる。

中に入るまでもなく、シスターが外で人々の前で話していた。エイジはそれをつまらなそうに聞いていた。だが、後々思いだし、もつともだと考えていた。だが……

シスター……。あんたの云つ通りなら、心つてやつのほうにそいらないじゃないか。……おれには、今……

医学や科学を捨てて、心でタクを救えるのかよ。

あんたの云つてた事なんて、何の役にも立たねえよ！

タクは、ベッドに縛り付けられた。まだ眠っているが、時々苦しそうな顔をする。起きた時に、もっと苦しい思いをするだろう。そして、暴れ出すだろう。

「強力な薬を使うからね。……悪くすれば、髪の毛が全部抜け落ちるかも知れない」

「苦しくて暴れないように、ですか。かわいそうじゃないですか。苦しいんだから、暴れるくらいなら……」

「いや、抜け出して、空氣の悪い外へ出ないようにだ。そして、激しい喉の乾きを覚えるはずだから、それで喉をかきむしったりしないように」

エイジは力無く頷く。

「なんで、こんなとこまで来たんだつけ……。誰のために。そうだ。そうだった。……。いや……。エイジは苦笑し、首を横に何度も振つた。

7

戦艦ゴ・スイッギ、船尾の居住区画、ある一室。異端者と呼ばれていた男の一人、トキ・ワ・キーレンが射殺された。

今、数人の男たちが冷静に死体を見下ろしている。

死体の胸と腹との二箇所、大きな風穴があいている。ライスカイスの中では、ひときわ表情の豊かな男であつたが、今転がっているこの死体の顔は無表情で、何を読みとる事もできなかつた。ただ、目を開き、天井を見上げている。半開きにした口から、左頬を伝い、赤い血が床に落ちる。

敵と内通しているらしい。そのような情報を手に入れ、諜報部が独自に動き出した。銃を突き付けると、奇声を発し、刃物を片手に飛びかかってきたため、やむなく射殺した。

カイは静寂の中、ただ一人きりとなつた。

青いほのかな光に照らされ、幾多の脳に囮まれている。部屋は暗く、数歩先はもうはつきりとしない。壁自体がはつする小さな光が、この部屋の狭さを教えてくれる。

目の中に、薄明かりに照らされる少女の死体がある。ただの肉塊だ。そう思いながらも、目をそらす事ができない。

?。……今のは見間違いだらうか。少女の口が、かすかに動いたような気がする。……まだだ。見間違いではない。恐怖と驚愕に見開かれていたような少女のその目が、生氣を取り戻したように、しかし、ややうつろな感じで、前方を見つめていた。

また口が小さく開く。生きている……。これは……。超科学……。ルキロの右側頭部を貫いたコードは、そのまま左側頭部から飛び出でていた。カイはその飛び出た部分を左手で掴み、右手でルキロの頭を押さえ、一気にコードを引っ張つた。

「おれは……」

なにかを呟きかける。いや、その先は云つてはならない。認めてはならない……

カイはつかんだその先端を、自分の頭に力一杯に突き立てた。血が飛んだ。

そこは宇宙であった。どこまでも続く空間に、恒星が明滅している。宇宙空間で星が瞬くと云うのも奇妙な話だが、少なくとも彼にはそこは宇宙空間に感じられた。

どこに視線をやっても自分の姿はなかつた。自分の体を確認する事ができなかつた。ただ、自分はここにいる、という思いは強烈なものとして、そこにあつた。自分は確実に存在している。水に溶けてしまつたかのような感覚。ゆらゆらと、ただし確固たる自らの意志を持つて、カイは進んだ。カイには分かつていた。いきなりこの世界につれて来られた少女と違い、自分からここに入ってきたのだから。

「誰か……いるの？」

幼い声。だが、聞き覚えのある声。さきほど少女の声だ。もつとも、彼女の思念を勝手に「声」として捉えているだけだろうが。

「ああ。いる」

カイは答えた。少女には、どんな「声」として届くのだろう。精神の世界において、人は赤子から老人までのすべてを持っている。だが、時と感覚を超えたその世界において、人の持つ、本人の望む「個」はただ一つ。彼女の本質は「幼い」のだ。この世界では、それは滅ぶまで変わる事はない。キーレンが楽しそうに話していた事を思い出す。

「怖い……」

少女の精神が、いつの間にかすぐそばに感じられた。

「本来の精神の居場所ではないからな。おぞましい連中の生み出した世界なのだから」

「云いおるわ……」

それは、老人の「声」であった。

「おまえは呼んではおらんのだがな」

また「声」が加わる。

「扉を開けたではないか」

「そうか。うつかりしていたわ。耄碌してな」

「くだらない戯れ言をおっしゃいます。……耄碌など、してみたい

ものですわ」

女の「声」が加わった。その「声」からほどどのような年齢も想像する事ができなかつた。

「ともかく、こやつはどつじよつか」

また一つ「声」。

「殺してしまうか」

また一つ。

時間にして、ほんの一瞬のかも知れない。長い時間が過ぎているのかも知れない。とにかく、様々な「思考」「声」が一気にこの

空間内にあらわれる。

「それが慈悲かも知れぬが。まあやめておこう。……出でいくなら、

今之内だぞ」

「おれにも知る権利はあるだろ？」

「お前さんたち、魂の脆弱な者どもに、こういう領域に入られても迷惑なのだがなあ。震えている子供があると、纖細で壊れやすいわしらまで影響を受けてしまう」

「それが、望みでもあるのだが、出来るなら、もつと穏やかにやつてもらいたいものだ」

「おれは、恐怖などは感じない」

「そうかな。そう思つように作られてはいるだけだからな」

「どんな存在だらうと、狂つていてるわけではなし、生物が恐怖を感じぬわけがなかろう」

「ウイルスに抵抗する、抗体の正体を知つておるのか？」

「人の科学の源を知つておるのか？」

「人がなぜ笑うか」

「なぜ生きるか」

「そしてなぜ殺すか」

「お前は知るか？」

「お前は知るか？」

「くだらん座興だ。……何なのだ？ それが、恐怖だと云い

「いのか？」

「わかつてはいるじやないか」

光の明滅が激しくなる。

まるで笑つてゐるかのようだ。

「あなたたちは、一体……」

少女の「声」。ルキロの思考が、この暗黒の羊水内を駆ける。

「聞きたいか」

「我々は」

「科学の頂点を極めた者」

「それ故、大罪人としての罰を受けた……いや、みずからにその運命をかした者」

「それぞれに、医療や工学、殺傷兵器、様々な物を研究していた者」

「地球規模の、最後の大戦を起こした者」

「地球を汚した者」

「その元凶となつた者」

「だが、我々は正しい。間違つてはいない。人類は、幸せをつかんだのだ」

「すべての悪魔は滅び、真の、地球にとつて平和な時代が来た」

「地球人類にとつても然りである」

「だが、人々は、このような惑星にした我々を許さなかつた……」

「ルキロもカイも、ただ啞然としていた。」

「それは大戦時、」

「ときの主力は人造生物である兵士たち」

「強靭な生命力を持ち、恐怖心は脳の奥へとしまい込まれ、」

「勇猛、かつ、残虐な行為を平然となす」

「ただただ、恨みを分散せんと、人間に利用されていただけの存在」

「人形。……ただの道具である」

「そんなくだらぬ、そして哀れな道具にすらも、人々は……」

「人形は、さらに感情を押さえられ、ノウアと呼ばれる箱に押し込まれ、宇宙へと……」

「我々は脳だけとなり、ここで脳が朽ちるまで生きねばならぬ罰を受けている」

「脳には勿論寿命があるが、ここでその時間の流れがまちまちでなあ。それが悩みで」

「同じ処分を受けた仲間は、二万人ほどいた。いまでは、この部屋の三十六人だけだ」

「いや、あいつが今朽ちたぞ」

「地核研究をしていたヤツだ。三十五人になつたぞ」

「みんな、祈れ！」

(略)

「脳を取り出された我々の体」

「残った我々の体」

「二万の虚ろな肉体」

「政府と教会は……」

「それは罰であり、疲弊した国民の感情をそらす措置」

地球上にそんな歴史があつただろ？ 地球の世界史はルキロもざつと学んだが、そのような事実は聞いた事がない。……地球も、誰かに歴史を操られているのか……

「さて、それは……」

「機械脳」

キカイノウ！

「頭蓋に機械脳を入れられ、生ける屍と化した罪人たちの肉体は、」

「罪人たちの肉体は、」

「交配用の捕虜、奴隸女數十万人と共に、」

「さきの人形同様に、宇宙へ、」

「生存環境の劣悪と思われる星系へ、」

「さて、その罪人の子孫たちは、今頃、どこでどうしているのやら」

星が明滅した。

「声」は聞こえないが、星は激しく明滅を繰り返していた。

脆弱を破つたのは、カイの「声」だった。カイの叫びだった。宇宙が縮小した。星々の残像が中心へと線を描く。巨大な星が、光を遙かに凌駕する速度でとび、軌跡を描き、中心へと小さくなつてていく。

浮遊していたカイの、精神の肉体を何者かが浸食していく。何かが入り込んでくる。惡意の牙を持つた無数の粒子が体に食らいつき、浸透していく。めり込んでくる。食い破つて入つてくる。突き破り飛び出した物が、戻り、再び突き破る。

神……

形は何も見えない。ただ、宇宙と、揺れ動く星があるのみ。

神の声、悪魔……。哄笑、

笑っている。笑っている……。

神の大きな手に握られ、凝縮された精神が、神の手が離れると同時に碎けた。

四散した。

そしてすべてが……

幻覚だつたのだろうか。ルキロは目が覚めた。床に倒れていた。首をぶるぶると横に振る。視線が定まらない。

青い光がうつすらと部屋を、自分の体を照らしている。

頭に手を伸ばす。なんともない。ただ頭の両側に、鈍い痛みが感じられた。

男の呻き声。隣で男が、ルキロ同様に床に倒れ、赤子のように丸くなり、震えていた。歯をガチガチとならしていた。生来の顔の青白さなはずなのだが、ルキロはなにかそれに異質なものが交じつているように思つた。

ルキロはゆっくりと、よろめきながら立ち上がつた。

部屋には無数の柱が立つてゐる。破片が落ちてゐる。ガラスの欠片。すべての……。

そう、柱の上に、水に浮いた脳があつた。そのガラスが今はすべて砕け散つていた。

微かな振動。微かな音。何の音だろう。

揺れ方が激しくなってきた。振動が床から足へ、そして心臓を震わせた。不安と恐れとを包んだ精神が、肉体とともに揺さぶられる。ルキロの意識は完全に覚醒していた。全ての感覚が針のよう銳く研ぎ澄まされていた。

何故なら、彼女は全てを理解したから。

ルキロは視線を落とした。自分の足下に、男が転がっている。寝転んだまま、幼児のように膝を抱えている。震え、怯えている。声をかけたが、返事はなかつた。何やら意味の分からぬ言葉を呪文のようになにかしているだけだった。

「悪いけど、わたしは……もう、行くよ」

ルキロは躊躇せず、部屋を出た。全力で走り出す。全てに決着をつけるために。

東の空を見る。昇り始めた太陽が、赤黒い無気味な色合いに輝いている。巨大な太陽は、ビルの隙間からルキロを照らし出した。無数の亀裂の入つた地面に、淡く長大な少女の影を作り出した。鳥のように舞う無数の影が、少女の影にまとわりつくように交差する。アロ・イーグ、ゾ・ヴィムがビルの谷間を縫い、飛んでいる。手にした銃から青や黄色の光が放たれる都度、爆音と共に地が裂け、建物が吹き飛び、崩れた。

さらに上空へと視線を向ける。両軍の輸送艦であるガ・ガース、キュー・ジ・ヴィの姿が都市へ幾多の影を落としている。そして、それらの遙か上空、雲の隙間からそのほんの一部分をのぞかせているのは、白銀の超大型戦闘艦テオ・リュー・フィルクだ。

何故ここを攻撃している？

ルキロはその自問に即座に自答する事で、彼らの目的への理解を確実にした。

何故ここは彼らの進入を許している？

ルキロはその自問に自答する事で、ここの人間たちの立場を理解した。

長老の言葉が浮かぶ。「たとえ天変地異で地球が滅びても、ここは一番最後になるだろう」あの薄黄色の防御幕と、プロトタイプ・ウーズイであるレイ・ウーズ……都市を護るそれらの存在が、まったく機能していない。

この都市の人間は牢獄の番人。近代の歴史を守護する者。それを今、自ら放棄しようとしている。その考えは理解する事が出来た。だが、ルキロ自身にとつては、番人のその決定ははなはだ不本意なものだった。このままではいけない。これを、阻止しなくてはならない。何故ならば、ここには全てがある。ここには鍵がある。お互いがこれからも悠久に流れていくであろう歴史を築いていくにあたり、障害になるだけかも知れない。だが、乗り越えるだけの価値があるにはある。

宇宙は、地球のこの都市がある事を知らなければならぬのではないか。

ルキロは駆けた。爆音の中を、爆煙の中を走った。

低空を飛行するゾ・ヴィムのソニックブームに、引きちぎられそうな激痛が体を襲う。両手で鼓膜を守りながら、吹き飛ばされそうになるのをこらえた。一呼吸すらつかず、またすぐに走り出す。間に合つて……。ルキロは念じた。

この都市の中枢は地下にある。エクシユールなどの攻撃では陥落させる事は出来ないだろう。だが、もし戦艦が主砲で狙つたら……。軍がなりふり構わない行動に出たら……。

背中から爆風を浴び、軽いその体は宙に舞い上がった。地に落ちたルキロは受け身をとり、転がり、立ち上がる。振り返りもせず、駆け続けた。

また、近くで砲撃による爆発が起きた。間違い無い。ルキロを狙っている。

それでもルキロは、目的地へ向かう最短距離のコースを駆け続ける。

自分が彼等に狙われている事など、知っている。今さら驚く必要もない。

2

胸部の扉が開くと同時に、乾燥した、黒臭い空気が噴き出した。レイ・ウーズの胸部の高さにある金属板の足場に立ち、手動で開けたばかりの操縦席をのぞき込んだ。レイ・ウーズには、人間が乗っていた。レバーを両手でしっかりと握りしめている。だが、その人間は、すでに半ば白骨化、半ばミニラ化していた。骨に、乾燥した真っ黒な肉皮がうつすらとこびりついているだけだった。男か女かも想像つかない。果たしてどんな身分の人間だったのだろう。

様々な計器が無音で、ただ点滅だけを繰り返している。待機状態のようだ。ルキロは手を伸ばし、エクシユールを操作する時の要領で、操縦レバー付近をまさぐる。

空調機が作動し始めた。座っていた死体は、見る見るうちに崩れ、驚く余裕すらなかつた。塵のようにな細かな砂となり、舞い上がり、天井に吸い込まれていく。服だけが残つた。ルキロは服を横に払いのけ、操縦席に入り込んだ。

操縦系の確認。エクシユールと同じ要領でいけそうだ。

先の逃走劇で、「内部のコンピュータか、誘導操縦により動いているに違いない」と、ライスカイスの青年は云つた。その通り、自動操縦だつた。キーを叩き、それを解除する。

開いた胸部扉の向こう、前方に壁が見える。赤く大きな文字で「B 3」と書いてある。

スイッチを入れる。

左右から回り込むように丸みを帯びた金属板があらわれ、隙間な

く合わさる。計器の小さな光を残して、暗闇に包まれる。続いて、上下から同様に薄い金属板が閉じ合わさる。

切り取った球の一部を裏側から見ているかのような、大きな画面が頭上にある。それが前方に回転した。画像が映る。数瞬前まで肉眼で見えていた光景が映っていた。

前方の壁、シャッターに爆風による亀裂が入る。外からの攻撃だ。丁度いい、とばかりにルキロは微笑む。だが、それは、無理矢理に作り出したような笑みだつた。無茶な戦いを前にして、強引に自分の精神を昂揚させようとしていた。

ペダルを踏み込むと、レイ・ウーズは歩き始めた。壁が近づいてくる。手を伸ばす。さきほど攻撃により出来た隙間に手を伸ばした。両手で掴み、力任せに左右に広げた。厚さ十センチ以上はあるシャッターの亀裂が、紙切れでも引き裂くように軽々と開いていく。やはり……とんでもない力を持つている……

内部の人間の寿命を縮めるだけの兵器である。そう判断され、量産される事はなかつた。だが、無意味な技術であつたわけではない。その技術があればこそ、安価な量産機にも十分な性能が備わつたのだから。量産型である次世代エクシユール……それがさらに戦略別に分岐し、ジーン・ウーズイなど現行機へと発展していく。レイ・ウーズは外へ出た。まだ、両軍の都市への攻撃は続いていた。ルキロは画面が映し出す空を見ていた。

心をたかぶらせると同時に、心を静めてもいた。これから仕事を思い、指を組み、簡易的瞬間的な瞑想術を行う。呼気を整える。

彼らは、このレイ・ウーズを捉えている事だろう。そして、この都市の産物、仲間を地獄へと叩き込んだこの機体に対する命令を下すだろう。

動きがあつた。

ゾ・ヴィムが、そしてアロ・イーグが、こちらに向かつて飛んできた。ルキロは……レイ・ウーズは動かない。ゾ・ヴィムが、そしてアロ・イーグが、さらに近づいてくる。そして、構えていた銃を

撃つ。

ルキロは中央のレバーから右手を離し、右膝横のレバーに手をやつた。レバーを前に倒した。レイ・ウーズの背中から白い炎が出た。ディオとエクシユールの同時攻撃により、レイ・ウーズが立つていた地面、道路は蒸発し、シャッターは溶け大きな穴が空いた。だが、レイ・ウーズはそこにはいなかつた。

空を飛んでいた。操縦席の中、自分の体重の数十倍もの衝撃を体に受け、ルキロは一瞬だけ気を失つた。だが、その凄まじい振動、衝撃に、すぐに現に引き戻された。

レイ・ウーズは宙に静止している。

ゾ・ヴィムの五機編隊が上空から一斉射撃。当たつたかどうか、彼らに確認をする時間はなかつた。何故なら、その時すでに、五機のゾ・ヴィムは胴体を真つ二つに両断されていたのだ。レイ・ウーズは彼らの機体よりもさらに上にいた。右手に光る刀を持っていた。刀に細かい霧のような粒子がまとわりつき、それが黄色く輝く光を放つてゐる。

ルキロの孤独な死闘が始まつた。

群がつてくる敵全てを、一撃で葬つていく。ルキロは邪魔する敵を切り伏せながら、ひたすら上を目指してゐた。上へ。あの雲の隙間……

ゴ・スイツグ、シル・カル、すべての戦艦の主砲が、都市を狙つていた。

すでにそれぞれが一度、発砲してゐた。それにより、地球人どもがこの都市に張つたやわな防御幕は破れたのだ。彼らはそう考えていた。たかが地球人どもの防御機構など、と。

主砲の冷却は完了し、エネルギーの充填が始まつてゐた。全艦が放つ次の砲撃で、この都市は完全に滅びるのだ。都市同様に滅びねばならない機体レイ・ウーズ、それが今死神となり、刀を振るい、次々とアロ・イーグとゾ・ヴィムを破壊しながら上昇してくる。空

中格闘戦のできるすべての機体がレイ・ウーズを阻止せんと立ちはだかっていた。

レイ・ウーズの背中から吹き出る炎が、エクシユールやディオを遙かに凌駕すると思われる巨人の幻影を作り出す。その幻影の巨人が、次々と立ち向かう者を飲み込んでいく。

本来ならばあり得ない事である。シル・カルがレイ・ウーズに向け、主砲を放つたのだ。

レイ・ウーズの暗い操縦席内が、突然、カメラの捉えた強烈な明かりに照らされ、眩しいほどに明るくなつた。赤い髪の奥、ルキロの目は歪み、口元は両端が釣り上がつていた。それは、眩しさ故ではなく、単に笑つていたのだ。ただの微笑なのか、それとも何らかの皮肉による苦笑なのかは分からぬ。ルキロ本人にすら分かつていないのだから。

ルキロは中央レバーの根本、右にある大きな赤いボタンに拳を叩き付けた。

ルキロ・エ・ルは逃亡者から、完全な反逆者になつた。そして、標的の一つとして知らされているあの機体、プロトタイプ・ウーズイ。この一撃は、両方を始末する事ができる。プロトタイプはある通りの性能だ、多少の犠牲はやむをえまい。

シル・カルの艦長の一人であるフギット・ザイ・ヤーは、そう判断し、そして主砲の発射を命じた。遙か上方のテオ・リュー・フィルク内にいるメルリカ元帥代理には制止されたのだが、彼はたかが小娘と馬鹿にし、命令を無視した。

エネルギーは十分に蓄えられてはいないが、たかがエクシユール一機、どうとでもなる。そして、手柄をたてれば、申し開きなどどうでもなる。

伸びる光はゾ・ヴィムやアロ・イーグを巻き込み、まっすぐにレ

イ・ウーズへと襲いかかる。レイ・ウーズの性能がたとえ優れていようと、操縦者が優れていようと、逃れるすべはない。「たかがエクシユール一機を主砲で攻撃しておいて、自慢げにほくそ笑んでいた」。フギット艦長は、後生そう云われていたかもしない。そうならなかつたのは、彼にとつて幸だつたのか不幸だつたのか分からぬ。何故なら彼から感想を聞く事は、もう永久に出来なかつたから。

レイ・ウーズの背中から回つている大砲は、まっすぐシル・カルへと向けられていた。大砲の先端に光が収束しだした。そしてそれは、砲の口径を上回る巨大な毒蛇へと一瞬にして変貌を遂げた。鎌首をもたげ、不意にシル・カルという獲物に襲いかかつた。そのうねるよう伸びる巨大な光は、シル・カルの主砲が作り出すエネルギーの大きさを遙かに上回つていた。それぞれが、半ば物質化した光である。ぶつかり合い、押し合いになつたが、それはほんの一瞬の事だつた。全長一キロ弱もあるシル・カルの全体がレイ・ウーズの放つた光に完全に飲み込まれていた。

（捕足）実際には、単純な押し合いが行われていたわけではない。地球上に存在していたこのレイ・ウーズには、誰の常識をも撃ち破る科学兵器が多々搭載されていた。一見、戦艦の主砲がそのまま搭載されているように思えるこの兵器も、実はまったく異なる原理の物だつた。ブラックホールのように激しい傾斜の重力空間を作り出し、その力で素粒子レベルへの攻撃、つまり空間そのものの破壊を行つたのだ。敵の打ち出した攻撃エネルギーの存在する空間そのものを碎きながら攻撃を行つたのである。視認出来るエネルギーの大小など関係なく、レイ・ウーズが勝つのはごく当然の理屈なのである。

火山の噴火のように、同時に数百、数千の火柱が立つた。あまりの熱量、衝撃に、シル・カル内部の様々な機械が爆発したのだ。誘爆が誘爆を呼び、実にあつもなく、シル・カルは朽ちた。地上へと降下していく途中、大爆発が起きた。

ルキロは、ボタン一つで数千の命を闇に葬つたのだ。

鼻で笑い、また口元を歪めてみせる。それは演技であつた。邪悪になりきろうとしていた。努めてそうしなければ、彼女の「純真」が耐えられずには砕けてしまう。

無意識のうちにしてしまつ歯ぎしりをおさえているうちに、口元から血が流れた。口を手でおさえる。せき込む。手のひらを見ると、驚くほど多量の血がこびりついていた。

右手の、親指を抜かす四本の指で、顔の表面を左から右にすべらせる。四条の赤い線がルキロの顔にひかれた。血化粧……。自分への暗示。

炎上するシル・カル。徐々に小さくなつていく。砂漠の上へと落ち、最後の大爆発を起こした。砂の間欠泉が吹き上がり、続いて嵐のよつやな強烈な風が届いてきた。

十機のゾ・ヴィムがレイ・ウーズを取り囲んでいる。

ルキロは応戦した。レイ・ウーズの能力を利用して、敵の後ろへ後ろへと回り込みながら、一機、また一機と首を飛ばしていく。

十数秒後、ゾ・ヴィムを七機ほどしとめたところで、ルキロはその声を聞いた。

「なんでそのまま逃げなかつた。ルキロ」

アロ・イーグ……。そのすぐ後ろにもう一機が続く。

「ウェル?」

それと、タゲンヒノウヤンか。

「投降しろ。……いや……逃げろ! ルキロ」

ウェルは叫んだ。捕まれば、もうルキロの運命は決まつていて。自分がときに変えられるわけがない。それならば、逃げてほしい。遠い辺境の惑星だが、死なれるよりは……いや、そうなつたら自分もここに残る。

「ウェル、馬鹿を云つてんじゃねえ」
タゲンの叫び声。

「馬鹿なものか」

三機のゾ・ヴィムを相手にしているレイ・ウーズの動きは鈍っていた。

「 ウェル……。ルキロの心の中で、嬉しさと悲しさとが同時に爆発した。やつぱり……わたしの……てくれた……でも……駄目だよ、ウェル。……どうして、今……」

レイ・ウーズの防御幕は、ゾ・ヴィムの銃撃程度の攻撃には有効だろうが、それは科学反応によりレーザーを拡散させるだけで、体当たりや刀などの攻撃には効果が無い。だから、ルキロはウェルの声に動搖しながらも、必死で戦っていた。レイ・ウーズに乗つてしようと、油断をすれば死、という状況はいつもと変わりはないのだ。だが……動搖しているせいではなく……レイ・ウーズ自体の動きが……あきらかに鈍つてきていた。無茶をさせすぎたか……それとも、さつきの大砲が……。レイ・ウーズをどう扱えばどうなるのか、それは彼女にはまったくの未知の領域だつた。最後のゾ・ヴィムの首をねじ切つたその時、レイ・ウーズの四肢の装甲の隙間から白い煙が吹き出た。

「 ルキロ、こんなところで一人で戦い続けていなくていい。はやく逃げるんだ」
「 ウェル……ごめん。いろいろと……。でも、わたしは……。ウェル?」

ウェルの声の様子がおかしい。

「 どうした、ウェル」「 タゲンも気づいたようだ。
何だ、この声は?」
「 ウェル、しつかり」

ルキロはつぶしたえる。……樹脂コンピュータ。ルキロにあの時の記憶が蘇る。エイジと車に乗つていた時。いきなり襲つた頭痛。体の痺れ。あれは故障、暴走ではなかつた。コンピュータの、もしくは、誰かの意志。裏切りを許さぬ、誰かの意志。

「おまえは何もかもを滅茶苦茶にする」

ノウヤンの鋭い叫び。アロ・イーグが刀を振り上げレイ・ウーズに斬りかかってきた。

「姉さん」

「そう呼ぶな。あたしが引導を渡してやるよ、ルキロ。びつせ、殺されるのなら、せめて……」

レイ・ウーズは防戦一方。アロ・イーグは出鱈目に斬りつけてくるだけで、鈍つていてはいえレイ・ウーズがそれをかわすのは造作もなかつた。

もしかしたら、ノウヤンにも……いや、違う。ノウヤンは……

ルキロは叫んだ。

「聞いて、姉さん、タグザムティアは……」

「つるさい」

「ライスカイスと地球とは……」

「つるさい」と云つてゐる

「大事な話なんだよ」

「お前を殺すほうが遙かに大事さ」

ルキロはせき込んだ。血を吐いた。意識が朦朧とする。

目を見開く。画面の中で、アロ・イーグが刀が振り下ろしていった。レイ・ウーズはその攻撃を避ける事が出来なかつた。金属と金属がぶつかり合つ。金属が金属を引き裂く音。火花が散る。爆発した……

アロ・イーグが……

ノウヤン機と、ルキロのレイ・ウーズとの間に、アロ・イーグがもう一機。

「ウェル！」

ルキロとノウヤン、そしてタゲンの声が同時に響く。ウェル機は、背中を……右肩から左の胸まで切り裂かれていた。火花が激しく散つてゐる。爆風は操縦席内にも及び、ウェルの体にはいくつもの破片が突き刺さり、血を流してゐた。

「ウェル……なんで……なんでなの。……わたしなんかを……びつ

して……

「だつて、許嫁だろ?。……あの時、君だけがウーズイで出る事がなければ……君がずっと一緒になら、こんな事にはならなかつたのに。させなかつたのに……」

ルキロは、ただ許嫁の名前を繰り返し叫ぶ事しか出来なかつた。「その声、は、泣いている、の、ルキロ?。笑つてくれよ。ぼく、は、君の笑つているところが、とても大好きだつたんだから。君は、天使みたいに、笑うんだ。とても、かわいくて、好きだつた。……本当の事を云うと、ぼくが両親に頼ん……」

再びウェルの乗るアロ・イーグを襲つた爆発、それが二人の男女の異星での物語を終わらせる幕となつた。

3

とめどなくあふれる涙に邪魔をされて、落ちていくアロ・イーグの姿がよく見えない。

「う、裏切り者をかばうからだ。あたしのせいじゃない」

ノウヤンは何かから逃れようと、必死に声を荒らげる。

ノウヤンの鼓膜を、そして心を、ぞつとするような不気味なうなり声が震わせる。それはルキロの声だつた。誰も聞いたことのない、ルキロの奥底に潜む声だつた。

火山の噴火のように煙をもうもうと出していったレイ・ウーズだつたが、もうそれはおさまつてゐる。赤銅色の機体が、ポツンと一機、浮いていた。小さな……それは、アロ・イーグとさほど変わらぬ大きさだつたが、この無数にいる敵、エクシユール、ディオ、そして戦艦、その中にあつて、とても卑小な存在に見えた。それが一瞬にして変貌した。再びあの悪魔の姿を、いや、それ以上の何かをたくわえ、さらに凄まじい怪物へと変化した。

熱氣と怒氣とに支配された空間の中で、ルキロは獸のよつに吼えた。

巨大な……とてつもなく巨大な怪物が、両手をふりあげ、突つ込

んでくる。ノウヤンには、そう映つた。レイ・ウーズがエクシュー
ルとはとても思えぬほど激しい炎を燃やし噴出しながら、刀をふ
りあげ、向かつて来たのだ。距離を測定レーダーのカウンターが、
目で追えぬ速さで変化していく。化け物に飲み込まれる！ そんな
幻想の中、ノウヤンの体は冷静に現実への対処をしていた。横なぎ
の一閃を、アロ・イーグは刀で受け止めていた。だがそのまま押さ
れる。出力が段違いだ。全くレイ・ウーズに抵抗する事が出来ない。
レイ・ウーズは、アロ・イーグの体を突き飛ばし、あらためて刀
を振り下ろそうとした。タゲンのレ・アロ・イーグが間に入り、そ
の刀を受けた。だが、レ・アロ・イーグが叩き折られ、返す刃
でその両腕を切断された。動搖を伝える電流が神経を流れる。それ
が脳に届いた時、すでにレ・アロ・イーグの首はなかつた。

「タゲン、引きな」

ノウヤンは隊長に命令するように叫ぶ。胴体と脚部だけになつた
レ・アロ・イーグの横から、ノウヤンのアロ・イーグが飛び出した。
銃を構えていた。ノウヤンが、銃を撃つ操作を行うよりも早く、レ
イ・ウーズの頭部にあるバルカン砲が火を噴いた。一秒間に数百と
発射された細かい弾丸は、アロ・イーグの頭部を一瞬にして粉碎し、
巨大隕石の雨に襲われた小さな衛星のように滅茶苦茶な形となつた。
エクシユールの差だけではない……あの娘に、こんな潜在力があ
つたとは……。ノウヤンは息を切らしていた。

レイ・ウーズの刀が振り上げられた。動きがとまる。ほんの数秒。
だが、ルキロには、その数秒は、数時間に等しい時間といえた。様
々な思い、考えが映像となり、消えていった。両者の間に一触即発
の緊張感が高まつていく。寂寥を破つたのはノウヤンの声だった。
耐えきれなかつたのは、ノウヤンの方だつた。

「何してる。……命を助けて、脚の借りを返そうつてつもりかい。
ふざけんじやないよ」

ルキロは抑揚のない声で応えた。

「そんな低次元の話は、どうでもいい」

切り掛かるレイ・ウーズの残像。レイ・ウーズは上昇した。

ノウヤンのアロ・イーグは、両腕、両脚を落とされていた。背中に小さな爆発。ただの人を乗せた金属の箱となつたアロ・イーグの残骸は、落下を始めた。そして、それを、タゲンの乗る首のないレ・アロ・イーグが二の腕だけで器用に受け止めた。

「操縦席は何ともないかい？ 隊長さん」

ノウヤンは力抜けたように咳く。サブモニターにタゲンの顔が映る。

「ああ。お前も……おい、ノウヤン、お前……」

ノウヤンの黒かつた髪の毛は、すべて真っ白になつていた。

4

レクンはただ呆然としていた。隣の少女が訝し気な眼差しで見ていた。

こんな事になるなんて……。ウェル……

通信兵であるレクンはウェルヒルキロのやりとりをずっと聞いていた。

ウェルの言葉が蘇る。

「あの時、君だけがウーズイで出る事がなければ……君がずっと一緒にだつたなら、こんな事にはならなかつた。させなかつたのに……君だけがウーズイで出る事がなければ……」

レクンは自分の行為を思い出す。そして、悔やんだ。涙があふれ出す。

隣の通信兵の少女は、ますますふしんがり、仕事にならない。

仲を引き裂いてしまいたいという気持ちは強くあつたが、あの事は、ちょっとした悪戯のつもりだつた。大事になるとは思わなかつた。大好きな人と、それを奪つてしまつ嫌な娘とを引き離す事が出来ればどんなにかいだらう、と考えていた。

それを実行する機会がおとずれた。あの日、幼なじみの整備士に

声をかけた。彼は担当を転々としていたが、最近は、ウェルヤルキ口のいるリーアック隊の整備もしていた。

作戦が始まれば、小隊はいつも一緒だ。あの人気が、あんな娘といつも一緒になんて耐えられない。許せない。どこがいいの、あんな娘。

5

ヴィック・ン・ボー艦長の視線は、シル・カル操舵室スクreenに映った驚嘆すべき映像に釘付けになっていた。後々、自身にその運命が訪れなかつた事に感謝するのだった。

ライスカイスの戦艦ゴ・スイッグの一隻が、数十ある副砲をすべて一点に発射したのだ。シル・カルの主砲を撃ち破る能力を、レイ・ウーズが有している事はすでに目にしている。だが、連射は出来まい。大型のジェネレーターを持っている戦艦だつて、そうなのだから。そう考えての攻撃だつた。レイ・ウーズの姿は眩しい光に包まれた。跡形もなく消滅するはずだつた。だが、その光の中から、レイ・ウーズは悠然とあらわれた。

無傷！ ゴ・スイッグへと近付いて行く。両手に掴んだ刀を振り上げ、ゴ・スイッグの装甲に突き立てた。怪物は刀を深々と刺したまま、一瞬にしてゴ・スイッグの上を通過した。そして、ゴ・スイッグは……

「巨大戦艦の副砲塔の一斉射撃をまともに受けてもなんともないほどの防御幕だと……エクシユールが……ありえん。そんな、馬鹿な。非現実的な」

「防げるとしても、どこからそのエネルギーは……」

「資料では、そこまでの力など……。プロトタイプが……」

「その後……あのシステムを完成させた……と云う事、か」メルリ

力は一人冷静に分析していた。「未完成、不完全、解析不能……結局我々はその技術は捨てたけども、こちらでは出来上がっていた」

6

刀を一振りするたび、ゾ・ヴィムの首が落ち、アロ・イーグの腕が飛ぶ。ある機体は胴を差し貫かれ、または一瞬にして機体を二分され、炎上しながら地獄へと落ちていく。

ルキロの顔はやつれていた。顔だけではない。それなりにふくよかだつた体つきも、不自然に肉が落ちてきていた。レイ・ウーズの乗つてからまだ十分と過ぎていなが、その間にルキロの顔つきは、かなりの変貌を見せていた。目は赤く充血していたが、その光だけは変わらず、ぎらぎらと輝いていた。

ただ一人の人間が、ただ一機の機体が、すでに数千の個人の運命を変化させていた。だが……違う。そんな事を望んでいるのではない。まだ、自分の望むものは、何もえていない。それは、まだ、上にいる。それだけを変えたいのだ。何故、邪魔をするのか。何もせずに、自分を行かせてほしい。それでも自分、レイ・ウーズへの攻撃の手は緩む事がない。ゾ・ヴィム、アロ・イーグの執拗な攻撃、追撃がレイ・ウーズを狙う。だが、それは小さな蝶々が、巣を張つて待ち構えている毒蜘蛛に向かうのに似ていた。次々と搦めとられ、その羽ばたきを奪われていった。

レイ・ウーズは雲を抜けた。

テオ・リュー・フィルクの銀色の影が見えたが、それはすぐに、アロ・イーグの編隊にふさがれる。レイ・ウーズは刀を出鱈目に振り回しながら、その隙間を強引に突破した。

テオ・リュー・フィルクの副砲塔が、一斉にこちらを向く。それに気付いたルキロはさらにレイ・ウーズを加速させる。機体の耐久度が分からぬ以上、危険は避けるにこした事はないのだ。

顔の皮膚がはがれおちそうなほど痛みが走る。そして急減速。筋肉、臓器など肉体の全てが同時に悲鳴を上げた。だが、

もうテオ・リュー・フィルクが発砲できぬほど近くに、レイ・ウーズの姿はあった。

一キロ近い全長を誇るテオ・リュー・フィルクは、上に降り立つてみると、一つの島と云つても過言ではなかつた。その島の中央に、高さ一百メートル強のタワーが小さな突起のように存在していた。レイ・ウーズはそのタワーに沿い、さらに上昇した。最上部で、レイ・ウーズの刀が一閃する。

突然の衝撃、そして巻き起こる轟風に、オペレーターや警護の兵たちはうろたえた。風にとばされぬよう、必死に何かを掴んで体を支えている。

オペレーター一人と副艦長が、突然出来たその穴に飲み込まれていつた。

元帥代理メルリカ・カ・レ・ムは中央で、一人平然とした表情を浮かべていた。彼女が座っている椅子は、重力場制御が常にはたらいており、集中砲火を浴びても揺れはほとんど感じない。緊急時には床と天井から空気が吹き出て独自の安全圏を作りだし、室内が突然真空状態にならうと彼女の命だけは確実に保証されるのだ。

プロトタイプ・ウーズイの攻撃により、壁が斜めに切り裂かれていた。亀裂の向こうに赤銅色の機体が見えた。激しい空気の噴出はもう止まっていた。亀裂がふさがったわけではないが、もう空気の流れは調整されていた。

メルリカはオペレーターに命令し、レイ・ウーズと回線を繋いだ。同時に、元リーアック隊ルキロ・エ・ルの資料に改めて目を通す。

「わたしと……話し合いに来たの？ ルキロ・エ……ル。……ル？

最下層か」

メルリカは鼻で笑つた。

「何をいまさらの事のように。……それに、タグザムティアに上も下もないよ。……なかつたんだ」

「何を知つたのか分からぬけど……。話しくい。中に入つて」

ルキロは黙つている。メルリカの言葉が信用出来ないわけではな

い。ただ、このメルリカの存在そのものが信用出来ないのだ。無邪気で、優しくて、悪戯好きで、よく笑つた。そんなメルリカしか、ルキロは知らない。

メルリカは、ルキロが中に入つてこないのを別の意味に受け取つた。全員に部屋の外に出るよう命令した。当然反対されるが、再度の命令により、全員従つた。呼ぶまでは何があつても絶対入つてはならないと念を押す。

レイ・ウーズの胸部のハッチが開いた。ルキロはさらにレイ・ウーズの体を亀裂へと密着させた。耳をろうせんばかりに風の音が激しく唸り続けるが、体には風は全く感じない。赤い髪の毛も全く風になびいてはいない。空気の流れを操る力場が発生しているからだ。ルキロはテオ・リュー・フィルク内部に入つてきた。かなり疲労している様子。

「ようこそテオ・リュー・フィルクへ」

メルリカは椅子から立ち上がり、ルキロへと近づく。メルリカは、ルキロよりもたいぶ身長は低い。だが、その表情は自信にあふれている。

かたや祖父に全軍の指揮を任せられ、数万の人間の命、運命を操る者、かたやただ一人で運命に戦いを挑み、直接に人々を地獄に叩き落としながら、ここまでい上がりつて来た。それは、どちらも少女であつた。その二人が、今相対していた。

ルキロは熱線銃を腰から引き抜き、メルリカの頭部へと向けた。メルリカの表情に全く変化はなく、涼し気な微笑を浮かべている。むしろ、銃を突き付けているルキロのほうが、耐えられずに険しい表情になつていた。

「答えて。何故、地球に来たの」

ルキロは問う。

「何を云つてゐるの。わたしは、ここに来る前は、ただ元帥の孫娘だというだけで、なんの権限も持つてなかつた。知つてゐるでしょう」

「とぼけないで。……とにかく、あなたも知っているはず。ここへ来た目的を……。元帥を殺したのも、あなたかも知れない。指揮権を手に入れるために」

「意味ないよ、だつてあの肉体は滅びかけていたのだから。どんなに技術が発展しても、それが生身の肉体である以上、死の運命は避けられない。速度をゆるめる事くらいしか」

「あなた個人やその周囲の事なんて、本当はどうでもいい。わたしが知りたいのは、この計画を考えた者たちの意志。あなたにも、さらに上の者がいるのでしょうか」

「それは当然だよ。わたしは元帥代行。軍の権力者の、さらに代理人に過ぎないのだから」

「そうじゃない。政府だなんだ、身分の上下の事を云つていいのではなくて……」

質問の意図は全て理解しているくせに、からかっているのだろうか。

「下で……下の都市で何を知ったの？」

メリカは巧みに答えをばぐらかそうとするが、反対に自分は正直に話してしまおう。どうせ、この少女はその事実をとうに知っている。そこから聞き出せる事もあるかも知れない。

「たくさんのは、博士たちの意識があつた」

「博士たち？」

「この都市は彼らの牢獄で、それが少数の番人に護られていた。それだけじゃない、いろいろな工場があつて、研究所があつて……数百年前の大戦で、地球は今のようになつてしまつたのだけれど、その前後の歴史は何かはつきりとしなかつた。それが、この都市には、すべての答えがあつた。よく調べたわけではないけど、調べれば絶対にその答えがある。そして、タグザムティアやライスカイスにも無関係じゃない」

「それは、どんな？」

「レイ・ウーズ。……エクシユールどころか、ライスカイスがディ

オと呼んでいた兵器、あれらすべての原形。この地球で作られたものだった。それどころか、わたしたちの科学はすべて、地球のものだった。あの時地球上にあった技術のほんの一部。地球がみずから捨てた忌まわしい科学のほんの一部分。わたしたちは最初から地球の足下にも及んでいなかつた。そして、それを捨てて生きている今、地球人の心は、我々よりも遙かに高い「もちろん色々な人間がいるのだが、ルキロは全体を一つの個として語つていて。『でも、そんなんのはどうでもいい。だつて、わたしたちの星の人間はもともと……』

「なんだ。全部、知っちゃつたんだ」

メルリカは笑つた。機械人形のような、ぞつとする笑みだつた。『「そうだよ。だから来たんだ。実際、地球人たちは、何も知らなかつた。星の記憶は、この都市だけに封じ込まれていた。もしも知つていたら……』

「地球を滅ぼしていた」

「そう」

「なぜ、そんな事を」

「わたしたちは、怒つていたんだよ。五百年も前から、ずっとね。……わたしたちにだつて、感情はあるんだよ。だつて、そう作られているんだから」

感情がある事くらい分かつていて。何をいまさら、ヒルキロは訝しがる。メルリカはルキロなど眼中にないと云つた様子で話し方が熱を帯びてきている。

「パズルの断片のような最低限の情報だけをメモリーされ、生身の空箱に押し込まれ……地球の市民たちが喝采して喜んでいたよ。記憶の風化も何もない。わたし達には、今も昔も全くの同等なのだから。……わたし達が何をした？　わたしはただの情報、ただの電流。お前達こそが、あの忌まわしき奴らの子孫だろう。呪われた……汚れた存在め！」

メルリカは気がふれたように目を見開き、ルキロにつかみかかる

うとした。武器を持たない小さな少女だ。恐れる必要はない。だが、ルキロはメルリカが全身にまとった空氣に恐怖し、無意識に熱線銃の引き金を引いてしまった。しまった！ と心の中で叫ぶルキロ。もう遅い。超高温の熱線が、メルリカの頭部を一瞬にして蒸発させる。…… そうなるはずだった。だが……

メルリカの体はルキロの足下に倒れた。何らかの科学物質の溶けた嫌な匂い。メルリカの頭部は消失してはいなかつた。顔を覆う人造の皮がすべて蒸発し、中身が露わになつていた。鉛色の髑髏……。数枚の金属板が集まり、頭部の骨格を作つていた。歯だけが、真っ白に、綺麗な配列で並んでいる。

そうだったのか……。ルキロは、全身の力が抜けていくのを感じた。

「機械の怨念の復讐劇……でも……確か、二万人の科……」

ルキロの言葉は途中で遮られた。メルリカの肉体は活動を停止させたわけではなかつた。痙攣したように、四肢をつっぱらせた。両腕が動く。手を床につける。空氣から物質が作られていくかのように、首からメルリカの人造皮膚が再生していく。肌色の皮膚が顎を覆う。ピンク色の唇が出来る。

「お願い……」メルリカの……機械の唇が動いた。「もう一度、わたしの頭を撃つて……完全に破壊して。ルキロお姉ちゃん。わたしを助けて……。早く、撃つて……」

本当の、メルリカの意志……。ルキロはふたたび銃を構える。手が震える。腕が下がる。

「だめだ。……撃てない。ごめん、撃てないよ」

さきほどは驚いて無意識に指が動いてしまつたが、意識的にメルリカを撃つことなどルキロには出来なかつた。それがメルリカを永遠に苦しめることになるかも知れない、そう思いながらも、でも擊つ事が出来なかつた。

メルリカの小さな鼻が出来上がり、目の回りが覆われる。額、そして頭頂まで完全に皮膚で覆われた。頭髪が生え始める。弱々しい

表情となつていたメルリカの顔が、また先ほどまでの不遜な表情へと戻つていく。

「たかが肉体の記憶」ときが、わたしを操ろうなどと笑止な……」

メルリカは熱線を浴びる前と寸分変わらぬ姿で立つていた。

二人は同時に口を開く。だが、言葉が発せられる事はなかつた。

大きな画面が映し出すその光景に言葉を失つていた。

都市が爆発したのだ。砲撃による爆発、建物の倒壊は先ほどから目にしていたが、今度のはそれとは全く異なるものだつた。噴火のように、内部から吹き上げるよう爆発し、巨大な火の柱を幾本も立てていた。火の柱は高層ビルを遙かに上回る高さだ。ビルは炎に飲み込まれ、炎に中に崩れ落ちていく。低い高度にいたゾ・ヴィムやアロ・イーグなども炎に飲み込まれていつた。爆発は何度も繰り返され、その都度に規模が大きくなつていつた。それほど時間がたたないうちに、地上の建物はすべて跡形無く吹き飛んでいた。ルキロはただ黙つてそれを見ていた。

仲間と戦う事になつてでも、仲間を失う事になつてでも、残したかったもの。「歴史」であり、「罪」であり、「希望」であつたもの。いまは無理でも、時間をかければ分かつていつただろうに……。上も下も……何もないのだという事実が。なにに縛られる必要もないのだと云う安心が。おのれが皆全て自由だという事が……。全ての力が、立ち上る湯気のように体から消えてしまつていた。心臓が動いているのが不思議なほどだ。肉体がどうしようもなく、けだるい。メルリカの声に、ルキロは少しだけ我に返つた。彼女は、全軍を地球から退かせる命令を発していた。そして、ルキロに視線をやり、一言、

「行け」

ルキロはゆっくりとメルリカに視線をやつた。

「早く消える。それとも残るか。確實に処罰されるだらうがな」

ルキロは口を閉ざしている。メルリカは続ける。

「わたしにも感情はあると云つただろう……これは、悪戯だよ。」

…この、地球人め

地球人め。その言葉の残響がいつまでもルキロの頭の中をかけめぐっていた。

7

ゴ・スイッグの居住区、トキ・ワ・キーレンの部屋である。

ジ・ク・ジャットは驚きの声を隠す事が出来なかつた。ライスカイスの人間で感情を表す叫びなどを発する者は、「異端」を除いてはほとんど例がない。それほどにジャットの驚きは凄まじいものだつたのだ。

キーレンが倒れている。胸部、腹部に大穴を開けられている死骸である。先ほど彼等が殺したのだ。当然、動かない。だが、頭部だけは違つていた。死んでいるはずなのに、何やら音が聞こえるのだ。微かな音だったが、ジャットの聴覚はそれを完全に捉えていた。キーレンの右耳の根本、皮膚が裂けており、そこから鉛色の物が覗いていた。手をかけ、引っ張つてみると、驚くほど簡単に皮膚はそれから剥がれた。それは、人工の頭蓋骨だつた。

トキ・ワ・キーレンは、頭部だけが完全に機械化していたのだ。頭蓋骨、額にあたりに、製造情報を示すプレートらしきものがあつた。地球の文字を理解している者に、読ませてみる。

「……カリフォルニア支局エドワード・ハイアン。一二四九七……」

その男は最後まで喋る事はできなかつた。銃弾がその男の頭部を貫いたからであり、そしてジャット自身も撃ち殺されてしまったのである。

さらに数発の銃声。的確に、その数だけ、そこにあらたな死体が生まれた。

「それを見たものは、同胞といえども生かしてはおけない」五人の男が立つていた。

「旧アメリカ、カリフォルニア州の研究所。ハイアン博士の本物の脳と引き替えに組み込まれた、この頭脳は、たまたま彼だつたとい

うだけだが、タグザムティアの肉体を転々とし、そして初めて我々の肉体にも同調できる事を示してくれた。キー・レンという男を使って。キー・レンはもともと「異端」。脳のいかれていた男だから、摘要し、実験をする事に誰もためらいはなかつた。この頭脳、生命体に寄生せねばいきられない仕掛けとなつてゐる。さて、記念すべきこの頭脳を、息絶えさせるわけにはいかん。「異端」は今ここには誰も存在せぬが、さて、次は誰が……」

一人が一瞬の躊躇も見せず、「自分が」と名乗り出た。

8

はたして戦争と呼べるものであつたのか。後生の史家から見れば実に馬鹿馬鹿しい争いだつたのではないだらうか。たが……宇宙の歴史を考えれば、確かに馬鹿馬鹿しいものではあるが、地球だけに視点を向けると、苦難の歴史はこれからが始まりだつた。それはこの大陸だけでなく、全地球に関係するものだつた。

双方が最初から地球に向けて発表していた自分たちの目的。地球の統治。タグザムティア軍元帥代理メルリカ・カ・レ・ムは、ライスカイスの地球統治を認め、自軍を全て引き上げ、宇宙へと去つた。さて、これらは後日談ではあるが……氣弱になつていていた地球の国々の大半は、異星人の統治をあつさりと受け入れてしまつた。断固反対の意志を貫く国が一国たりとも存在しなかつたのである。その上で、へりくだる態度を意地しながら様々な条件交渉を開始し、自分たちの国を有利な展開へと運ぼうとした。

すつかりと氣弱な体質が染み付いてしまつてゐる地球人の、「何があるうと争いはせず……」「攻めず……」「それが平和を守る事だ……」と云う主張、それはあながち間違いでもなかろうし、美点でもあるだらう。だが、戦うべき戦いというのもも存在するのではないか。そんな気骨のある者たちは、民間の中からあらわれた。

まだ水面下の事ではあるが、民衆たちが護民軍らの協力を得て、

どこかへ集結しつつあるという。軽い損害のエクシユールやディオを集め、独自の色に塗っているらしい。ライスカイスの統治定着後も「革命の赤」として恐れられ、敬われる色となる。……回収班の連中は、無傷のエクシユールのあまりの多さに、タグザムティアの策ではないかと訝しんだものである。遠方でかく乱していくれば、自分たちの戦争がやりやすい……などと考えているのではないか、と。

異星人の統治が世界へと広がっていく中、地球人達は反乱者達が立ち上がりつつある事を噂には聞いていた。それはさらなる不幸が来るのでないかという恐れ、何らかの幸せをもたらしてくれるのではないかという期待などが入り交じつていて、相対的には彼等は常に恐れ、混乱していた。すべての時間が牧歌的に流れていき、国もなにもなく、世界はただ自分の周囲だけ。それが、異星人に襲来により「外」「さらなる外」を強制的に認識させられた。混乱しないはずがない。かくして、地球全体を暗い影が覆い始める。

9

狭くて暗く、暑く、湿度が高く、本来人間の神経が不快に感じる空間である。それがことさらにルキロの気持ちを落ち込ませていたわけではない。ここは、むしろ彼女にとつては安心できる空間なのだから。

レイ・ウーズは高度百メートル程の空中に浮いている。推進力はどの方向にも働いておらず、風任せに宙を漂っていた。

山をそのまま逆さにしたような……蟻地獄のような、大きなクレーターが出来ていた。半径にして三十キロはあるだろうか。広大な、そして水の無い湖である。その中心部、その真上にレイ・ウーズは在った。

ここには、すべてが在った。溶け、崩れた様々な物の残骸が見える。

すでに悲しい気持ちはなかつた。恋人の死すらも、もう悲しくは

なかつた。いや、悲しくはあるのだが、すでにその感覚が枯れてしまつていた。悲しいはずなのになあ……と、自分の心の構造を不思議に思う。だが、体が憶えている記憶はまた別なのか、気がつくと涙が頬を流れていた。やっぱり悲しかつたんだ。ルキロはほつとしみじみとその涙を流す自分を受け入れた。地球上で、自分は何度涙を流した事だろう。自分は弱くなつてしまつたのか。

つまらぬ事を思考し、自分を誤魔化してみせる。

弱くなつた。そうだ、もう、あの都市の地下で、それは気づいた事じやないか。あの、ミイラを見て吐き、泣きわめいた時。……それを、あの青年に見られてしまつた時。自分の弱さに気づいたじやないか。

……あの青年は、どうなつたのだろう。まあ、この状態では、生きているわけもないか。しばらく一緒にいたというのに、名前も聞いていなかつたな。名乗らないし、尋ねもしないんだもの。あの青年は、最後、子供のように怯えていた。結局、人はみんな……。結局、みんな人なんだ。

弱いとは、何だろう。そもそも、強いとは何だろう。

強い、弱い、能力の有無、勝敗……ただ傲慢なだけの無意味な誇りもそんなところから生まれる。なら、全員が強くなればいいのかいや、みんなが弱くても、それをみんなで認めあえばいい。底い合えばいい。

そうだ。弱いから……小さな存在だから……神でない身だから、すべてに耐えられる。

まだ……そう、まだわたしは生きられる。

死ねない。この新しい舞台で、思いきり生きてゆきたい。

ルキロは叫んだ。言葉とも、ただの唸りともとれる、だがとても楽し気な声。反響する。レバーを倒す。急加速。メインスクリーンに映る真つ赤な空が激しく後ろへと流れ始める。顔を伝う汗が光る。ルキロは急加速に顔をひきつらせながらも顔をほころばせて笑つた。声が漏れる。それが大きくなる。とまらなかつた。こんなに大笑い

をした事など、久し振りだつた。何が楽しいのか。自分に問い合わせる。決まつてゐる。今笑つてゐる事に笑つてゐるんだ。

10

エイジは車の屋根の上に座り、呆然としていた。口がだらしなく開いた、文字通り呆けた表情で、定まらない視線で空を見上げていた。目は真つ赤で、周囲にクマが出来てゐる。

銃を握りしめてゐる。血の氣の引いた青い顔をしていた。

弟が死んだ。

強力な薬を打たれ、飲まされたタクに、激しい副作用が訪れた。泣き叫び、血と、意味の滅裂した言葉とを吐きながら、体を痙攣させた。睡眠剤を多量に注射し、かるうじて寝かしつけた。それでも震えや汗はとまらない。呻き、歯軋り、うわごとが絶えない。舌を噛んで血が出てからは、猿ぐつわをかませた。ベッドに大の字に縛られている。

エイジたち現代の地球人は、肉体に様々な抗体が宿つており、少々汚染された川の水を直接飲む事など、別に気にするほどの事でもなかつた。だが、この付近の川の水は危険度が高く、タクには医者の用意した安全な水を飲ませた。

苦痛から完全に解放されたわけではないのだろうが、とりあえずタクは暴れるのをやめて、おとなしくなつた。それに安心したエイジは、そのまま眠つてしまつた。医者はその一時間前に、エイジに薬を渡し、自宅へと帰つた。

エイジは無理な姿勢で寝てゐた。ベッドの柱を背もたれに、床に座り、脚をのばし、前に倒れ込むようにしてゐる。腹が圧迫されて窮屈だが、看病であまりに疲れていたため、ぐつすりと眠り込んでいた。

小用で目が覚めたエイジは、それに気付いた。驚愕、焦燥などの思いが、滝のようにどつと脳に飛び込んでくる。タクの姿が消えていたのだ。左手を縛っていた紐がほどかれており、右手を縛っていた紐は輪の形を保っていたが血で赤く染まっていた。エイジはタクの名前を叫びながら、外に飛び出した。

すぐにみつかった。それは、すでに冷たい体となっていた。川の流れに顔をつつこみ、死んでいたのである。

直接の死因は、何か分からなかつた。水が肺に入り込んでいなかつた事を考へると、手で水をすくつて飲んでいる最中に、「恐れていた時」が来てしまつたのか……

黄色の海は、あの時と全く変わつていないように見える。実際、朝から晚までいても何の変化も起こらない。ただ……遙か向こうで大爆発が起きた時は、その激しい揺れと風は、本物の海のような波を……津波を起こした。もう、あの戦いの時のアロ・イーグビズ・ヴィムの残骸は砂に埋もれてしまつており、影も形もない。

あの戦闘の時にいた、もう一機。赤っぽい色した……。あれがタクを殺したんだ。学校に行けると、喜んでいた弟を……。

置いてくればよかつた……。ルキロに謝つて、あの時、一人で帰つていればよかつた。

ルキロ……酷く懐かしく思える。もう、リーアック隊とかいうチームと合流して、自分の星へと帰つてしまつたのだろうか。きっとそうなのだろう。婚約者がいるつて云つてたし。……結局、地図のあの場所には行けたのだろうか。

あの機体、なかなか来ないな。あたりまえか。だが、ここにいるしか、おれには出来ない。でも、こんな拳銃が何の役に立つ。誰が乗つているんだろう。誰だらうと、構うものか。ありつたけの銃弾をぶちこんでやる。その後、しがみついて、はいのぼつて、扉をこじあけて、首をかききつてやる。来なければ、こちらから行つてや

る。汚れた地だろうと、知つたこつちやない。

その時、舞い上がる黄砂の向こう、遠くで何かが光つた。

あれは……

エイジは、右手の銃の感触を確かめた。エイジの目に光が戻つた。

11

風をきる。空がどんどん後ろへ流れしていく。今までにない気分の昂揚を感じていた。

すべての鎖から解き放たれ、今、自分は自由だつた。

おさえようとしても笑みがこぼれる。心臓の鼓動がはやまる。自分のために楽し気なビートを刻んでいる。

地位、血、心、過去、様々なものから解放された。

ウェルに感謝していた。命を救つてくれただけではなく、これら

の希望を与えてくれたのだ。彼の分まで生きようと思つ。

とりあえず、たよる場所。たよる人。すぐにエイジの顔が浮かんだ。行つてみよう。地球人として暮らしたい。素直にそう頼んでみよう。

ルキロは自分の駆る機体レイ・ウーズと、そして自己の魂とを飛翔させた。トラックや、ゾ・ヴィムに乗つてここまで来たが、それをそのまま戻るつもりだ。ルキロの魂はいまにも爆発しそうなほどに激しく震えていた。沢山の希望と、ちよつぴりの不安とで。

もうすぐ汚染地帯、黄色の海が終わる。

レイ・ウーズの速度が落ちた。「奇跡」を、そのカメラが捉えたのだ。

正面の画面に、エイジの姿が映つていた。ルキロが乗つてきた、あのトラックの屋根に乗つっている。疲れたような、暗い顔をしている。

わたしを待つていてくれたのかな。いろいろと迷惑をかけたな。あれ、タクはどこだろう。

さらに減速をし、地面すれすれの低空飛行をする。

画面の中、エイジがどんどん大きくなつてくる。

もう、待ちきれない。

ルキロはレイ・ウーズを静止させるべくレバーを引くと同時に、胸部扉を開けた。身を乗り出し、口を開く。

エイジ！

その言葉は一声たりとも発せられる事はなかつた。

ルキロの腹部を何か熱い物が貫いた。続けて心臓を、そして喉を貫いた。

身を乗り出しかけていた体は、その勢いに押され、見えない巨人の手に押さえ付けられるように激しく操縦席へと座つた。うなだれたように下を向いた。もう、その目はどこを見てもいなかつた。

光が消えていく。

「喜び」から「疑問」へと転じ始めるほんの一瞬、そんな表情のままかたまつっていた。

かつてエイジから、死ぬ間際にソーマターのように過去の印象深い事が全部頭をよぎると聞いた事があった。だが彼女は何も見る事なく、じっくり何を思う事もなく、輝いていた「生」から一瞬にして未来永劫果てなく続く闇の中へと落ちたのである。

12

その男の足取りはどうみても病人のそれであつた。その表情も虚ろであつた。

生來の白い肌に病的な色が加わり見る人々をぎょっとさせた。

その青年も、もともとは美しい顔立ちだつたのかも知れないが、と地球上たちは想像する。だが今は、頬はこけ、口はだらしなく開き、涎をたらし、薄青色の髪の毛がところどころ抜け落ちて頭皮をのぞかせていた。片方の瞼が晴れ上がりつており、目の形がおぞましく変形してしまつていて。

人の賑わつている市場だ。みな、その青年を見ている。

「愚かな地球人に対する、あいつらの統治が始まるとよ」

中年の男が髪でびっしり覆われた面の奥から、まるで汚いもので

も見るような目付きで青年を睨み付け、吐き捨てた。

「あいつらに逆らう軍が組織されるらしいぜ」

「なら、今あいつをやつちまうか」

「いや、まで。どうせあいつは……」

冷静な一人が制止する。

「黄色の海を、歩いて来たんだ……」

「なんで、まだ生きているんだよ」

「でも、もうもたねえんじゃねえか。肌だつて、ぼろぼろじゃねえか」

青年は、肉が完全にそげ落ち、骨と皮だけになつていた。
よろよろと歩く。みな、避ける。脚をひっかけてやろう、などと
思う者もない。

青年は笑っていた。

声をたてて笑っていた。

それは壊れた機械のよつな……下手な役者のような……とても自
然ではない作り物めいた笑い声だつた。
いつしか人の輪が青年を囲んでいた。
青年は歩みをとめた。

高らかに笑いながら、両手を横にひろげた。

叫んだ。

「みる。おれ達だつて、笑えるのだ。貴様らと、どいつも違つと
いうのだ」

男の笑い声がどんどん大きくなつていった。
涙が頬を伝つた。

それは、真つ赤な血の涙であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1295f/>

アレグリア・バンディツ

2010年10月20日00時58分発行